
女子高生メイドの異世界旅行記

神無森 皓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女子高生メイドの異世界旅行記

【Nコード】

N0098S

【作者名】

神無森 皓

【あらすじ】

自称平凡な女子高生の朝宮瑛莉。父子家庭に育った彼女は、家事能力ゼロの父親に代わって家事を行う一家の主婦であり、同時に貯蓄のためにメイド喫茶でバイトに励む勤労女子高生でもあった。バイト先の裏手で奇妙な格好をした男性に出会った彼女は、彼と敵対する魔術士との戦いに巻き込まれた挙げ句、転移の魔術によって異世界に飛ばされてしまう。異世界で彼女を待っている運命は……？とりあえず目標は完結。更新はゆっくりりめになるとありますが、それでもよろしいという方お付き合下さい。

1-1 朝宮瑛莉の事情

あたしこと朝宮瑛莉^{あさみやえいり}は、ごく普通の女子高校生である。

HRの終了を告げるチャイムが鳴り響くのと同時に、あたしは通学カバンを引っ掴んで教室から走り出した。

ざわつき始める廊下を一気に駆け抜け、階段を二段飛ばしで降りていく。

人気のない昇降口で靴を履き替えると、上履きを下足棚に放り込んで駐輪場へと向かう。

生徒玄関から少し離れた場所に停めてある（玄関に近いところに停めておくと、遅刻寸前に駆け込んでくる連中の自転車に埋められて、引っ張り出すのにすごく苦労する羽目になる！）赤のママチャリのロックを解除。

いざ向かうは、学校からチャリで15分の駅前商店街！

『本日の目玉商品、卵一パック88円は予定数量に達したため終了いたしました』

15分後、あたしは駅前のマルフクスーパーの卵売り場に張られ

たそっけない張り紙を前に、がっくりと肩を落としていた。

「うそ、3時からの特売なのにもう売り切れちゃったの……？
お一人様1パック限定だったのに、いくらなんでも早すぎるよ……」

不況のあおりを受けてか、きれいに空になっている特売卵の棚を
あたしは恨めしい気持ちで睨む。残っているのが高価なブランド卵
ばかりというのも腹が立つ。

今朝のチラシでチェックした限りでは、他にめばしい特売品もな
い。

あたしはため息を吐くと、とぼとぼとした足取りでスーパーをあ
とにした。

スーパーの駐輪場に停めておいた自転車に乗って、あたしが向か
ったのは駅から少し離れた小さな商店街だった。

通りに軒を並べるのは、昔ながらの八百屋さんに魚屋さん。

あたしは自転車を押して歩きながら、店先に並ぶ品物を目でチェ
ックする。

（マアジの生きのいいが入ってるな……けど、冷蔵庫に入ってる
開きを先に片付けちゃわないと。お味噌汁は塩わかめの残りがある
し……）

あたしは八百屋さんの店先で足を止めると、顔なじみのおじさん
に声をかける。

「こんにちは、おじさん！ 今日は何にかいい葉物入ってる？」
「お、いらっしやい！ エーリちゃん！」

愛想良く答えるのは『山崎青果店』の主、山崎利夫さん。あたしが生まれるよりもずっと前から、この店を続けているという大ベテラン。

店には山崎さんが毎朝市場で仕入れてくる、新鮮な野菜が箱に入ったまま並んでいる。

「今日は……そうだねえ、小松菜がおすすめかな。一株100円のところ、いつも来てもらってるお札に二株で150円！ ついでにカイワレもつけちゃおう！」

「カイワレよりも、トマト何個かつけてもらえるほうが嬉しいなあ……熟しすぎたやつでいいから。買い置きのパスタの賞味期限が近いから、トマトソース作りたいんだよね。あ、その玉葱も一袋ちようだい！ あと、このバナナちよつと黒くなりかけてるけど、一緒に買ったら値引きしてもらえる？」

矢継ぎ早に言うと、山崎さんは「エーリちゃんにはかなわないなあ」と笑う。

物陰に置いてある段ボールの中から、真っ赤に熟したトマトを何個か取り出すとビニールの袋に入れ、あたしが指差した玉葱やバナナ、それに小松菜の立派な株二つと一緒に、あたしに差し出してくれる。

あたしはカバンの中から常時持ち歩いている折りたたみのナイロンバッグを取り出し、受け取った野菜を玉葱、バナナ、トマト、小松菜の順にしまう。

「全部でいくら？ おじさん」

「いつも頑張っているエーリちゃんに免じて、端数切り捨てで50

0円！」

箱についている値札をちらっと見て、頭の中で計算してから、あたしは笑顔で山崎さんにお礼を言う。

「ありがとう！」

きっかりワンコインで会計を済ませると、あたしはレシートとサ―ビス券を受け取って足取りも軽く我が家に向かった。

あたしこと朝宮瑛莉は、ごく普通の女子高校生であり――同時に『主婦』でもある。

16の身空で、あたしが一家の家事と家計のすべてを担うことになったのには、もちろん理由^{わけ}がある。

というのも、現在朝宮家には家事を担うべき主婦――母親がいない。

あたしが三歳の時に、病気で亡くなったのだ。幸か不幸かあたしは母親のことをほとんど覚えておらず、寂しいと思うこともあまりない。まったく思わなかったと言えば嘘になるけど、それ以上の問題が主婦不在となった我が家にはあった。

現在39歳になる我が父には、哀しいくらいに家事の才能がなかったのだ。

料理を作れば焦がすのが当たり前。二度ほど冗談抜きで火事を出しかけ（どうして野菜炒めを作っていて火事を起こしかけるのか、あたしにはわからない）、一時期台所には消火器が5本ほど常備してあった。

電子レンジを使えば素材にかかわらずなぜか必ず爆発し、洗濯機に至っては使い方すらわからず、溜め込んだ洗濯物にカビが大発生して全部ゴミに出したこともある。

他にも掃除をすれば必ずなにかを壊し、皿を洗って片付けるだけでも1ダース中2枚か3枚が生き残れば上出来という……信じがたい才能の持ち主なのだ。

そんなわけで、物心がつくようになるのと同時に、あたしは家事を少しずつ受け持つようになった。

そうしなければ、まともな生活も送ることができないのだから仕方ない。

あたしは小学校に上がる前に洗濯機と掃除機と電子レンジの使い方を覚え、簡単な読み書き計算をマスターする頃にはひととおりの料理を作れるようになり、九九を習う頃には家計簿を付けて出費を切りつめることまで始めていた。

幸いなことに、あたしには父親の家事音痴は遺伝しなかったようだ。

むしろ料理も片付けも好きだし、チラシをチェックして特売商品を見事ゲットした時にはえもいわれぬ達成感を覚える。安く買ってきた食材を無駄なく上手に使い切り、浮かせたお金を貯金箱に入れる時の満足感！

……16歳の乙女として、この生活はいかなものかと思う時もあるけれど、まあ……こればかりは仕方がない。

なぜなら、我が家の大黒柱である父親の職業は、自由業といえは聞こえはいいけど先の保証などなにつない小説家（しかもライトノベル専門）。

大学在学中に賞を取ってデビューしたはいいものの、大ヒットを飛ばすこともなく、かろうじて生活に困らない程度の収入があるのみ。一部ではマニアックな人気があるみたいで仕事にあぶれることはないんだけど、出版部数が伸びないため家計は常に火の車だ。

でも、父親が好きでやっている仕事なんだから、娘としては応援してやりたいという気持ちもあるわけで。

家事は嫌いじゃないし、生活費を切りつめる方法を考えるのもゲームみたいで悪くない。

友達と遊ぶ時間はどうしても削られがちになるけど、小学校の頃から学校が終わるなり家に飛んで帰っていたため、あたしにはあんまり友達がいらない。学校で会って話をする程度の友達はいるけど、学校の外で会って遊ぶってことはほとんどない（お金もかかるし）。

ただ、そうやって出費を削っても、入ってくるお金に限度がある以上貯金はなかなか増えず……あたしが今、急いで家に向かってるのは、そのへんにも理由があったりする。

「ただいま〜！」

駅から自転車で10分。閑静な住宅街にある庭付き一戸建ての前であたしは自転車を停めると、二重のロックをかけて玄関の扉を開けた。

「あ、おかえり〜」

リビングに入ると、ノートパソコンの前に座っていたあたしの父、^{たもつ}朝宮有が顔を上げる。

身長185センチの長身に、外国人俳優のような彫りの深い整った造作。少し色の薄い癖っ毛の髪を、長く伸ばして首の後ろで束ねている姿はちょっと39歳には見えない。よれよれのジーンズにフリースのパーカーという格好のせいもあって、あたしの『兄』といっても楽勝で通用しそう。

「仕事始めてたの？ 珍しく手を付けるのが早いね……？」

言いながら、あたしがパソコンの画面をのぞき込もうとすると、顔色を変えて画面を身体で隠そうとするので、あたしはぴんときた。

「あっ！ お隣のウメが脱走してるっ！」

庭先を指差して叫んでフェイントをかけ（ウメはお隣で飼ってるゴールデンレトリバーの名前。父親は大の犬好きだ）、注意が逸れたところで強引にパソコンの前から父親の身体を押しつける。

「あ〜っ！ やっぱりまたネットゲで遊んでたな〜！！」

「ウメなんていな……あ、いや。その、ちょっと気分転換に……」

「あんたの気分転換は長すぎるっ！ なに、このログ時間！ あたしが学校行ってからずっとじゃないっ！！」

問答無用でログアウトさせて（父親が「ぎゃー、パーティー壊滅するー！」と叫ぶのは当然無視）、あたしは買い物袋を手にキッチンへと向かっていった。

この家は両親が結婚した直後、父親が新人賞を取った時の賞金と母親の貯金を頭金に、30年ローンを組んで購入したものだ（ローンの名義は当時働いていた母。デビューしたての新人小説家にローンなど組めるはずもない）。

その翌年にあたしが生まれ、あたしが3歳の時に母親が亡くなると、父親は遺産としてこの家をローンごと受け取ることになった。部屋数と立地条件を考えれば、格安の家賃と言えるんだろうけど……ボーナスも住居手当もつかない職業の父親を持つ身としては、ちよつと不相応かなという気がしなくもない。

ここを売って安いアパートにでも移れば、ローンの残りを差し引いたとしても、あたしが社会に出て働くくらいまでの間は楽に暮らせるんだろうなあ……とか。

だけど、父親にはまったくここを売ろうという意思はないらしい。いわく、

『ここは茉莉花^{まりか}さんの家でもあるからね。勝手に売ったりしたら、俺が怒られちゃう』

……ロマンチスト中年め。見た目のせいもあって、ご近所の奥様

たちには大人気なのに父親は今でも母親一筋で、仏壇にはちよつとした甘いものとお花を欠かさない（昔から、あたしのおやつは仏壇から下げたお菓子だ）。

まあ、あたしもこの家には色々と思ひ入れがあるし、その点では父親に賛成なんだけど……それでも、この家を売ったら大学に行くお金くらい楽に出せるんだよなあ、とかついつい考えてしまう。

もちろん本気で売ろうなんて考えちゃいけないけど、つい……ね。

「安売りの卵買い逃しちゃったから、オムレツの予定はキャンセルね。小松菜のお浸しに、アジの開きを焼いて……どうせなら和食で統一したいから、肉じゃがでも作るか。お味噌汁は豆腐とワカメで……」

言いながら、あたしはトマトと小松菜を冷蔵庫の野菜室に入れて、玉葱はシンク下の収納庫へ、黒くなりかけたバナナはダイニングテーブルの上の果物籠に放り込む（これはもう少し熟すのを待って、パン代わりのバナナブレッドを作る予定）。

たたんだ買い物袋をカバンの中にしまいながら、あたしは二階の自分の部屋に向かう。

通学カバンをベッドの上に放り投げ、紺のブレザーの制服からTシャツとジーンズの楽な格好に着替えると、再びキッチンへ。

椅子の背中にかけてあるエプロンを装着すれば、完全に戦闘態勢完了だ。

ちゃちゃつと手早くお浸しと肉じゃがを作って、お浸しはラップをかけて冷蔵庫の中へ。肉じゃがは鍋に入れたままにして、お味噌汁を作りながらアジの開きを焼く。お味噌汁が完成したところでお米を研いで、炊飯器のタイマーをセット。

よし、これで今日の夕ご飯の準備は終わり。

そこで時計を見ると、4時半を回ろうとしているところだった。

「うわ、もうこんな時間！ お父さん、肉じゃがとお味噌汁は食べる前に軽く温めてね！ 火にかけたら絶対に目を離しちゃダメだから！ あと、ご飯が炊きあがったら、軽くかき混ぜておくのを忘れないで！」

ここそそとネットゲ再開しようとしている父親に向かって怒鳴り、あたしはエプロンを椅子の背中に引っかけると部屋に走っていく。お財布と定期をジーンズのポケットに入れ、上着を持って階下に戻る。

「行ってきます！」

聞こえているのかどうか不明だったが、その一言だけを残してあたしは玄関を飛び出すとロックを外した自転車のサドルにまたがり、駅に向かって全力で走り出した。

1-1 朝宮瑛莉の事情（後書き）

新作始めました。全然ストックができていないので、途中でしばらく中断する恐れもありますが、ゆっくりゆっくり更新して行こうと思います。

1-2 メイド喫茶より愛を込めて

「お帰りなさいませ〜！ ご主人様！」

約30分後。

あたしは2つ離れた駅の近くにあるメイド喫茶、『シャリーズ』の店内にいた。

もちろんお客としてではなく、ふんわりしたパフスリーブの黒のワンピースに、フリルをたっぷり寄せたエプロン、ヘッドドレスも装着した完璧なメイドさん姿である。

『シャリーズ』は雑居ビルの一階にあるこぢんまりとしたお店で、アイアンワークで装飾された出窓からは、外の日差しと――通行人の好奇の視線までもが、レースのカーテン越しに入ってくる。

店内は木目を生かした、アンティーク調のちよっと少女趣味な内装。

テーブル席7つに、5席ほどのカウンター席が1列あるだけの小さなお店だ。

あたしは2ヶ月ほど前から、このお店でアルバイトをしている。

きっかけはスーパーの安売り商品を追って、この近くまで自転車で来た時のことだった。

『やめて下さい——きゃあっ！』

ビルとビルの間の、狭い道から聞こえてきた声に、あたしはつい足を止めてしまったのだ。

このあたりは飲屋街も近く、あんまり柄の良くない連中がたむろしているのを見かけることも多い。

聞こえてきたのが男の声だったら、ちょっと迷っていたところだったけど……若い女の子の声とあっては無視することなどできない。半ば反射的に自転車を停めて、路地をのぞきこんだあたしの目に映ったのは、メイド服を着た女性を取り囲んだ4、5人の男たちの姿だった。

だらしなくジャージを着崩した男たちの手に、カメラがあるのに気づくのにかった時間は0・3秒。

女性のメイド服の胸元が、引きちぎられたように開かれているのに気づくまで0・5秒。

『——このクソどもがあああっ！』

あたしがカメラを構えた男の一人の後頭部に、怒鳴りながら走りこんで蹴りをかますまでにかかった時間は3秒フラットだった。

はつきり言って自慢だけど、あたしは喧嘩には自信がある。

というのも、うちの父親はあんな外見で鬼のように強く（帯は持っていないけど、空手と柔道は有段者クラスの腕前だそうだ）、小さい時から組み手の稽古に付き合っていた結果、そこらの男なら片手でのせるくらいの腕前になってしまった。

もちろん、無闇に他人様を傷つけるような真似はしないけど……女の子を複数で取り囲んでどうしようって輩に、手加減する必要なんかないよね？

5分後。正拳突きと回し蹴り、それに頭突きで沈めた男たちを（全部で5人いた）警察に突き出すべきか考えているあたしに、胸元を手で押さえながら女性が声をかけた。

『あの……ありがとうございます？』

語尾がちよっと上がったのは、あたしの年齢が見当つかなかったせいだろう。

あたしは父親に似ず純日本人（ついでに十人並み）の顔立ちなんだけど、私服でいるとよく年上に間違えられる。あんまり行かないスーパで、レジ籠をぶら下げて特価品の鮭の切り身なんかを睨ん

でいると『一つどう、奥さん?』と店員に声をかけられるくらいだ。

特別老け顔ってわけでもないし、制服だったら年相応に見られるんだけど……生活疲れが顔ににじみ出ているとは、ちよつと思いたくないなあ。

ともあれ年上なのか年下なのか迷っている様子の女性に（二十歳は越えていると思うので、間違いなく年下ですよ!）、あたしは足元で気絶している男を蹴っ転がしながら答えた。

『いいえ。それより、大丈夫ですか?』

『え、ええ……』

被害は服くらいだから、と弱々しく微笑んで女性は答える。

服だけだって、十分な被害だ。そうでなくたって、大の男5人に囲まれてどんな目に遭わされるかと怖い思いをしただろうに……

『こいつら警察に突き出します? なんならあたし、証人になるけど』

この状況だと、あたしが傷害罪に問われそうな気もしたが、女性の受けた被害を思えばその程度はたいしたことじゃない。

だけど女性は少し考えて、首を横に振った。

『いいわ。この辺は物騒なのがわかって、近道で裏道を通ったわたしにも落ち度はあるし。それに……この格好だから』

少し困ったように笑って言う女性に、あたしは内心でああ、と思う。

確かに、その格好で警察を呼んだら奇異の目で見られるのは確か

だろうなく　　どういいうわけでそんな格好してるのかは知らないけど
……

『そう……じゃ、次は気をつけて下さいね。また運良く誰か通りかかるとは限らないし』

あたしは言って、路地の外に停めた自転車に向かおうとする。

その時、思い切ったように女性が声をあげた。

『あの――ちょっと待って！』

妙に切羽詰まったようなその声に、あたしは思わず足を止める。

『なに？』

『……あの、助けてもらったお礼に、というのもなんだけど……もし急いでなかったら、お店寄っていつてくれませんか？　わたしのバイト先……すぐ近くなの。たいしたお礼はできないけど、お茶とケーキくらいおごらせて……？』

あたしがぐらつときたのは、断じて『ケーキ』の一言だったわけじゃない。

そりゃ確かに、年に三回（あたしと父親の誕生日およびクリスマス）しか、買ってきたケーキを食べる機会なんてないけど。

だけど断じて、これだけは言っておく。

あたしが後の先輩となる早樹はるかさんの申し出を断れなかったのは、彼女の上目遣いかつ『こんなことを言って困らせたらどうしよう』という不安をのぞかせた、破壊力抜群の眼差しのせいだ。ふわふわのロングヘアをした、メイド服がこれ以上ないくらいに似合ってる綺麗な女の人にこんな目つきで頼まれ事をしたら、断れるわけないって！

「エーリちゃん、これ葡萄のテーブルのお客さんをお願い」
その早樹さんが差し出したお盆を受け取って、あたしは滑るような足取りでフロアを横切って窓際のテーブルに向かった。

「お待たせいたしました、旦那様」
普段の喋り方とはまったく違う、しとやかな口調で言ってテーブルに注文の品を置く。

歩き方も喋り方も、お店のオーナーである祐貴子ゆきこさんに猛特訓を受けたものだ。祐貴子さんは趣味でこの店を開いたというだけあって、メイドの見た目から動き方、喋り方まで徹底的にこだわりを持っていた。

いわく、『女の子がメイド服を着ているだけじゃ、ただのコスプレ喫茶でしょっ！』。

上質な生地で作られたメイド服は、なんと祐貴子さんのお手製。きちんと採寸し、なおかつ一人一人の体型に合わせてさりげないアレンジが入っているため、身体の線や動きが驚くほど綺麗に見える。メイクについても一指導受け（当然っちゃん当然だけど、あたしは

普段からメイクなんてしてない。化粧品だって高いし）、普段は一本に束ねている長い髪を下ろせば、とびきりの――とまでいかなかったも、ぎりぎり及第点くらいの美人の完成だ。

さらには言葉遣いや立ち居振る舞いの特訓をみっちり受けて（まさしく『修行』というのがふさわしいハードなトレーニングだった）、採用が決まってから一週間近くたって、ようやくお店に立つことが許されたのである。

その祐貴子さんの『こだわり』が、あたしがこのお店で働くことになった一因だった。

お茶とケーキ（レモン風味の絶品クリームタルト！）をご馳走になって、早樹さんにお礼を言って店を出て行こうとしたあたしを、カウンターの奥から祐貴子さんが呼び止めたのだ。

『あ、ちょっと待って！』

一見地味なOL風の格好をしたその人が、お店のオーナーだということは早樹さんに聞いてもう知っていた。

なんだろう、と首を捻りながら近づいていったあたしの手をがっしと握って、祐貴子さんが口にした一言は、

『――あなた、うちで働いてみる気ない？』

『……はい？』

ぽかんとするあたしを店の裏手に引っ張って行って、祐貴子さんは熱心にあたしをかきくどいた。

いわく、

『今時珍しい純正の黒髪に、きりっとした顔立ち！ ふわふわひらひらした可愛い女の子だけじゃダメなの！ あなたみたいな娘を探していたのよ！ しかも困っている女の子を助けに、男の集団に立ち向かっていく度胸と実力！ 完璧だわ！！』

『……いや、あの』

『どこかでバイトしてる？ それとも、もしかして社会人？ だったら夜だけでもいいから……武闘派メイドさんは永遠の乙女の憧れなのよ！！』

いろいろと突っ込みたいところはあったものの、あたしが口にしたのは次の一言だった。

『いえ……その、あたし未成年なんで。遅い時間のバイトは無理です』

『え？』

目をむいて固まった祐貴子さんに、あたしは常に持ち歩いている学生証を見せる。

『……高校、生？』

『はい。バイト探してはいるけど、遅くなるのはまずいし……それに、あたし接客は向いてないと思うんで……』

あたしの言葉を、祐貴子さんは半分も聞いていないようだった。ふるふると肩を震わせて、学生証の写真とあたしの顔を見比べていたかと思うと、食いつきそうな勢いであたしに向かって言ったのだ。

『そのギャップ超萌えなんですけど！ もう、いったいどこまで属

性独占すれば気が済むの！？ 恐ろしい子……！』

『いやあの、ちょっと？ 人の話聞いてます？』

『こんな逸材逃したら、三年はあたし泣き暮らす自信があるわ！
あたしの美容と野望のためにお願ひ、助けると思っとうちで働いて
！ 時給はよその倍出すから！！』

——最後の一言が、どうやって断ろうかと考えていたあたしの思考を停止させた。

正直、人生初のバイトがメイド喫茶ってどうよ、という気がしな
くもなかったけど。

だけどうちの父親の職業が職業なので、オタク文化にはそれなり
の免疫もあったし（資料と称して父親が買ってくる、漫画やライト
ノベルもけっこう読んでたりする）、ケーキを食べている間に見た
限りではお店の雰囲気も悪くなかった。

それに、相場の倍出すという時給はなにより魅力的で……

結局あたしは、ほとんど反射的に『やります！』と答えてしまっ
ていたのだ。

もちろん学校には内緒でだけど（バイトは許可さえ取ればOKだ
けど、まさかメイド喫茶でバイトするなんて言っって許可がもらえる
とは思えない）、メイクや衣装に加えて学校でかけている遠視用の
眼鏡（軽い遠視なので、文字を読む時は眼鏡が必要）を外せば、ま

ず絶対にあたしとはバレない自信があった。

……遠視用の眼鏡って、凸面鏡だから若干目が大きく見えるんだよね。

ありていに言って、眼鏡をかけているとあたしは年齢よりも年下に見られがちなのだ。

ついでに、そのことを祐貴子さんに話した時の反応がまた劇的で、『さらに年下メガネっ娘の要素まで！？ 萌え要素のマイスターでも目指しているのっ！？』と絶叫するなりしばらく机に突っ伏して動かなくなった。

……大丈夫かなこの人、とちよつと不安になったことは言うまでもない。

「お砂糖はいくつになさいますか？」

控えめな笑みを浮かべてあたしが言うと、若い男性客は「二つ」としまりのない表情で答える。

砂糖くらい自分で入れろ！ と正直思うけど、これがお店の営業方針なのだから仕方ない。

オムライスにケチャップで文字を書いたり、客と一緒にゲームするような真似はしないかわりに（あれはメイド喫茶じゃなくてもできるサービスだというのが祐貴子さんの弁）、訪れるお客さんを本物の『ご主人様』としてもてなすのが、このお店のやり方だ。

だから便宜上メイド喫茶ってことにはなってるけど、働いているのは女の子だけじゃなくてティールコートに身を包んだ男性も何人かいる（シフトに入っているのは、たいてい一人か二人だけ）。お客さんの比率も男女が1…1くらい。

そのおかげか、店内で大騒ぎするようなお客さんはおらず、店内には控えめな音量の音楽と話し声だけが満ちている。

「どうぞ。ごゆっくりおくつろぎ下さい」

あたしは角砂糖を落としたコーヒーを静かにかき混ぜると、お客さんの前に置いて一礼する。「ご用がおりでしたら、またお呼び下さい——失礼いたします」

愛想たっぷりとは言えない物言いだけど、あたしはこれでいいらしい。

メイド（それに執事も）一人一人の個性に合わせて、祐貴子さんは『キャラクター』を設定しており、それに合わせた喋り方や受け答えをするのもこの店の特徴だ。

あたしのキャラクターは、『クールな武闘派メイド』。……クールってなんですか？

まあ、あたしはあんまり愛想笑いが得意なほうじゃないので、それに助けられている部分があるのも事実だけど。

ついでに『武闘派』のほうは、バイトを始めてそう経っていない頃、店の中で他の女の子にしつこくからんできた（他の店でやっているようなサービスをやれ、等）連中がいて、軽〜く撫でたところ一発で定着してしまいました。

……正直クビになるのを覚悟してやったのに、客も含めて拍手喝采になるってどういうことなんだか。

「もう上がっていいわよ、エーリちゃん」

9時過ぎに祐貴子さんに声をかけられ、あたしはさりげなくフロアに残るバイト仲間に目礼して店の奥に入っていた。

店の奥には休憩室と、男女別になっている更衣室とがある。

喉が渴いたあたしは、更衣室のロッカーの中に入れておいたペットボトル（中身は家で入れてきたお茶）を出し、直接口を付けて飲みながら携帯のメールをチェックした。

このバイトを始めた時に、父親から買い与えられた携帯だ。

さすがに無断でバイトをするわけにもいかず、父親に話した時に（メイド喫茶って聞いて、目を輝かせて「行っている!？」って聞くのはうちの父親くらいだと思う。もちろん即座に却下したけど）帰りが遅くなった時のためにと買ってきたのだ。

父親の大昔のコレクションだという、某落ちゲーのマスコットのストラップを付けた携帯に入っていたメールは一件。

『肉じゃが美味しかったよ（^^）／ 帰り遅くなるなら、迎えに行くから電話してね』

……本当にメール好きだなあこの人。というか、あたしに携帯を買ってきたのも、メールを出す相手を増やしたかったからじゃないの？

そんなことを考えながらペットボトルの蓋を閉め、メールを打ち返そうとした時だった。

——ズウウウウン！

店の裏手に面した窓の外から、なにか重いものが落ちてきたような腹に響く物音が聞こえ、あたしは思わず携帯を取り落としそうになった。

1-2 メイド喫茶より愛を込めて（後書き）

ようやくタイトルの「メイド」まで到着いたしました。まだ「異世界」と「旅行記」が残っていますが……いつになったら看板に偽りありじゃなくなるんだろう（汗）

ちなみに瑛莉の携帯のストラップは、カー○ンクルという設定。実際にそんなストラップがあるかどうかはわかりませんが（あったら欲しいくらいです）、作者の個人的趣味で決めました。

1-3 現実と非現実の境界線

「――なにっ!？」

あたしは反射的に身をすくめて、窓の方を見た。

携帯を無意識にポケットにしまい、ペットボトルを机の上に置く
と窓辺に駆け寄って、磨りガラスの入った窓をがらりと開ける。

最初に考えたのは、交通事故だった。裏口が面しているのは行き
止まりの小路だけど、その外の通りで車同士がぶつかり合うような
大きな事故でもあったのかと――それにしても、音がずいぶん近か
ったけど――思ったのだ。

けれど、開かれた窓の向こうにあったのは、予想だにしない光景
だった。

表通りへと続く細い小路の途中に、人が一人うつ伏せに倒れてい
たのだ。

それを見た瞬間、あたしの脳裏をよぎったのは、『交通事故の衝
撃でここまで跳ね飛ばされてきた』『近くのビルから飛び降りた』『喧嘩から逃げてきた(さっきの音とは無関係)』という三つの可
能性だった。

正直見なかったことにしたかったなく、と思わないこともなかったけど。

さすがにそうするわけにもいかず、あたしは裏口のドアへと急ぎ足で向かう。

もしも怪我をしているのだったら、救急車くらいは呼んでやらないと。ここで命を落とされでもしたら（飛び降りだったらそれで本望かもしれないけど）寝覚めが悪い。

そう思って裏口のドアを開け、倒れている人影に駆け寄ったあたしは知らず困惑したような眩きを洩らした。

「え………？」

眩きの理由は、目の前に倒れている人物の風体にあった。

黒いマントのような――長衣ロブとでも言えればいいのだろうか？ 足首くらいまでの長さのある奇妙な衣服を身にまとっていたのだ。

表通りから届くわずかな明かりが、衣服の襟や袖口に施された銀の刺繍を鈍く光らせる。

艶やかな黒髪は腰まで届く長さで、まっすぐなその髪を首の後ろで一本に束ねている。うつぶせのため顔はわからないけれど、180センチ以上ありそうな身長と体格から見て、たぶん男性だろう。

その手には長い――身長と同じくらいの長さがある金属の棒が握られている。

「う………」

立ちすくんでいるあたしの前で、男性は低く呻いて身動きした。

ゆっくりと上げられた顔はまだ若く、二十歳そこそこといったところだ。暗がりにもそこだけ白く浮き上がって見える顔は驚くほど整っている。切れ長の黒い目に高い鼻梁、テレビでもなかなかお目にかかることのない美形は、さらに驚くべきことにどう見ても日本人ではなかった。

アジア系でも欧米系でもない——どこか神秘的な雰囲気を漂わせた異国的な容貌。

「……っ！」

その顔が痛そうにしかめられるのを見て、あたしは彼が怪我をしていることを知った。

黒い服のせいで気づかなかったが、腕のあたりを痛そうに押さええている。

「……大丈夫!？」

男性の側に屈み込みながら、あたしは彼に声をかけた。

途端にはっと顔を上げた男性の目には、信じられないとでもいうような驚きの色が浮かんでいた。

……もしかして、あたしの格好のせいでしょうか？

確かに、ここにメイド喫茶があるってわかっていなかったら、あたしの格好は奇異に見えるかもしれないけど……服装に関しちゃお互い様だと思うな。

そちら様こそ、どこのコスプレパーティーの帰りでしょうか……？

「怪我してるの？ 救急車呼びましょうか……？」

その声ではっと我に返ったように、男性は慌てて跳ね起きる。

途端に顔をしかめながらも、あたしから距離を取ろうとする様子は警戒の色も明らかで、あたしは内心むっとするものを感じながら彼に重ねて言った。

「言葉通じてる？ 救急車——は英語でなんて言うんだっけ……？」

あたしが首を傾げたその時、男性は勢いよく立ち上ってあたしを腕の中に抱え込んだ。

『動くな！』

いきなり抱きつかれたことに加えて、打ち据えるような声の響きに気を取られて、あたしはそれがまったく耳にしたことのない言葉であったことに——にもかかわらず、その意味がなぜかはっきりとわかったことに気づくのが一瞬遅れた。

なに——今の言葉？ どうして、聞いたこともない言葉の意味が——？

呆然としているあたしを腕の中に抱え込んだまま、男性は路地の入口の方に向かって片手に握りしめた棒——先端に球状の飾りの付いたそれは、むしろ杖と言うべきか——をかざして、高らかに声を

放つ。

『我が前にあれ——光盾！』
ルード

その杖の先に嵌め込まれた透明な珠が光を帯びるのと、小路の入口から放たれた強烈な光があたりを白一色に染め上げるのが同時だった。

「——っ！」

あまりの眩しさにあたしは思わず目を細め、男性の掲げた杖の先を見やって——思わず息を呑む。

そこには、光で編み上げたような円盤形の複雑な紋様が浮かび上がっていたのだ。

「な……！？」

困惑した声をあげるあたしにかまわず、男性は光が収まるのと同じ時に手を振って紋様をかき消し、指先で空中に文字のようなものを描く。

『来たれ天の楼閣、絶対なる守護の砦——空嶺陣！』
ミドラル

空気が圧縮されていくような奇妙な感覚と同時に、あたしたちの周囲をシャボン玉のような虹色の光がうっすらと取り巻く。

それとほとんど同時に、無数の炎の塊が頭上からあたしたちめがけて降り注いできた。

「~~~~っ！」

声にならない悲鳴は、煮えたぎった油をあたりにぶちまけるよう

な音にかき消される。

あたしは思わず男性の身体にしがみついたが、降り注いできた炎の塊はあたしたちの周囲をとりまく半球形の壁に阻まれて、一つたりとも中に届くことはなかった。

本来なら感じるはずの熱もまったく感じない。まるでスクリーン越しに映像だけを見ているようだった。

——そう、まさしく映画そのものの光景だ。

目の前の男性の衣装も、空中に浮かび上がる文字や紋様も、CGを駆使した最新のファンタジー映画と思えばなんら珍しいものでもない。

ただ問題は、ここが映画スタジオでもなんでもない、ただの路地裏だってことで……

『……くっ』

周囲の炎が跡形もなく消滅したあと、男性は顔を歪めて膝をつく。整った顔にはうっすらと汗がにじんでおり、彼が今の炎を防ぐためにかなりの無理をしたのだとわかった。

「大丈夫……」

反射的に声をかけようとした時、路地の入口の方から物音が聞こえた。

なにかを引きずるような音に、あたしは目を向け——思わずその目が転がり出そうなほどに目をむく。

そこに立っていたのは、尖った牙をずらりと並べた鰐のような顔を
した生物だった。

身体は人間のそれで、目の前の男性と同じような装飾の付いた長
衣を着ている。その手には武器と見まがうような、ごつごつとした
紋様を刻んだ金属の杖。

『これはこれは……俺にも運が向いてきたようだな』

鰐の頭をした男――体型から見て、たぶんそうだろう――は、あ
たしの前にうずくまった男性を見て、牙の並んだ口の端をわずかに
持ち上げた。

……わ、鰐の笑顔がここまで凶悪だなんて、思いもしなかった。

あまりの非現実的な光景のオンパレードに、あたしの意識はもは
や現実逃避を始めたらしくそんなどうでもいいことを頭の片隅でち
らりと考える。

『なんだ、その小娘は……結界に綻びでも生じたか？ その深傷に
加えて、そんな足手まといまで抱えて俺を捕縛できると思ってか？』
もはや鰐男の言葉までわかることに、驚く気力など残ってはいな
かった。

『かの有名な〈黒の導き手〉を仕留めたとあれば、俺の名も上がろ
うというもの。こんな機会を授けて下さった運命の神に感謝せねば
な！』

『いくら上がったところで、しょせん悪名だろうが』

鰐男を睨みつけて、黒衣の男性が吐き捨てるように言い返す。

『不意打ちに騙し討ち、さらには界の安定を揺るがしかねない大魔術の行使まで……とことん性根がねじ曲がっているらしいな、逃亡魔術士という奴は』

『やかましいっ！　どんな手を使おうとも勝てばこちらのものだ……っ！！』

尖った牙をむき出しにして鰐男は吠え、手にした杖を大きく振り回して先端の珠をあたしたちのほうへと向ける。

『なんと言おうと、貴様はもう終わりだ！　ろくに反撃する力も残ってはいまい！』

凶悪そのものの面相で笑いながら、鰐男は呪文らしき言葉の詠唱を始める。

『大氣に満ちる炎の霊よ、猛き顎となりて我が敵を討ち滅ぼせ——』

その姿を力強く光る瞳で見据えながら、男性がほとんどささやくような声で言った。

『確かに、今ここで反撃するだけの力は残っていないが——』

鰐男はそれに気づかず、勝利を確信しきった様子で高らかに声を放つ。

『——炎獄陣！』
ジファジータ

同時に空中に浮かび上がった五角形の紋様から吐き出された幾条もの炎が、あたしたちの周囲を大蛇のように取り囲む。むっとする熱を感じて、あたしが奥歯で悲鳴を噛み殺した時だった。

『——そう来ると思ったぞ』

男性が笑みさえ含んだ声を放つのと同時に、彼の足元から蛇のようないくつもの影がわき上がって、あたしたちを囲む炎の一つ一つに絡み付く。

影が触れるのと同時に炎は色を変え、闇に沈む寸前の空のような深い紫となる。

昏い色の炎を従えて男性はゆっくりと立ち、硬直したように立ちすくむ鰐男に向かって冷え切った声で告げた。

『同じ属性の攻撃ばかり続けたのが仇となったな。そうでなくても攻撃型の魔術の組成は単純なのだから——俺の名を聞いたことがあるのなら、術の解析を最も得意としているということくらい知っているはずだぞ？』

『く——くそっ！』

鰐男が杖を構えてなにか叫ぼうとするが、男性が周囲を漂う炎を解き放つほうが早かった。

『走れ、影よ——』

色を変えた炎は矢のように鰐男に向かい、その身体を二重三重に縛り上げる。

不思議と熱さは感じていないようだったが、ぎりぎりと全身を締め上げる力の強さに鰐男の顔が歪む。

『ぐ……うううおっ！』

『今ここで、お前を無力化することはできないが——この界でなければそれも可能』

男性は低く言い放って、くるりと回した杖を身体の正面に突き立てるように掲げる。カンと高い音を立てて、杖の端が地面に触れるのと同時に、

『レヴィス・カールダイムの名において——〈^{ゲート}門〉召喚！』

その声が響き渡った瞬間、男性の足元から白銀に光る円形の紋様が、水面に描かれた波紋のように一瞬のうちに広がった。

精緻な線で描かれた紋様は、引き込まれそうな不思議な魅力を持っている。

その範囲はあたしの足元はおろか、離れたところに立つ鰐男の足元までも含んでいた。図形から放たれる淡い光に照らされて、あたしや男性、鰐男の全身が白く染まる。

『——すまん』

あたしの耳元で聞こえた苦いその声に、「え？」と顔を上げたその時だった。

足元の図形から放たれる光が一気に強くなり、あたしの意識を視界ごと白一色に塗り潰す。

「な——！？」

意識が途切れる寸前、あたしが思ったことはメールの返事を返すの忘れてた、などという、この状況にそぐわぬ呑気なものだった。

1-3 現実と非現実の境界線（後書き）

ようやく異世界要素の登場です。でも本物の異世界は次回に持ち越し（笑）

1-4 見知らぬ世界に一人……きり？

あたしの意識が途切れていたのは、ほんの一瞬きりのことだった。足の裏に伝わる地面の感触を認識した——と思った次の瞬間、あたしの目に映る世界が色と形を回復する。

急速に薄れていく白い光の向こうに見えたのは、鮮やかな緑の木々だった。

形も高さも様々な木々が、あたしたちの周囲をぐるりと取り巻いている。木立の奥は見通せないくらいに深く、あたしたちは大きな森の中にいるのだとわかった。

頭上からは、木々の梢越しにさんさんと光が差し込んできている。

「……あれ？」

そこまで見て取って、あたしはようやく自分がとんでもない異常事態に遭遇していることに気がついた。

だって、すっかり陽も落ちて真っ暗になっているはずの時間なのに——それ以前に、ここはいつたいたいどこなわけ？ さっきまで、あたしはお店の裏の小路にいたはず。

「ちょっと待って……これって、いったい……」

混乱しながら、あたしが視線を巡らそうとした——その時だった。

「く……そおおおおっ！！」

それほど離れていないところでわき上がった大声に、あたしはぎよっとして目を向ける。

「このまま大人しく捕まってなどたまるかっ！ おまえさえいなければ——！！」

鰐男は全身の筋肉に力を込め、ぎりぎりと身体を締め付けてくる昏い色の炎を振り払おうとしているところだった。

どれほどの力を込めているのか、長衣の上からでも丸太のように膨れ上がった腕が見てとれる。その腕と身体の間、徐々に隙間が生まれ——

「あきらめろ」

炎が弾けるように霧散するのと同時に、あたしのすぐ側からそんな声が放たれた。

その声でようやく、あたしは身体が触れあうほどの距離に、黒衣の男性が立っていることに気がついた。

反射的に顔を向けるあたしの目の前で、彼は鰐男に向けて短く言葉を放つ。

「氷獄陣！」
エルトバレーク

その言葉と同時に、鰐男の足元に浮かび上がった光る円陣から、無数の氷の粒をまとった風の渦がごおっと音を立てて巻き上がった。鰐男の身体を呑みこんだ風は、十も数えないうちにあとかたもなく消える。

残されていたのは全身傷だらけになった鰐男だけで、彼はふらりとよろめくとズシンと腹に響く音を立ててその場に倒れ込んだ。身につけている長衣はボロボロで、その下の身体にも鋭い断ち傷がいくつもできているのがわかる。まるで刃物で斬りつけられでもしたみたいだ。

「し……死んじゃった、の？」

頭のどこかがまだ麻痺したまま、呆然とそう口にするあたしに、黒衣の男性は懷を探りながら平坦な口調で答えた。

その瞳が明るい光の下では、限りなく黒に近い紫をしていることにあたしは気づく。

「あの程度で魔術士が死ぬものか。まして皮膚の厚い鰐人が——シヨックと極低温で意識を失っているだけだ。連中は低温には弱いからな」

淡々と告げる男性の瞳には、鰐男に酷い傷を負わせたことに対する後ろめたさや罪悪感、あるいは怒りや興奮といったあらゆる感情が浮かんでいなかった。

ただ事務的に、やるべきことをやっただけという、なんの感慨もない表情——

あたしはその表情にぞっとして、知らず男性から距離を取るようにする。

そりゃ確かに、あたしたちに向かって攻撃してきた相手だけど——下手をすれば死んでいたかもしれないけど。

だけどあまりにも簡単に人（かどうか微妙なところではあるけど）に傷を負わせて、それになんの感情も抱かないこの男性も、あたしにとっては鰐男と同じくらい危険な存在のように感じられたのだ。

そんなあたしの表情の変化に気づいたのか、男性は怪訝そうな顔であたしに声をかける。

「どうし——」

その声が半ばで止まり、男性は目に厳しい光を宿してあたしの腕を素早く掴んだ。そのまま強引に引き寄せようとする動きに、あたしはとっさに抵抗する。

「——やっ！」

思わずその手を思いきり払いのけてから、あたしの頭の中に浮かんだのはしまった、という思いだった。

男性の目に浮かんだ驚きのような光が、その思いをなお強くする。けれどやってしまったことは取り返しがつかず、あたしがこわばった口を動かして謝ろうとするよりも早く——男性は問答無用であたしの身体を抱え込んだ。

「うわっきゃあああっ!？」

「動くな！」

悲鳴をあげるあたしにそう怒鳴り、男性はあたしを抱え込んでいるのとは反対の腕を鰐男に向けて声高に唱える。

「永なる獄よ、我が呼び声に応え出でよ——！」
その手に握られた、胡桃くらいの大きさの透明な珠にあたしは気づく。

綺麗に磨かれた珠の中にはちらちらと輝く不思議な光が宿っており、あたしが目をしばたかせる間もなく、それは珠からあふれて巨大な円陣に姿を変えた。

しかし、それよりも早く倒れたままの鰐男が放った光の矢が、男性の身体を貫いた。

「——っ！」

衝撃と痛みに歪む男性の顔を、あたしは愕然と見上げる。

今の角度から見て、あたしを庇って攻撃を受けたのは明白だった。言葉を失ったあたしの前で、彼は顔を歪めながらも術を完成させる。

「——封縛陣！」
グレオダイム

同時に、空中に浮かび上がっていたのと同じ円陣が鰐男の身体の下に現れ、ほどけるように無数の光の帯となってその身体を取り巻いた。

鰐男は目をむいて抵抗しようとするが、光の帯は容赦なくその動きを封じ込める。

やがて幾重にも重なる光の帯の中にその身体は完全に包み込まれ、巨大な一つの玉のようになったところで、それは強烈な光を放って収縮する。

ピンポン球くらいの塊になって、草の中に落ちていく玉をあたしは呆然と見つめやった。

「く……」

直後、耳に入ったその声が、あたしの意識を現実に戻らせる。はっとして黒衣の男性に目をやるあたしが見たものは、顔を歪ませてその場にくくりと膝をつく彼の姿だった。

「だ——大丈夫っ!？」

倒れそうな彼の身体をすがりつくようにして支え、あたしは上ずった声をかける。

深くうつむいたまま男性は答えなかったが、震える手や汗に濡れた額を見れば答える余裕がないのだということは一目でわかった。

「け、怪我はどこっ!? 手当てを——!」

「大丈夫……夫、だ。ダメージは……防護魔術で減殺できた、が……くそ、あの逃亡魔術士……妙な呪いを……」

食いしばった歯の間から、男性はかすれた声を洩らす。

「ちよっと待ってよ! こんなわけのわからない状況で人を放り出すつもり!? せめてここがどこなのか、どうやって帰ればいいのか教えてから……!!」

あたしは半分本気、半分は彼の責任感に訴える意図を込めて必死に呼びかける。

しかし、彼の耳にその言葉はほとんど届いていないようだった。荒い息を吐きながら、うずくまっていた身体から徐々に力が抜けていく。

「ちょっと……!!」

悲鳴のような声をあたしが発した時、その身体がびくんと脈打つように震えた。

彼の身体に異変が生じたのは、その直後のことだった。

「え……?」

あたしの口から、思わず戸惑ったような声が洩れる。
抱き止めるようにして支えている男性の身体が、見る見るうちに小さく縮んでいったことが原因だった。

衣服はそのまま、中身を失った袖や裾がぐたりと草の上に垂れる。

あたしはただ呆然と、腕の中に残った衣服を見つめることしかできなかった。

(ど……どうということ!?)

あまりのことに思考が停止したあたしの目の前で、人型のまま中身だけが抜け落ちた長衣の腰のあたりがわずかに動いた。

なにか——猫くらいの大きさの生き物が、中で動いているようだ。それは出口を探すようにもそもそと衣服の中を動き回り、やがてあたしの腕の中に残った襟元から首をのぞかせる。

息を止めてその動きを見つめていたあたしと、その目が真正面

から合わさった。

真っ黒な衣服の中から姿を現したのは、負けぬくらい真っ黒な鱗と限りなく黒に近い紫色の瞳を持つ、大きな一匹のトカゲだった。

「わきゃ~~~~っ!!」

いきなり目の前に現れたその姿に、思わずあたしは衣服ごとトカゲを放り投げる。

爬虫類は決して嫌いじゃないけど、それは心の準備がある場合だ。いきなり鼻と鼻とがくつつきそうなほどの距離に、あの独特の縦長の瞳孔が現れたりしたら誰だって驚くだろう。

トカゲ入りの衣服は近くの草むらの中に音を立てて落ち、あたしははっと我に返って慌てて草むらに走り寄る。

もしかして、まさか——いやでも状況からして、あのトカゲの正体は……

「ちょ、ごめん! 大丈夫——!?」

草むらの前で膝をついたあたしの目の前で、ガサガサと下草が揺れて先程のトカゲがぬっと顔を突き出した。

表情を読み取らせない、縦長の瞳孔の目立つ目があたしの顔を見返して、

『……大丈夫、だ。一応な』

どこか無然とした口調で言葉を返すトカゲの顔を、あたしは声も
出せぬまま呆然と見つめ返したのだった。

1-4 見知らぬ世界に一人……きり？（後書き）

やっと異世界に到着。これでタイトルに偽りなくなった……かな？
あ、まだ旅が始まってない……（汗）

1-5 旅は道連れと言うけれど

『これは……姿替えの魔法、か？ 妙な付与条件が山ほどついてい
るようだが……くそ、うまく魔力がまとめきれん。姿替えの魔法の
影響か——それとも魔術の使用に制限がかけられているのか……』

ぶつぶつと呟きながら、草むらの中から出てくるトカゲをあたし
は声もなく見つめた。

漆黒の鱗がオニキスのようにきらきらと日差しを弾き、優美な線
を描く全身を彩っている。驚いたことにその背には蝙蝠のような形
の一对の翼があり、頭部にちょこんと生えた小さな角とともに、あ
たしに一つの名前を連想させた。

「……ド、ドラゴン？」

思わず呟いた声に反応するように、トカゲ改め小さなドラゴンは
あたしに顔を向ける。

『竜？
俺が？』

あたしの脳裏に響く声は以前の男性のままで、あたしはあまりの
違和感に目眩に似たものを感じながら、彼に向かってうなずいてみ
せた。

「少なくとも……あたしにはそう見えるけど」

納得できないように鉤爪の生えた小さな手足や長い尻尾、背中の翼などを見やっている竜の前に、あたしはメイド服のポケットから出したハンドミラーを差し出す。

「ほら」

鏡をのぞきこんだ竜の首筋の鱗が、驚いたように逆立った。

『そんな、まさか……！ いや、しかし、この姿は……』

「……それが、あなたの正体ってわけじゃないんだ？」

鏡をポケットの中に戻しながら、あたしは悄然とした様子でなにやら考え込んでいる竜へと声をかける。

これだけ異常な状況が続いたら、目の前の竜が男性の正体だったと聞かされても、少しも驚きはしなかったんだけど。

どうやらこの反応からして、そういうわけでもないらしい。

「じゃあ、どうしてそんな姿になってるわけ？　というか、そもそもあなた何者よ？　どうしてあたし、知らない間にこんなところに來てるわけ？」

矢継ぎ早の質問に、彼はたじろいだように二、三步後ずさってから、あたしに向かって鱗に包まれた首をうなだれるように深々と下げた。

『すまない——説明がまだだったな。なんの断りもなしにこんなところに連れてこられて、さぞや心細かったろう。本当に申し訳ないことをした』

「……それは、その……まあ、今更謝られても困るっていうか……」

竜と化した男性の殊勝な態度に、それ以上強気に出ることもできずあたしはむにゃむにゃと言葉を濁す。

「それより、悪いと思ってるんだったら説明してよ？ あなたは何者で、ここはどこで、いったいどうやって帰ることができるのか！」

気まずさをごまかすように投げた声に、彼は紫水晶のような瞳をわずかに伏せて答えた。

『そうだな。まずは名乗ろう——俺の名前はルディン・カールダイム。このアールバイズの魔術士で、界を越えて逃亡する魔術士の捕縛を任務としている』

「……魔術士？」

予想はしていたものの、あまりにも現実離れしたその言葉をあたしは呆然とくり返す。

とはいえ、ここまで来るともう『現実』という言葉の定義自体、考え直さなければいけないような気もするけど……

鰐男だの空中に突然現れる光だの炎だの、そんなものを内包する『現実』をあたしはすでに目にしているのだ。

あたしは自分が見たものは信じる主義だし、今自分が夢を見ているのだとも思わない。

……もちろん、思いたい気持ちはあるけど。だけど、そうやって現実逃避したところでなに一つ状況は変わらない。だったら、前向きにぶつかって打破するのみだ。

幸い、父親が大量に買ってくる（本人も書いている）ライトノベルの中では、そんな言葉は当たり前のように登場する。

そういう物語の世界の中に入り込んでしまったと思えばいいんだ。

あたしは自分にそう言い聞かせて、目の前の竜——ルディンを見返して言った。

「わかった、魔術士ね。あたしは朝宮瑛莉——エーリと呼んでくれればいいわ。で、どうしてここにあたしを連れてきたの？ あたしに用があったからというわけじゃないでしょ？」

『……すまん』

尻尾と羽を力なくへしよんと下げて、ルディンは深くうつむいた。
『巻き込むつもりではなかったのだが……あの魔術士をこの界に転移させるため、転移呪式の範囲を一杯拡張させたら、お前も一緒にこの世界に連れてきてしまったんだ』

俺のすぐ側に立っていたからな、とルディンはやや言い訳がましく付け加える。

『あの界では、力に制限がかかってしまっただけに戦えない。もとはと言えば、あの魔術士を相手に油断した俺が悪かったのだが……取り逃がすわけにもいかなかったし、あいつを連れてアールバイズに転移すればいいと——そう、思ったんだ』

「……あたしを巻き添えにして？」

あたしの声に冷ややかなものが混ざるのに気づいて、ルディンの尻尾がさらに下がる。

『あの魔術士を捕らえたあとで、すぐに送り返せば問題はないと思った。こちらの世界でなら完璧に守りきる自信があったし……』

「送り返せるの？　すぐに？」

ルディンの言葉に、あたしはほっとして表情を緩める。

けれど、ルディンは小さい身体をさらに縮こませるようにしたまま、あたしの顔を見ないで低く言った。

『……本当にすまん。今の俺に、お前をもとの界に送り返すことはできない』

「はぁ!？」

ルディンの言葉を理解するのに、一瞬の間があった。

理解するのと同時に、あたしは怒りとも焦りともつかない感情のにじむ声をあげる。

「だってあなた、すぐに送り返すつもりで連れてきたって……!」

『そのつもりだった……が、この姿では術を上手く使うことができないんだ。誰か別の魔術士に送り返してもらうか、私にかけられている術を解除しない限り……』

言いにくそうに言葉を切るルディンの顔を、あたしは鋭い目つきで睨みつける。

「つまり……今すぐ、あたしをもとの世界に送り返すことはできないってこと？」

『……そうなる』

身の置き所がないように小さくなって告げるルディンの姿は哀れを誘うものだったが、あたしにはそれを意識するゆとりはなかった。

（ちょっと待って……あれからどれくらい時間が経ってる？ バイトは上がるところだったからいいとしても……あたしが帰ってこなかったら、うちの父親のことだから大騒ぎして警察に届けるんじゃない？ 搜索願とか出してたらどうしよう……！）

頭を抱えて呻くあたしに、ルディンは心配そうに首を伸ばして声をかけた。

『……エーリ？ 大丈夫か？』

「だいじょうぶなわけ、ないでしょうっ！」

思わず激昂して怒鳴り返すと、竜の首回りの鱗がまたピツと逆立つ。

「なんの断りもなしにこんなところに連れてきて、帰せないってどういうことよ！ あたしが帰らなかったらうちの馬鹿父が大騒ぎして警察に届けて、下手したらバイトのことが学校にもバレて、嚴重注意くらいですむかもしれないけど学校中に噂が広がって『あいつメイドなんだって』とか陰でこそこそ言われて――！」

ルディンが目を白黒させているのにも気づかず、あたしは感情のままに言葉を叩きつける。

「メイドの仕事を恥ずかしく思ってるわけじゃないけど、はつきり言ってそこいらのウェイトレスなんかよりよっぽど過酷で難しい仕事だけど、世の中の評価ってのは大量生産のコスプレ喫茶まがいのメイドカフェを基準にしてるんだから！ 祐貴子さんのこだわりを知らない人間にそんなものと同列に扱われるのが一番腹が立つのよ

っ！」

途中で完全に問題がずれていることに気づいたけど、勢いの付いた言葉を止めることはできなかった。

ぜいぜいと肩で息をしているあたしに、ルデインは恐る恐る言葉を投げかけた。

『だ……大丈夫か、エーリ？』

完全に腰の引けた様子からして、さっきの言葉とはたぶん意味が違うんだろう。

あたしは頭の片隅でそんなことを考えながら、大きく息を吐き出してルデインにうなずいてみせた。

「……大丈夫。怒鳴ったらちよつと落ち着いた」

『そうか……』

ほつと胸をなで下ろした様子のルデインに、あたしは問いの言葉をかける。

「それで、どうしたらいいの？ 今すぐ帰るのは無理——としても、できるだけ早くあたしはもとの世界に帰りたいの。どうやったらあなたをもとの姿に戻すことができるの？ っていうか、どうしてそんな姿になっちゃったわけ？」

あたしの問いに、ルデインは鰐男が立っていたあたりに目をやって言った。

『おそらく——あの鰐男がなにか術をかけたんだ。単なる攻撃魔法だと思ったが、この結果を見ると……あの男に解呪させるのが、一番手っ取り早い方法だろうな』

「だったら、今すぐにでも——！」

草むらに駆け寄って、鰐男を封じ込めた玉を探そうとするあたしを、ルディンは慌てて追いかけながら言った。

『ま、待て！ いや封印球を探すのは手伝って欲しいが——だが今この場で、あの男の封印を解くことはできないんだ！』

「……どうということ？」

あたしは草をかき分けようとする手を止めて、よたよたと走ってくるルディンを見つめる。

『と……逃亡魔術士を捕縛するための術は、魔術師協会の本部——〈塔〉でしか解除することができない。凶悪な手配犯を捕まえたのに、途中で逃がしてしまつては元も子もないからな。術者の意思はおろか、術者が死んでも解除できないようになっている』

でないと、仲間が術者を殺して救出しようとすることもあり得るから——とルディンは低い声で付け加える。

「じゃあ……どうやって……」

半ば呆然と言葉を返しかけてから、あたしはその答えに思い当たった。

「まさか……」

『——その、まさかだ』

あたしの前で足を止めて、ルディンは申し訳なさそうにあたしを見つめて告げる。

『〈塔〉まで、俺を連れて行ってもらえないだろうか？ そこでなら封印球の解除もできるし——万が一、俺にかけられた術が解けな

かったとしても、誰かお前をもとの世界に送り返してくれるはずだ』

「で、でも……時間が……」

『界を渡る転移の魔術は、時間を遡ることもできる。渡る人間がその界に存在していない時間のみだが……お前がこちらに來た直後の時間に戻せば、なにも問題はないだろう？』

「……まあ、それなら……」

あたしがうなずくと、ルデインは目に見えて安堵する様子を見せた。

まあ、向こうの世界での不在がなかったことになるなら、何日かこっちで過ごしても問題はないはずだ。

ちよつとばかり珍しい体験をしたと思えば———というか、こんな話を父親にしたら、嬉々としてネタに使われそう。

……いや、今時そんな手垢の付いたネタ、使おうにも使えないか。

あたしはそう思いながら、草の上にちんまりと座り込んだルデインに目をやる。

口元にちよつとだけ笑みを浮かべ、あたしは黒い宝石のような鱗に全身を覆われた生き物に向かって、手を差し出した。

「わかった———じゃ、しばらくの間よろしくね、ルデイン」

『ああ。こちらこそ頼む』

ルデインはあたしの手———は大きすぎたみたいで、人差し指の先だけをちよこんと掴んで生真面目に言葉を返す。

その感触がくすぐったく、あたしは思わず目を細めたのだった。

1-5 旅は道連れと言うけれど（後書き）

目的地が決定し、ようやく旅の始まりです。あと魔術士の名前も登場三回目にして判明（判明した時にはすでにドラゴンですが）。

1-6 異世界の歩き方

あたしはルディンに言われて、草むらの中から薄紫がかった半透明の珠——封印球というらしい——を拾い上げると、彼の衣服の落ちているところまで歩いて戻っていった。

「どうするの、これから？」

拾った衣服を一枚一枚丁寧にたたみながら、あたしはルディンに問いかける。

彼はなんだか複雑そうな目つきであたしの手元を見つめていたが、あたしが重ねて問いかけると慌てたように首を振って、衣服の下に落ちていた革のポーチを指差した。

……あ、今気づいたけど、これってほとんど初対面の男性の着ていたものなんだっけ。

なんか下着らしきものもあつた気がしたけど——まあ、気にしないでおう。どうせ、父親の洗濯物で慣れてるし。

『その中に地図が入っている——出してくれ』

ポーチはベルトで腰にくくりつけるようになっていて、あたしはそれを拾い上げると蓋を開けて中をのぞき込む。

「地図……地図、あ……これかな？」

折りたたまれた地図らしきものを発見し、あたしはそれを引っ張り出す。

ごわついた手触りのそれは、紙というよりもなにかの皮のような厚みのある素材で作られたものだった。

ファンタジー小説でおなじみの羊皮紙ってやつだろうか？ 引っぱり出してみるとポーチの何倍もの大きさがあって、あたしはちょっと驚く。

「うわ……よく入ってたなあ」

というか、どう考えても収まりきらない大きさだと思うけど。

ポーチと地図をまじまじと見比べるあたしに、ルディンはやや呆れたような響きを声に宿らせて言った。

『それには入れた物の体積と重量を無効化する術がかけてあるんだ。それより、地図を開いてくれないか』

「あ、はいはい」

あたしはたたんだ衣服とポーチを地面に置くと、両手で地図を広げる。

地図は道と覚しき線と、いくつかの記号が書き込まれただけの簡単なものだった。記号には文字らしきものも書き添えてあるが、もちろんあたしには読めない。

と、そう思ったのだが――

〈ワルド村〉

見知らぬ文字があたしの頭の中で形を変え、意味のある言葉とな

る。

あたしは思わず「え？」と声をあげ、それに気づいたルディンが小さく首を傾げてあたしに声を投げやった。

『どうした？』

「今、文字が——ていうか、そもそもあたし、どうしてあんたの喋ってることがわかるの？」

『ああ……界を渡る魔法陣には、解語の術式も組み込まれているからな。最低限の意思疎通はできるように——』

ルディンはそう言って、あたしの顔を不思議そうに見上げる。

『だが、異世界の住人にも効果があるとは知らなかった。ある程度の魔術適性がないと効力を発揮しないはずなんだが……お前、魔術師の修行を積んだことが？』

「そんなもん、あるわけないでしょ」

あたしは眉を寄せて言い返し、地図に視線を戻す。

文字がわかるのはありがたいけど、書かれている地名にも町らしき名前にもまるで見覚えはない——当たり前といえば当たり前だけど。

現在地はどこだろう——そう思って、地図を睨んだその時だった。

地図の一点にぼうつと染み出るように、鈍く光る点が現れた。

「な、なにこれ……っ？」

ぎょっとして地図を取り落としそうになるあたしに、ルディンは驚いた様子も見せずに声を投げやった。

『それが今の現在位置だ。所持者の魔力に反応して浮かび上がるようになってい——〈塔〉の魔術師専用の地図だ』

言いながらルデインは地図をのぞき込もうとするように伸び上がり、あたしは彼の前にしゃがみ込んで地図を地面に広げる。

『どうやら、バイス国との国境のあたりのようだな……王都までは歩きで十日といったところか。座標を設定しないで飛んだ割には、まともな場所に出られたらしい。不幸中の幸いと言うべきか……』

ぶつぶつと呟きながらルデインが地図の一点に触れると、描かれている線や記号がすうっと小さくなってより広い地域の地図となる。

「……うわっ」

あたしが小さく声をあげるのにかまわず、ルデインは地図を操作しながら言う。

『現在位置はこの——大陸の中心あたりだ。目的地の〈塔〉はこの国の首都——エルダイムにある。ここまで行くには歩きか、乗合馬車——運が良ければ隊商の馬車に同乗させてもらおうという手もあるが、どちらにせよ大きな街に行かなくてはならない』

ルデインは地図をもと通りの縮尺に戻し、光点の近くにある道を小さな鉤爪のついた指先でちよんとつつく。

すると光点の側に、矢印のような形の光が浮かび上がった。

なんだか地図と言うより、GPS機能付きのカーナビでも見ているみたいだ。

『この矢印の通りに行けば、そうだな——二時間くらいで道に出るだろう。あとは道に沿って半日ほど歩けば、ルジムの街に着く……』

そこで乗合馬車か王都行きの隊商を探そう。昔に比べればだいぶん治安は良くなったとはいえ、女性一人で王都まで旅をするのはあまりに不用心だからな』

「あんたは護衛の役には立ってくれないわけ？」

ちよつとからかうような気分であたしがそう口にすると、ルディンはむつつりと押し黙ったのちに、いかにも不本意そうな口調で言った。

『俺がこの姿でなかったら、盗賊だろうが怪物だろうが蹴散らしてやるがな。この姿では……下手したら、俺のほうを狙われることになりかねん』

首を傾げるあたしに、彼は居心地悪そうに羽をぱたぱたと動かしながら告げる。

『普通の竜でも十分珍しいというのに、こんな色の――それも幼生の竜ともなれば、目の色を変えて欲しがる人間もいるだろう。大きな街に出たら、なにか姿を隠す方法を考えないとな。お前一人だけでも危ないのに……よけいな危険を招き寄せることになる』

ルディンによると普通の竜は褐色や暗い灰緑色をしていて、深い山の中や洞窟の奥なんかに住んでいるものらしい。

というか、普通に竜がいるってこと自体が驚きなんだけど……

「大きな籠か袋でも買って、中に入ってたら？」

あたしは犬や猫を入れるケースのことを思い出してそう提案してみる。

よくバッグから顔だけ出している犬を――もちろんあたしの世界で――見かけるけど、あんな感じで竜がバスケットに入っていたら

可愛いんじゃないかな。

そこであたしは、一つ大事なことに思い当たった。

「そう言えば、ルディン……お金持ってる？」

ルディンは一瞬微妙な沈黙を返し、なぜかため息をつきたような口調で言葉を返す。

『心配するな。財布ならその中に入っている——100クレスほどあるから、しばらく路銀に困ることはないだろう』

「……そう言われても、あたしには貨幣単位からしてさっぱりわからないんだけど」

眉を寄せるあたしに、ルディンはこの世界でのお金について簡単に説明してくれた。

貨幣の中で一番価値の高い金貨が一枚で1クレス。普通に使われている銀貨（ディズという単位で呼ばれる）200枚分に相当する。平均的な宿屋なら食事込みでも一晚2ディズくらいで泊まれるというから、100クレスというのはかなりの大金だ。

「へえ……お金持ちなんだね」

感心半分、羨ましさ半分で言うと、ルディンは憚然とした口調で言い返した。

『俸給を使う当てがないだけだ。官舎に住んでいるから家賃もかからないし、任務の間は衣食すべて上からまかなわれるからな。そもそもオールバイズにいる期間が月に何日もないのだから——この世界の通貨を使っている暇があるわけもない』

「あ……なるほど」

要するに、仕事が忙しくてろくに遊びに出ることもできない、働き過ぎの公務員みたいなものか。

「ま、お金があるのに越したことはないでしょ？ 目的地まで何日もかかるっていうんなら、宿代も食費も必要だし——それに」

あたしは言葉を切って、ちらりと自分の着ているものに視線を落とす。

祐貴子さんの渾身の力作であるメイド服は見た目の割に動きやすいけど、野外活動にはあんまり向いていそうにない。

というか一応借り物なので、できれば汚したり破ったりしたくないし……

「もう少し動きやすい服を手に入れて、そっちに着替えたいし——そのくらいのお金は出してもらってもいいよね？」

『……ああ』

答えて、ルディンはうかがうような視線をあたしの顔に向けた。

『ところで、気になっていたんだが……お前はこういう家柄の人間なんだ？ 着ているものの生地や仕立てを見た限りでは、かなりの家の出身のように見えるが——話をしてみると、少し違うような気もするというか……』

「貧乏くさいって、はっきり言ってくれてもいいんだけど？」

肩をそびやかせてあたしが言うのと、ルディンは困ったように視線を泳がせた。

あたしはその様子を見て、ちょっと表情をゆるめて言葉を足す。

「まあ、いいけど——うちはごく普通の家柄。これは仕事で着てる借り物なの——だからあんまり汚したくないわけ」

『そうか……』

あたしを見るルディンの目に、ほんの少し同情の色が加わったようだった。

『見たところ悪い職場ではないようだが……貴族の家の住み込み家政婦といったところか？ その前掛けからして、給仕が主な仕事のようにだが』

「うん、まあ……そんなところかな」

メイド喫茶、というものについてきちんと説明できる自信がなかったので、あたしは適当に話を合わせる。

もともと、メイドの仕事ってそういうものだろうし、たぶん問題はない……よね。

『すまなかった、真面目に働いている女性をこんなことに巻き込んでしまつて……』

「ああ、いいからもう——帰れるなら問題はないから、ね！」

再び深々と頭を下げようとするルディンをあたしは慌てて制し、草の上に置いた彼の衣服をことさら見せつけるように取り上げる。

「それよりこれ、どうする？ このまま持つて歩くのも邪魔だし、なにか袋代わりになるもの持ってない？」

なかったら、長衣を風呂敷代わりにして包んで持つて歩くしかないか——

そんなことを考えるあたしに、ルディンは少し呆れたような様子を見せて、あたしが手にしているポーチに目をやった。

『それなら、そこに入れておけばいいだろう？ 体積が無効化され
と言ったはずだ——大きさに関係なく、いくらでも入れることが
できるぞ』

「あ、そっか……」

それでも疑い半分でたたんだ衣服をポーチに近づけると、端のほうが入った時点でスルンと吸い込まれるように中に呑みこまれる。

「うわっ」

思わずのぞきこむと、衣服の一部がポーチの奥のほうに見えた。
それを掴んで引っ張り出すと、ポーチよりも一回り以上大きいはずの衣服がまるで抵抗なく出てくる。

「うわー、凄い！ 四次元ポケットみたい！」

『四次元……？ なんだ、それは？』

「えーと、その……あたしの世界の想像上の生き物についてる機能
……みたいなもの。実際に見たことはないんだけど」

22世紀製の某猫型ロボットについても、うまく説明できる自信
がなかったあたしはそんな適当な説明をして（そもそも生き物じゃないし）、ルディンの衣服をポーチの中にぐいと押し込んだのだ
った。

1-6 異世界の歩き方（後書き）

アイテムの説明だけでほとんど一話使ってしまった。ちなみに瑛莉は主婦なので、異性のぱんつも平気でわしづかみにします。

1-7 一人と一匹の初戦闘

ルデインの衣服と封印球をしまったポーチを腰に巻き、側に落ちていた彼の杖を手にとってあたしは地図の矢印を頼りに歩き始めた。最初は杖もポーチに入れようかと思ったんだけど、見た目の割に重くないし、もしもの時の武器代わりになるかもしれないと思い直したのだ。

『……まあ、いい』

あたしがそう言うと、ルデインは不承不承ながら杖を持って歩くことを認めた。

『そんなに簡単に壊れるものじゃないし……確かに、武器は必要だ。ただ——あんまり粗末に扱うなよ。それでもそれなりに元手がかかっているし、魔術師になって以来ずっと使っている大事な杖なんだから……』

「わかった、わかった」

くどくどと言葉を重ねようとするルデインを、あたしは手で制する。

「——でも、そうかあ。値の張るものなんだ……もしも財布をなくしたりした時は、これ売っ払うって手もあるのね……」

『……おい』

「冗談だつてば。そんな本気で怒らないでよ！」

あたしはくすくす笑いながら、茂った草をかき分けて森の中を歩いていく。

見知らぬ異世界にいるのだという興奮が、今更ながらあたしの言葉を少しばかり浮つかせているみたいだった。

だって、小説や漫画の中でしかお目にかかれないシチュエーションだよ？

しかも旅のお供は、小さい上に口やかましいけれど本物の竜ときた。まあ、中身は人間なんだけど――

そんな感じで軽口を叩きながら進んでいくうちに、周囲の景色は深い森からまばらな木々が立ち並ぶ野原へと変化していった。

見通しが良くなったため、あたしは少し背伸びして行く手に目を凝らす。

「まだ……しばらく先、かなあ？」

『なんだ、もう疲れたのか？』

ルディンの声は呆れたようで、あたしは思わずむっとして強い口調で言い返す。

「疲れてなんかいないわよ！ 特価商品追い求めて、自転車で三駅も四駅も先まで走り回っているあたしの体力なめないでよ！」

唯一の例外が――帰りが遅くなることが多いため――ヘシャーリーズへの行き帰りだ。帰りは父親に迎えに来てもらうことも多いし。

あたしの反論にルディンは目を白黒させたものの、すぐに気を取り直したようにあたしの顔をのぞき込んで言った。

ちなみに今、彼はあたしの肩の上にいる。短い手足であたしの歩幅に追いつくのは大変そうだったので、あたしがそうするよう提案

肩にかかる重みはそれほどなく、鳥が一羽留まっている程度にしか感じない。

『ならいいが……街道はそろそろ見えてくるはずだ。バディークの街道には、百メルンおきに紅効樹グレデリークが植えてあるから遠くからでも一目でわかる』

距離の単位がわからず首を傾げるあたしに、ルディンは肩の上で手と手を広げて間隔を示しながら、簡単に説明する。

十センチくらいの長さが基本となる単位の『デメル』で、十デメルで『リウム』、十リウムで『メルン』という単位になるという。
……つまり、1リウム $\parallel$ 1メートルで、1メルン $\parallel$ 百メートルってことか。

『街道には一定の間隔で、野営用の宿地も用意されている。周囲を垣根で囲っただけの簡単なものだが……風よけくらいにはなるだろう。この調子だと、今日中にルジムの街まで到着するのは難しいだろうからな。一応、荷物の中には毛布と食料も入っているから——重ね重ね申し訳ないが、今晚は野宿で我慢してくれ』

「別に……それはかまわないけど」

あたしはちらっと自分の身体に目やうて答える。

野宿となるなら、余計他の服に着替えたいところだけど……こればかりは仕方ない。あとでしっかり洗濯して、アイロンをかけることにしよう。

「ルディン……荷物の中に、着替えなんか入ってないよね？」

念のために聞いてみると、ルディンは肩をすくめるような仕草とともに言った。

『あることはあるが、俺の服ではサイズが合わないだろう？』

「この際サイズはどうでもいいんだけど……あー、でもルディンが着ていたみたいな服だったら、サイズが合っていないともの凄く動きにくそうだよね……間違いなく裾とか引きずるだろうし」

メイド服以上に、野外活動には向かない格好になりそうだ。

落胆してため息をつくあたしに、ルディンはやや呆れたような視線を向けて言った。

『それ以前に、若い娘が他人同然の男の服を着ることになんの抵抗もないのか……？ 平気で人の着ていたものに触るし……し、下着にまで』

「そんな遠慮なんか、してる場合じゃないでしょ？ 非常事態——というか、こんな非常識な事態に直面してるってのに」

あたしが言うと、ルディンはそっぽを向いてぶちぶちと口の中で文句をこぼす。

口うるさいっていうか、なんだかずいぶん細かいことにこだわる性格だなあ。見た目は若いのに、中身はお爺ちゃんみたい。

野原をさらに歩いていくと、行く手にぼつぼつと背の高い木が並んでいるのが目に入った。

『バディークの街道だ』

いくぶんほっとしたような調子を声にのぞかせて、ルディンが呟く。

この世界にやってきた時は天頂近くで輝いていた太陽も、今では大分西に傾いてうっすらと空気の色も変わってきている。

街道までは二時間ほどで着くという話だったけど、足場の悪い湿地帯などを迂回していたら予想以上に時間がかかってしまったのだ。

「よかった……日が暮れる前には、到着できそうね」

『ああ』

あたしの肩の上で、ルディンがそう答えた時だった。

ウオオオオオ———ン

どこからともなく、重なり合うように聞こえてきた吠え声が、ルディンの動きをぴたりと停止させた。

「……なに、今の？ まさか……」

『ガルフル
甲狼だ』

竜の顔色はあたしには読み取れなかったけど、その声ににじんだ響きは硬く、人間の姿なら真っ青になっていただろうことが想像できた。

『荒野を主な生息地とする、大型の危険種で——どうしてこんなところに？ 連中の生息地はもつと西のはずだぞ……』

「——とにかく、危険なわけね!？」

あたしの言葉に、ルディンははっとしたように顔を上げてうなずきを返す。

『街道まで走れ! 紅効樹には危険種を遠ざける効果がある! そこまで逃げ切れれば、あるいは——!』

最後まで聞かず、あたしはルディンが落ちないように片手で支えて全速力で走り出す。

見た目重視のローファーでさんざん歩いてきたため、足の小指がじくじくと痛かったけど、かまっている余裕はなかった。

腰くらいまである草を蹴散らして、鉄塔のように並ぶ木に向かってひたすら走る。

ウオオオオ————ルン

その時、さっきよりもはるかに近い場所で吠え声があがるのが聞こえた。

反射的に声の方向をふり返りそうになり、あたしは慌てて走るのに集中する。とても走るのには向いていないこんな場所と格好で、よそ見なんかしていたら転倒することになるのは火を見るより明らかだ。

だけど木までの距離は絶望的なまでに遠く、懸命に走ってもまるで近づいてくる様子はなかった。

徐々に荒くなってくる息の下、あたしは必死に顔を上げて遠く見える木を見つめ——

ウオオ————ガウツ！

次に聞こえてきた声は、あたしのすぐ後ろあたりで発された。

今度こそあたしは我慢しきれずにふり返り、黒褐色の毛並みを持つ何頭もの獣がすぐ近くに迫ってきているのを目にする。

ごつごつした鎧のような外皮が、その生き物の首や背中を覆っている。

それを除けば犬——あるいは狼のようにも見える外見だったが、その大きさは大型犬どころか牛にも匹敵するものだった。

牙をむき出しにして獐猛に唸りながら、走り寄ってくる獣の数は四頭。

「——っ！」

それに気を取られた瞬間、あたしは地面の窪みに足を取られてつんのめった。

しまった——と思った時にはもう遅い。転倒したあたしの肩からルディンが空中に放り出されて、丈高い草の中に落ちていく。

「ルディン——！」

思わず声をあげてから、彼の心配をしてる場合じゃないということに気がついた。

はっとして獣に視線を戻した時には、もう鋭い牙が眼前に迫っていたのだ。

「——くっ！」

とっさに握っていた杖を突き出して獣の牙を受け止め、あたしはやわからかそうに見える獣の腹に渾身のつま先蹴りを入れる。

たいしてダメージを与えた様子はなかったが、顎の力がわずかに弱まった隙に杖を引き戻して、あたしは素早く起き上がると杖を構えて獣と向き合った。

後ろと横にも獣の気配があったけど、そちらに気を向けている余裕はない。

目の前の獣から一瞬でも注意を逸らせば、その瞬間にがぶりとや

られるだろう——針のように神経を尖らせて、周囲に気を張り巡らせるのがやっとだった。

『——エーリ！』

その時、草の中から声とともに飛び出してきた影があった。

目の前の獣に意識を集中したまま、ぴくりとも動かせないあたしの視界をよぎった黒い影はそのまま、獣の鼻先へと勢いよくぶつかっていく。

「ルディン——！？」

『逃げろ！』

獣の鼻先に爪を立ててしがみついたまま、ルディンはあたしに向かって怒鳴る。

だけど体格の差はあまりにも歴然で、獣が思いきり顔を振っただけであつさりと跳ね飛ばされてしまいそうだ。

動けないあたしに向かって、ルディンは苛ついたように声を荒げて言った。

『ここに連れてきた責任上、お前はなんとしてでも俺が守る！ その杖を持って〈塔〉まで行け！ 必ず誰かが、お前をもとの世界に——！』

「逃げられるわけ——ないでしょっ！」

あたしは怒鳴って、横から飛びかかってきた獣の鼻面を杖で思いきり殴りつけた。

さすがにこれは痛かったらしく、キャンと情けない声をあげて獣は退く。

「この状況わかってる？ 一人で逃げたって、街道にたどり着く前に他の連中に追いつかれちゃうわよ！ ここで今あんたが考えなきゃいけないのは、あたしを逃がすことじゃなくて一緒にこいつらを撃退すること！！ 違う！？」

あたしの剣幕に圧されたようにルディンは沈黙し、その隙をついて獣が勢いよく首を振るとボールみたいに空中に放り出された。

ああもう、やっぱり――！

ルディンは羽をばたばた動かして空中でかろうじて体勢を整えると、不規則な軌道を描きながらあたしの側まで降りてくる。

『……すまない、エーリ。お前の言う通りだ』

「なにか考えは？」

周囲の獣に睨みをきかせながらあたしが問うと、ルディンは少し考え込む様子を見せてから言った。

『魔術を使えないかどうか、試してみる――協力してくれるか？』
「OK」

答えたあたしの杖を握る手に、ルディンは鉤爪のついた小さな手を重ねる。

これじゃ迎撃できない――と文句を言うより早く、彼は正面の獣を見つめたまま歌うように声をあげた。

『――来たれ氷雪の牙、瀑布の顎、^{あぎと}猛り迸るその力もちて我が敵を撃て』

独特の抑揚をつけて唱えられるその言葉が、触れている手からあたしの頭の中に染みこんでくる――そんな気がした。

奇妙な感覚に戸惑うあたしに気づかず、ルディンは最後の一言を口にする。

『ファイアルーカ
氷撃！』

その瞬間、空中に浮かび上がったのは身の丈ほどもある巨大な円陣だった。

内部に描かれた紋様もこれまで見たことがないほど緻密なもので、その細かな装飾にも似た造形にあたしは知らず目を奪われる。

それはルディンも同様で、彼は大きく目を見開いて目の前の凶形に見入っていた。

自分で作り上げたはずのものなのに、その目にはなぜか驚きと――どこか恐れのような色がにじんでいた。

円陣を形作る光の線が強い輝きを放つのと同時に、ごおっと音を立てて氷の粒を含んだ突風がそこから放たれる。

「――きゃっ！」

あたしは舞い上がった髪とスカートの裾を押さえ、空中に浮かんだままのルディンが慌ててあたしの肩にしがみつく。

幸いあたしたちの被害はその程度で済んだけれども、直撃を受けた獣たちの被害はそれとは比較にならないほど凄まじいものだった。

「な……」

風がおさまった時、周囲の光景を見てあたしは呆然とする。

周囲の景色は先程までとは一変し、まるで雪が降ったあとのように一面白く凍りついていたのだ。

獣たちはあたしたちに襲いかかろうとした体勢のまま、白い氷像と化していた。

ひんやりとした冷気が今更のように伝わってきて、あたしは思わず身震いすると我慢できず大きくしゃみをする。

「ふ——つくしゅん！」

その振動が伝わったように、不安定な姿勢で立っていた氷像の一つが倒れ——

がしゃんと大きな音を立ててその四肢が碎けるのと同時に、かうじて被害を免れた一頭があたしに向かって飛びかかってきた。

「——うあっ！」

あたしはとっさに手にした杖を突き出すが、獣はひらりとかわして眼前に迫る。

『エーリ！』

ルディンが間に飛び込もうとするが、獣の前脚があたしを突き倒すほうが早かった。生臭い息が顔にかかり、あたしは喉元まで出かった悲鳴をかうじて呑みこむ。

麻痺したような頭の中で、それでも懸命に獣の牙をかわす——もしくは獣の気を逸らす方法をばらばらとページをめくるように考えて。頭の片隅でどうあがいても間に合わないと冷静に指摘する自分もいたが、大人しく死を迎え入れるわけにはいかなかった。

揺るぎだにせずに見つめるあたしの喉笛を、むき出しにされた獣の牙が容赦なく噛み裂こうとしたその時——

ギャンツ、と悲鳴をあげて獣があたしの上で、雷に打たれたように飛び上がった。

その隙に素早く転がって獣から距離を取りながら、あたしが見たのは獣の背中に突き立った数本の矢だった。

鎧のような装甲のわずかな隙間を、狙いすましたかのように正確に貫いている。

「な……」

呆然とあげたあたしの目に、街道の方向から近づいてくる騎馬の影が映った。

弓を手に構えた影は、あたしの側でなおも唸っている獣に向かってためらう様子もなく矢を放つ。

ヒュンッ、と鋭い音を感じた次の瞬間、獣の首筋に矢が突き立っていた。

獣はそれでも絶命せず、獐猛に唸りながら弓を構えた影めがけて襲いかかっていく。

「危な——！」

思わず声をあげたあたしの視線の先で、影は慌てもせずに弓の弦を肩にかけると腰に帯びた剣を抜き放ち、飛びかかった獣の首をざんと断ち切った。

まるで計算されつくした殺陣を見ているような、一瞬の停滞もない滑らかな動作だった。

飛び散る血飛沫の間から、白刃を手に馬にまたがる一人の男性の姿が見える。

その顔ははっきりとは見えなかったが、あたしの視線を受け止めて口元がくつきりと笑みの形を作った——ように思えた。

1-7 一人と一匹の初戦闘（後書き）

相変わらず瑛莉の一番の心配事は制服です。少しは自分の心配もしろと言いたくなったり……

そして新キャラ登場。まったく予定台になかったキャラなので、どう動かしただか迷ってます。通りすがりに終わるか、それとも……？

1-8 用心棒と使い魔

「大丈夫か？」

近づいてきた男性に声をかけられ、あたしははっと我に返った。

同時に空中に浮かんでいたルデインの首根っこをつかみ、ぶんと音がしそうなほどの勢いで背中側に隠す。ぐえっと声が聞こえたような気もしたがあえて無視。

人に見られることの危険を考えてか、ルデインもそれ以上文句を言おうとはしなかった。

背中に貼りつくようにして息をひそめているルデインの気配を感じながら、あたしはゆっくりと近づいてくる騎馬の影を見つめる。

片手に剣を握ったまま、もう一方の手で器用に手綱を操る男性の姿は、二十代の後半から三十代くらいに見えた。

年齢がはっきりしないのは、頬から顎にかけて覆う伸び放題の髭のためだ。

枯れ草色の髭と同じ色の髪を首の後ろで無造作にまとめ、よく日に焼けた顔には眉から目尻にかけて、白っぽい傷痕が一直線に走っている。

よく鍛えられた身体を包むのは、丈夫そうな飾り気のない衣服と革の鎧。

肩には先程活躍した弓が弦を前にしてかけられ、背中には矢を何

本も入れた筒状のケースが斜めに背負われている。

やや色の濃い眉毛の下から、緑がかった薄茶色の瞳があたしを見返して笑った。

そうすると、威圧感さえ感じさせる迫力のある風貌が、どこか少年めいた人懐っこい印象へと変わった。

「……ありがとうございました」

あたしはすぐ側で馬を止めた男性を見上げ、わずかばかりの警戒心をのぞかせた口調で礼の言葉を投げた。

全面的に歓迎する気持ちになれなかったのは、男性の正体はつきりしなかったためだ。

助けてくれたことについては素直に感謝するけど、その実盗賊とか手配犯だったりして、油断したところで危害を加えられでもしたらたまったものじゃない。

ただ、頭の中でそう考えながらも、あたしは彼がその手の人種とはまるで異なることを半ば確信していた。

こればかりは、勘としか言いようがないけど――あたしに向けられるまっすぐな眼差しがそういった人種と彼を同列に扱うことを拒ませるのだ。

そんな内心の複雑な思いを感じ取ったかのように、男性は荒々しく彫り上げた像のような顔全体でくしゃっと微笑んで言った。

「そう警戒しないでくれ。こんな見てくれをしちやいるが、俺は野盗じゃねえよ――これでも一応傭兵だ」

男性は剣に付いていた血を振り払うと、腰から下げた布で簡単に拭って鞆に収める。

それを見て、あたしの肩に無意識に入っていた力も抜けた。

「向こうの街道で、護衛していた隊商が甲狼の群れに襲われてな。仲間と協力して追い払ったのはいいが、こっちで誰か襲われているのに気づいて駆けつけたんだ。まあ、俺の助けは必要なかったかもしれないが――」

男性は言葉を切って、あたしの後方に広がっている光景に目を向ける。

つられるように視線を向けてから、あたしは彼が勘違いしていることに気がついた。これをやったのが、あたしだと思っているのだ。

「あ、これは……！」

言いかけて、あたしは竜の姿のルディンを彼の前に出せないことを思い出す。

彼が欲に駆られてルディンに手出しする人間とは思えないけど――まるきり初対面の人間をそこまで信用することはできない。

ここはあたしにとって、常識の通用しない異世界なのだ。

そんな世界で『大丈夫だという気がする』という勘だけを頼りに、見知らぬ相手は無条件に信用するのはあまりにも危険だった。

「えーと、その……これは、ちょっと力加減を間違えたっていうか……火事場の馬鹿力っていうか。ここまでのことになるとは正直思っ
てなくて……」

しどろもどろに言葉を重ねるあたしを、男性は面白そうに軽く目を細めて見つめる。

だけど、その瞳の奥に妙に鋭い——巧妙に隠されていたけれど、慎重にこちらの出方をうかがうような油断のない光が見え隠れしていることに、あたしは気づいていた。

気安い口調や態度につられて、うっかり気を許してしまいそうになるけど——ちょっと用心したほうが良さそうだ。

「でも……さっきのは本当に危ないところだったんで、助けてもらって感謝してます。あなたが矢を射ってくれなかったら、あの狼に噛み殺されていたと思うし」

「そうか。なら駆けつけた甲斐があったな」

笑って答える男性から視線を外さず、あたしはルディンを背中に隠したままゆっくりと立ち上がる。

ついでに服に付いた泥や草の葉をはたき、ちよつとため息をつきたくなった。

あゝ、覚悟はしてたけど思いつきり汚しちゃったよ……替わりの衣服を手に入れられたら、しっかり洗濯しとかないと……

「ところで、一人きりなのか？ 他に連れの姿などはないようだが」
考え込んでいたところにそう声をかけられ、思わず聞き流しかけてからあたしは慌てて男性に向き直って答えた。

「あ、うん！ そう……一人なの！」

「そりゃまた不用心だな。見たところ魔術の腕はそれなりに立つようだが……最近じゃ街道を歩いていても、賊や危険種に襲われることが珍しくないんだぞ？ なのに女一人で——それも街道から外れたところを歩いたりして……」

男性の口調に、真剣にあたしの身を案じるような響きがあるのに
気づいて、あたしは意外に思うのと同時にやや申し訳ない気持ちに
なる。

悪い人じゃないと思うんだけど……女性一人だからといって油断
しないのも、仕事柄当然といえば当然のことだろうし。向こうにし
てみれば、あたしは原っぱを甲狼ごと氷漬けにしてのけた魔術師な
んだろうし……

あたしはこの事態を引き起こした元凶であるルディンを、肩越し
にちらっと睨む。

いくら慣れない身体で使った魔術だったからって、ちょっとあの
結果はやりすぎだったんじゃない、ルディン？

「その……ちょっと道に迷っちゃって。ようやく街道を見つけて、
向かっている最中に甲狼に襲われたのよ。まさか、こんなところで
甲狼の群れが出るなんて思ってたし」

「まあ、最近の危険種の多さは確かに異常だが……でも、気をつ
けたほうがいいぞ。よかったら、近くの街まで俺たちと一緒に来た
らどうだ？ ルジムの街に向かっているところなんだが……」

「本当！？ いいの？」

思わず声を弾ませてあたしが言うと、男性はにと片頬に笑みを
浮かべて答える。

「あんたみたいな魔術の使い手が一緒に来てくれるなら、俺たちと

しても心強いしな。いざという時は手を貸してくれるかわりに、あなたの護衛料はただつてことでどうだ？　なんなら馬車の荷台に乗せてくれるように、依頼主に交渉してやってもいい」

あたしは一も二もなくうなずきかけてから、はたと思い直して背中へはりつくようにしているルディンに目をやった。

彼は難しい顔で――竜の表情はよくわからないけど、なんとなくそんな雰囲気で――考え込んでから、あたしに向かって首を縦に振る。

あたしはほっと表情をゆるませて、男性に視線を戻してうなずいてみせた。

「お願い――あ、ちょっと待ってて！」

背中のルディンをむんずとつかまえて男性に背を向け、その身体をしっかりと胸に抱え込むようにしながらあたしは男性の側を離れる。

「ね、どうしようルディン？　あの人たちと一緒に行くならルディンを隠さなきゃいけないのよね？　でもルディンを隠せるような大きさの袋とか持ってる？　あ、いっそのことこのポーチの中にでも……」

『落ち着け、エーリ！　というか、無理矢理詰め込もうとするな！』

ばたばたと暴れてあたしの手を逃れると、ルディンはあたしの顔のあたりまで飛び上がった鋭い目つきで睨んで言った。

『これは生き物を入れるようにはできていない！　考えてもみろ、身体の質量が完全に無効化されるのだぞ！　身体を離れた魂が戻れ

なくなる危険性が高いから、事故防止のために生き物は収納できないように設定されてる!』

「あ、そうなんだ……」

それにしても、短い間にずいぶん飛ぶのが上手くなったね。

『お前が魔術師と誤解されているのなら……使い魔と言えば、連れて歩いてもさほど奇異に思われることはないだろう。まあ、子供とはいえ竜を使役している魔術師など滅多にいるものではないが……それくらいの実力の持ち主だと思われれば、報復を恐れて簡単に手出ししてくるようなこともない——はずだ』

彼にしては歯切れ悪く告げる言葉に、あたしは少し考えてから首をかしげて「わかった」と答える。

「要するに、竜を使役できるくらいの大魔術師のふりをして、手を出したらやばいぞ」と思わせておけば、ルデインを隠して歩かなくても平気ってことなのね?」

『まあ……隙について奪おうと考える人間もいるだろうから、安心はできないがな。それでも多少の抑止効果は期待できるはずだ。それに——』

ルデインは言いにくそうに言葉を切って、少しばかり声を落ととして続ける。

『お前自身に手出ししようとする輩を牽制することもできるはずだ。さっきはつい失念していたが——魔術師の杖と使い魔がそろっていれば、さっきのようにたいいていの人間はお前のことを魔術師だと思いきむだろう。それはお前の身の安全を保証することにもつながる。俺がもっと早く気づいていればよかった……悪かったな』

「ううん」

ルデインの声にはしよげたような響きがあり、あたしは軽く笑って首を横に振った。

「今気がついたんだからいいんじゃない？ 心配してくれてありがとうね、ルデイン」

『……う、うむ』

「にしても、大魔術師のふりをするって言っても全然イメージわかないんだけど……なんとかごまかしてはみるけど、ボロ出そうになったらフォローしてよね」

『フォ……？ むろん協力はするが——あるいは、その必要はないのかも……』

ルデインの言葉は後半ごにゃごにゃと呟くようなものに変わり、あたしは首をかしげながらも半分それを聞き流して、凍りついたままの原っぱに目をやった。

さっきから全然溶ける気配がないんだけど……これ、このままにしておいていいのかな？

「ルデイン、ここなんだけど……」

あたしが白く凍りついた原っぱ（と三匹の甲狼）を指差すと、ルデインは気がついたようにああ、と声をあげた。

『威力が桁違いに上がったせいで持続時間が延びた——というより、もはやこれは永続魔法に近いな。このままにしておいたら、自然界の魔力のバランスに偏りが生じてしまいかねない。解除しておかないと……』

妙に冷めた他人事のような口調でそう言うと、ルディンはあたしの手元にすうっと近づいてきて、杖を握るあたしの手に小さな手を重ねる。

『力を貸してくれ。さっきと同じように、俺の呪文に意識を重ねるだけでいいから——』

「さっき？」

なにかやっただろうかと首をかしげるあたしに、ルディンは呆れたように言葉を返す。

『気づいてなかったのか？ お前が呪文の威力を何倍にも増幅したせいで、こんなことになったんだぞ』

「……え？ 嘘！？」

『嘘なんてついてどうする。とにかく、これを解除するためにはお前の協力が必要だ』

言われて、あたしは半信半疑ながらルディンが唱え始めた呪文に意識を集中する。

『凝る力、秩序と平衡の法則によりてあるべき姿へと戻れ——』

けれど、その必要がないことはすぐにわかった。彼が不思議な抑揚をつけてその言葉を唱え始めた途端、あたしの頭の中にその文言が——それが想起させる複雑な図式のイメージがはっきりと浮かび上がってきたのだ。

それは奇妙な体験だった。言葉そのものが持っているイメージではなく、まったく別の——見たこともない化学式めいた記号の群れが頭の中に浮かび、しかもそれがなにを意味しているのか、あたし

にはなぜか手に取るようにわかった。

（――これは、威力の指定。範囲はこの凍りついた部分だけでいいから、あの甲狼を中心に5メートルくらいで……）

無意識にあたしは頭の中でそんなことを考え、それに従って頭の中の図式が微調整されていく。特別なことをしているという意識はまるでなく、ゲームのコマンドを打ち込んでいくのとたいして変わりなかった。

ただ、それが生み出した効果は絶大だったけれど――

あたしの目の前に巨大な光る円陣が浮かび上がったかと思うと、地面を白く覆っていた氷は一瞬のうちに消え、それどころか襲いかかろうとした姿勢のままで凍りついていた甲狼たちまで、煙のように姿を消してしまったのだ。

「……………え？」

困惑するあたしに、ルディンは肩の上ではばたきながら、唸とも呟くともつかない複雑な声音で言った。

『甲狼まで分解したか……まあ、もともと魔獣は純粋な魔力から生み出された存在らしいからな。範囲指定はできたようだが、威力の加減はまだまだ未熟か』

「……………冷静な解説どうもありがとう」

あたしは半分頭を抱えて呻くと、軽く頭を振って思考を切り替える。

とにかく、野原はもとに戻ったんだし、いいということにしておこう！ 細かいことはこの際後回しだ。

強引にそう結論づけると、あたしは杖を片手にしっかりと握りしめ、馬に乗った男性のほうへと歩み寄っていった。

「ごめんなさい、待たせて——あの原っぱ、そのままにしておけなかったから」

「ああ……」

笑みを浮かべて答えかけた、男性の視線があたしの肩の上で停止する。

凍りついたような視線の先には、ぱたぱたと翼をはばたかせているルデインの姿があった。

「それって……まさか」

「あ、これ？ あたしの使い魔」

できる限りさり気なく、あたしは笑みを作ってルデインを男性に紹介する。

「名前はルデイン。見た目よりも凶暴だから気をつけてね」

『失礼な。お前に言われる筋合いはないぞ』

耳元でぼそと呟くルデインの尻尾を強く握って強制的に黙らせ、あたしは男性に「さ、行こう！」と声をかける。

「それはいいけどな……あんた」

まじまじとあたしの顔を見下ろして、男性が声を発する。

その声に真剣なものがにじんでいるのを感じて、あたしは内心で冷や汗を掻いた。もしかして……やっぱり、怪しまれたかな……？

「使い魔はいいが、あんたの名前は？」

「……へ？」

あたしが顔を上げると、髭に覆われていてもはっきりとわかる苦笑を浮かべた男性の顔がそこにあった。

「普通、使い魔よりも先に自分の名前を紹介するもんじゃないのか？ 見たことのない服装をしているが、あんたの故郷じゃそっちが普通なのかい？」

「あ……名前ね」

ほっとすると恥ずかしいのが半分半分の気持ちで、あたしは彼に答える。

「あたしは朝宮瑛莉——エーリでいいわよ」

「エーリ、な。俺はジオ——家名はあいにく持ちじゃない。なんせ、しがない雇われ用心棒だからな」

「ジオ……ね。よろしく」

彼の差し出した手を握りながらあたしが答えると、彼は榛色の瞳をきらっと悪戯っぽく光らせて、あたしの手をぐっと強く引っ張った。

「うわ、きゃ……っ!？」

軽々と馬上に引き上げたあたしの身体を、器用に鞍の上に腰掛けさせて彼は笑って告げる。

「こっちのほうが早いだろ。しっかり掴まってな！」

「ちよっと待って、落ちる……っ！」

鞍の上っていうより、半分彼の膝の上に抱っこされてる状態なんですけど！ いったいこの状態でどこに掴まれと!？

あたしの悲鳴にはかまわず、ジオは馬の腹を蹴ってかなりの速度で進み始める。

「きゃ~~~~~~~~っ！ 下ろして~~~~~！！」

長く尾を引いて流れる悲鳴を追いかけて、ルディン必死にぱたぱたと羽を羽ばたかせてくるのが視界の端にかろうじて引っかかった。

1-8 用心棒と使い魔（後書き）

馬に乗ったことがある人ならわかりますが、マジ高くてしかも揺れます。専用の鞍なしの二人乗りはかなり危険。ファンタジーってことでお見逃しください。

1-9 大魔術士現る？

さいわいなことに移動距離はそれほど長くなく、数分もかからないであたしとジオを乗せた馬は、街道の少し先で待っていた彼の仲間のもとへと到着した。

とはいえ、あたしにとってはそれだけでも十分過ぎるくらい過酷だったけど。

「うう……目が回る……」

鞍の上でぼんぼん荷物みたいに跳ねまくったせいで、頭はくらくらするしお尻も痛い。それでも落っこちずに済んだのは、ジオが片手で器用に支えていてくれたおかげだろう。

だけど彼が問答無用で馬に乗せたりしなければ、こんな目にも遭わなかったわけで……ここは差し引きゼロってことで、恩には思わないでおこう。

『大丈夫か、エーリ？』

やっと追いついてきたルディンが心配そうに声をかけ、あたしは結局役に立たなかった彼を恨めしそうに睨みながら、よっころせと馬から下りようとする。

けっこう高さがあるけど、このくらいなら飛び降りてもそんなに危なくはないだろう。

「あ、おい……！」

スカートがまくれ上がらないよう気をつけながら、腰の位置をずらして下りようとした——その瞬間、あたしの身体がぐらっと大きくバランスを崩した。

「きゃ……あああっ！」

頭から落ちそうになったところでジオの手があたしの肩をつかみ、
かろうじて真っ逆さまに落ちるのは防ぐけど勢いは止まらない。

お尻から落ちる形になったあたしの下に、ぎりぎりでルディンが
滑り込んだ。

だけど彼一人（一匹？）の力であたしの体重を支えきれぬわけも
ない。あたしは悲鳴をあげながら、彼を巻き添えにして地面の上に
転がり落ちていった。

「うう……大丈夫、ルディン？」

ルディンの努力の結果か、落ちた衝撃はそれほどものではなく、
あたしはすぐに身を起こして下敷きになったルディンに呼びかけた。
16歳女子としては平均的な体重だけど（ぎりぎりだけど平均！
若干重めなのは筋肉ついてるせい！）、ルディンからすれば何倍
もの重さだ。声をかけながら慌ててルディンの上から避けようとし
て——あたしは彼の姿が見えないことに気がついた。

「ルディン……！？」

思わず声が大きくなった瞬間、お尻の下でもぞもぞと動く感触が
する。

きゃつと声をあげそうになったが、とりあえず無事とわかってあ
たしは表情をゆるめて腰を浮かしかけ——同時にその感触がスカー
トの外ではなく、中から伝わっていることに気づいて今度こそ盛大
な悲鳴をあげた。

「きゃあああああっ！ どこ入ってんの！！」

『ちょ、いや——入ろうと思って入ったわけじゃ！ それより早く

避けて――』

あたしは飛び上がるような勢いで立ち上がり、スカートをばっさばっさと振って中に入っていたルディンを追い出す。転がり出たルディンは半分目を回していたみたいだけど、そんなことに気を配る余裕はなかった。

「み……見てないよね？ なにも見てないよねっ!？」

迫るあたしの剣幕に気圧されたように、ルディンは何度もこくこくとうなづく。

そう、見てないならいいんだ。祐貴子さんの厳命で、スカートの下にはスパッツとかタイツとか余計なものはいっさい履けないとか（せっかくの衣装のラインが崩れると言われては反論できない。ポケットにも本当は手鏡くらいしか入れられない決まりになっている）、見えないところに一番気を遣うべしって方針のもと、レースたっぷりの下着にお揃いのガーターベルトまで付けてるとか、そんなことはいっさい気にする必要は……

「――本っ当くに、見てないのよね!？」

思い出したらいっそう恥ずかしく、しばらくじたじた足踏みしたあとであたしはルディンの両翼を掴んで涙目で念を押す。

ルディン硬直したあと、堪えきれなくなったようにさっと目を逸らした。

ちょっと待て、その反応はなんだ――!？

「おい、大丈夫か?」

やけにのんびりした声が上がって振ってきて、あたしははっと我に

返ってルディンを揺さぶろうとしていた手を止めた。

顔を上げると、馬から下りて側に立っていたジオの姿が目に入る。彼はあたしたちの——というより、主にあたしの大騒ぎにをさほど気にかける様子もなく、笑顔で声をかけてくる。

「手を貸す間もなく、さっさと一人で下りちまうもんだからな。そんなに慌てなくても良さそうもんだらうに」

「あ……ごめん」

思わず謝るあたしに、肩をすくめるような身振りで答え、ジオは少し離れた場所に停まっている数台の馬車のほうへ馬を引いて歩き出す。

あたしはルディンから手を離すと、側に落ちていた杖を拾い上げて彼のあとを追った。

馬車の側にいたのは、ジオと同じような風体をした数人の男たちだった。皆抜き身のままの剣を手にして、あたりには緊張した気配が漂っている。

その中心にあるのが、斬り捨てられた何体かの甲狼の死骸だった。

「ジオ、そいつは——？」

探るような幾対もの視線が、あたしに容赦なく突き刺さる。

あたしは内心ちよつと怯みながらも、胸を張って彼らの視線を受け止めた。あたしの後ろをついてきていたルディンが前に出ようとするのを、首根っこを掴んで止めて庇うように背側に放りやる。

いくら「使い魔」という方便があるにせよ、好きこのんで彼の姿を人目にさらすこともないだろう。

「ああ、彼女はエーリ——向こうのほうで、甲狼に襲われていたんだ」

あたりに流れる緊張した空気にかまう様子を見せず、ジオはそれまでと変わらない穏やかな口調で言った。

「まだ若いが、腕の立つ魔術師らしい。襲ってきた甲狼の群れを、ほとんど一瞬で全滅させたくらいだからな」

「全滅……？」

男たちは顔を見合わせ、ついで彼らの視線があたしの手に持つ杖に集中する。

それを背中に隠したい衝動に駆られながらも、あたしはジオに向かって一点だけ修正を促すことだけは忘れなかった。

「全滅じゃないわよ。最後の一匹は、ジオが倒したんだから」

「そうだったか？ まあ、ほとんど全滅したようなもんだから同じだろう？」

「全然違うわよ。その一匹を仕留め損なったせいで、危うく死にかけたんだから——ジオが助けてくれなかったら、間違いなくあの世行きだったわよ」

言い合うあたしとジオを、男たちは毒気を抜かれたような顔で見つめやる。

やがてリーダー格と覚しき大柄な男性が、あたしたちの前に歩み出てきて笑みを含んだ視線をジオに向けて言った。

「逃げた甲狼を追ってどこまで行ったかと思えば——しっかりそんな可愛い子ちゃんとお知り合いになってたとはな。相変わらず抜け目のない奴だ」

冗談めかした言葉にジオはまあな、と笑ってうなずいて、あたしの肩に軽く手を置いて男性へと言葉を投げやる。

「向かう方向が同じだって言うんでな。一人旅は危ないし、よけれ

ば一緒に来ないかと言って誘ったんだ。なにしろこのご時世に女の子一人で――それも街道から外れた場所を歩いていくくらいだから」

男性はその言葉に、驚いたとも呆れたともつかない視線をあたしに向ける。

あたしはややむっとするものを感じて口を開きかけたけど、ジオが笑いながら言葉を投げ返すほうが早かった。

「それでまがりなりにも無事にここまで来られたってことが、腕のいい魔術士の証ってことにならないか？　実際、目の前で実力を見せてもらったが、三頭の甲狼が一瞬であたりの地面ごと氷漬けになっちゃった――それだけの力のある魔術士が、街まで同行してくれるっていうなら俺たちにとっても悪い話じゃないだろう？」

「そりゃあ……まあ」

そう答えながらも男性は半信半疑の目であたしを見やり、あたしは今度こそなにか言い返してやろうとしたけど、それより早くジオが「行くぞ」と声をかけた。

馬車のほうに向かって歩いていくジオを止めるものはおらず、あたしは仕方なく早足で彼について歩き出す。

あたしのあとを見送った――男性の目が、その時大きく見開かれた。

「おい、あんた……！」

ぎょっとしたような口調で声をかけられ、あたしは足を止めて振り返る。

男性の目があたしの後ろを飛んでいるルディンに向けられていることに気づいて、あたしは内心ぎくりとしたものの平静を装って言葉を返した。

「なに？」

「そ……そいつ、もしかして竜か？　ずいぶんちっこいが……」

「そうだけど——なにか問題ある？　一応、あたしの使い魔なんだけど？」

わざと居丈高な口調を作って問い返すと、男性は「いや、問題ってことは……」と言葉を濁して目を逸らす。

「そう？　なら良かった。使い魔ともどもしばらくお世話になると思うけど、よろしくね」

にっこり笑ってそう告げると、男性はやや腰の引けた様子で「あ、ああ」とうなずく。

周囲の男性たちも似たり寄ったりの様子で、あたしは小さく鼻を鳴らすと少し先で立ち止まっているジオのもとへ、足を速めて歩み寄っていった。

「な～んか、感じ悪いわね。馬鹿にしたような態度取ったかと思えば、急にびくついたりして……竜を連れてるってわかっただけで、あそこまで態度が変わるもんなの？」

ぶつぶつと呟きながら歩いていると、言葉の内容を聞きとめたジオが苦笑しながらあたしの顔に目をやって言った。

「そりゃ変わるだろう。竜っていえば、超一級の危険種だからな——成体の竜なら一体で街を一つ壊滅させることもできるくらいだ。どうやって使い魔にしたのか知らんが、そんなものを連れ歩いてる相手に、びくつくなんてほうが無理な話だ」

「……そうなんだ？」

ちよっと驚いてジオを見返すと、彼は少し呆れたような目をあたしに向けた。

「つて、知ってて連れ歩いてたんじゃなかったのか？ いったいどこのド辺境から出てきたんだ……子供だって知ってるようなことだぞ？」

「あゝ、まあ……ちよっとわけありで」

やや苦しい言い訳をしながらあたしは目を逸らす。

ジオはなにか言いたげな目つきであたしの顔を見ていたけど、ちよどそこであたしたちは馬車の前に到着した。

二頭の馬が引くがっしりした箱形の馬車に乗っていたのは、40代半ばと見える恰幅のいいおじさんだった。

名前はオージス。このラウム国を中心にあちこち回っている行商人で、ここにある馬車（数えてみたら五台もあった）はすべて彼の所有するもののだそうだ。見た目はいかにも人の良さそうな赤ら顔のおじさんなのだが、案外やり手みたい。

「魔法使い？ こんな可愛い娘さんがかい！ いやゝ、そりゃびつくりだねえ……一緒に来てくれるのかい？ もちろん大歓迎だとも！ 荷馬車の隅っこなんて言わないで私の馬車に同乗していくといい！ むさい護衛よりも可愛い女の子の顔を見ているほうが、私としてもずっと旅が楽しくなるってもんだ！」

オージス氏はあたしの同行を快く了承し、馬車に乗ることも許してくれた。

というか、あまりの歓迎ぶりになにか裏があるんじゃないかとか疑ってみたくなったけど、腕の立つ魔術士というジオの紹介がよか

ったのと、あとは根っからの世話好き——特に女の子に対して——の性格のせいらしい。

あたしが（小さいとはいえ）竜を連れていることを知っても、ちよつと驚いた程度であとは「たいしたもんだ、まだ若いのに！」とからりと笑って褒めてくれた。お世辞にも美形とはいえないおじさんだけど、笑い皺がとても魅力的な人を引きつける笑顔だった。

馬車に同乗していた護衛の人や、補佐らしき女の人にもとても信頼されている感じだったけど、なんとなく気持ちができるような気がする。

「……で、結局ここにしたのか？」

馬車の損傷や傭兵たちの傷の具合を確かめて（二人ほど軽傷を負ったそうだ）、隊商が再び街道を進み出したところで、ジオがあたしに声をかけた。

あたしが座っているのは、隊商の一番後ろを進む馬車の荷台だ。

オージス氏は自分の馬車に乗るよう勧めてくれたんだけど、狭い箱形の馬車はすでに満員の様子だったし、あたしのかわりに誰かが馬車を降りることになるのも避けたかったので「なにかあった時、すぐ対応できないと困るから」という名目で断ったのだ。

それに狭い馬車の中じゃ、ルディンと話す内容も丸聞こえになっちゃうだろうし……

「向こうの馬車のほうが、乗り心地は良かったんじゃないのか？
せっかく勧めてくれたんだから、大人しく向こうの馬車に乗って
いけばよかったらうに……」

言いながらも、ジオの声には笑みの気配が含まれている。あたしは馬車の荷台に後ろ向きに腰掛けたまま、すぐ後ろ（あたしにとっては目の前）を馬に乗って進むジオの髭面を半眼になって睨みつけた。

「別にいいでしょ？ 狭い馬車の中で、知らない人と長時間顔をつきあわせるよりもこっちのほうが気楽だったし」

オージス氏は悪い人じゃないと思うけど、ほとんど初対面の――それも父親みたいな年齢の人と同じ馬車でずっと移動するなんて、想像しただけで疲れそうだ。

おまけに相手はあたしのことを、腕利きの魔術士だと思っているわけ。

ボロを出さないように誤魔化し続けるのにも限度があるし、それ以上にやたらと褒めちぎられると落ち着くなくて腰のあたりがむずむずする。

魔術士としてならまだいいんだけど、「可愛い」を連呼されると、十人並みを自覚している身としては、なんというかもういたたまれなくて……お世辞だとはわかってるけどさ（あとは祐貴子さん直伝のメイクのおかげか。だいぶ落ちてると思うけど）。

「オージスは話し好きで気遣いにも長けているから、長い時間一緒にいてもそれほど気詰まりじゃないと思うがな」

そんなあたしの顔を身ながらジオは笑って言い、あたしは彼の口調にほんのわずか違和感を感じてその顔を見返した。

依頼主に対して、ずいぶん気安い口のききかたをと思ったのだ。

あたしの表情からその疑問に気づいたのか、ジオは髭に覆われた顔にわずかに苦笑めいた表情を浮かべて付け加えた。

「古馴染みなんでも——もう何年も前からの付き合いになる」

「へえ、そうなんだ」

ただの知り合いに対して、そこまで気安い口のききかたをするものかとも思ったけど、あたしはその思いを口に出しはしなかった。それよりも先に、隊列を組んで進む馬車の前のほうから声があがったのだ。

「前方に騎影！ 数は十二、三！」

さっと周囲の傭兵たちの間に緊張が走るのを、あたしは目を丸くして見守った。

前方に目をやったジオの表情は先程までと変わりなかったが、あたしにちらりと目をやって投げた声には鋭いものがにじんでいた。

「ただの旅人なら御の字だけだな。あんたはどっちだと思う？」

「……は？」

戸惑った声を返すあたしに、ジオはにやっと口の端を吊り上げて告げる。

「このところ、旅人の懷を狙った盗賊も急増している。笑って挨拶してすれ違える相手か、それともお互い刃を向け合うことになるか——賭けてみるか？」

あたしはジオの言葉の意味を悟って、顔をこわばらせる。

軽い口調を作っではいたが、ジオの言わんとすることは明白だった。あたしは彼の顔を睨みつけて、尖った声を投げ返す。

「わ、笑って言ってる場合じゃないでしょ？　もし盗賊だったら――」

言葉の続きが、あたしの口の中で途切れる。

もしも盗賊だったら、お互いに命のやりとりをすることになるのだろうか？　身を守るためには相手を傷つけることも――場合によっては殺すこともやむを得ないのか。

鼻白んだ表情になったあたしに、ジオは宥めるような笑みをのぞかせて言った。

「ま、ただの旅人って可能性もないわけじゃない。俺としてもそっちのほうがあるがたい――せいぜい祈るとしようぜ」

あたしはうなずくこともせず、腕に抱いたルディンをぎゅっときつく抱き締める。

無意識のうちにかなりの力が入っていたが、ルディンは文句を言うようなこともせず黙って大人しく抱かれていた。

ジオの目を意識していたせいもあったらうけど、あたしの不安を感じとっていたのだろう。

内心、彼に感謝しながらあたしは皆の心配が杞憂で終わることを、これまでないほど真剣に願っていた。

1-9 大魔術士現る? (後書き)

なりゆきで商隊合流。あと馬から落っこちて下着云々の話になるシーン、ずつとやりたかったシーンなので書いて満足(笑) どこから落っこつことすか迷ってましたが、結局馬からになりました。よかったよかった、妙な地下遺跡とか書かないで済んで……

1-10 大魔術士の實力

あたしを乗せた馬車は次第に速度を落とし、やがてきしむような音を立てて停まった。

荷台の後ろから身を乗り出して、あたしは前方を見やる。胸にルデインを抱き締めたまま、この一時停止が単なる道の譲り合いですむよう祈っていたあたしの願いは、残念ながら叶えられそうになかった。

前方に見えるのは、馬に乗った十二、三人の男たち。

そのすべてが剣や槍などで武装し、少し離れた場所に控える数人が引き絞った矢の先を先導する傭兵たちに向けている。

男たちが身につけているのは薄汚れた衣服と革鎧で、髭に覆われた顔はいかにも盗賊でございと言っているようなもの。

その中央に立った男がにやりと笑って、あたしたちに向かって言った。

「よし、一気に突っ切ろうなんて考えなかったことだけは褒めてやる。そんなことをしたら、今頃はいい矢の的になっていただろうかな」

できれば馬は無傷で手に入れたいんだ、と男は当たり前のことのように言う。

「馬と荷物を置いていってくれば、命までは取ったりしねえよ。俺たちはできるだけ人殺しはしない主義なんだ。ただ、逆らうようなら――」

男が語っている間に、あたしの視界の片隅でジオはほとんど気配を感じさせない動きで肩にかけた弓を手取る。

馬車の陰で男たちからは死角になっているためもあって、誰もその動きには気づかなかったようだった。彼は続けて背中矢筒から三本ほど矢をまとめて抜き取り、指の間に挟むようにしてそのうちの一本だけを弓につがえる。

その動きを、あたしは言葉も出せないままただ呆然と見つめていた。

頭をよぎったのはさっき彼が見せた、正確無比な弓の腕。甲狼の装甲の継ぎ目を正確に射抜いた彼の腕があれば、盗賊たちを射殺することなどたやすいだろう。

おそらく彼が真っ先に狙うのは、弓を構えている三人ほどの盗賊たち。

彼らは他の者よりもやや離れて立っているが、ジオの腕ならそんな距離はないにも等しい。

「……どう、しよう……」

知らず呟いていた声に、腕の中のルディンが聞こえるか聞こえないかくらいの声で応えた。

『手出しは無用だ、エーリ。あの男の腕なら盗賊の十人やそこら、恐れる必要などない。他の傭兵たちだっているし……』

「違う——あたしじゃなくて。あの盗賊たちが……」

声が震えそうになるのをこらえ、あたしはジオを見つめたまま言葉返す。

「このまま……撃たれるのを見ていることしかできないのかな？」

殺されるかもしれないのに……そりゃ、人を襲うような連中だってわかってるけど」

『盗賊に同情するのか？』

ルデインの声にはやや驚いたような響きがあり、あたしは反射的にむっとする。

「同情っていうか、問答無用で人が殺されるのが嫌なだけ！ 怪我だけで済ませるとか、捕まえて警察——じゃなかった、とにかくきちんと裁いてもらうとか……できないの？」

『……たいていの国では、盗賊は捕まり次第縛り首だ』

ルデインの声は重く、断固とした響きをのぞかせていた。

『怪我を負わせて追い払っても、今度は別の人間が連中に襲われることになる。その時死人が出たら、取り逃がした私たちにも責任の一端があることになると思わないか？ どんな理由があろうとも、武器を取って人を襲った時点でそいつらは反撃に遭う覚悟もしているはずだ。その覚悟もないのに人を襲うような連中なら、なおさら野放しにはしておけん』

「それは、そうだけど……」

あたしは言いながら、近づいてくる盗賊たちを見つめる。

こっちに近づいてくる盗賊があたしたちを発見する前に、ジオは弓を持った盗賊たちを射倒すつもりだろう。

他の傭兵たちも、ジオの考えを読んでいるのか抵抗らしい抵抗もしない。

もう、時間がない……ただ黙って見ていること以外、あたしにできることはないのか。

ルデインを抱きしめる腕にさらに力が入り、ルデインはなにか言いたそうな目をあたしに向けたけど、結局なにも言わずに視線をそ

らした。

真っ黒な鱗に覆われた顔が、妙に人間臭く見えてあたしは複雑な気分であつむく。

その時、あたしの脳裏に一つの考えがひらめいた。

瞬間的にあり得ない、と却下しそうになったけど、そこで思考を停止して心の中で自分に向かって問いかける。

（本当に……無理？ 絶対にあり得ないと思う？）

16年現代日本人として生きてきたあたしの常識が、ほとんど反射的に無理に決まってる、と答えかけるのをあたしは心の中で遮る。
（本当に……？ だって、目の前に実例がいるんだよ？）

『……エーリ？』

ルディンが心配そうなのと、訝しむのが半々の声をあたしに向かってかけ、あたしは同時に顔を伏せたまま口を開いた。

「ルディン。あたしに力を貸してくれる？」

決意が加わった硬い声に、ルディンが一瞬怯んだような沈黙を返す。

『……力？ お前、自分であの盗賊たちを……？』

「——ることって、できる？」

ルディンの言葉を最後まで聞かず、あたしは彼の耳元に口を付けるようにして尋ねる。

息がかかったせいか、ルディンはびくつと耳を震わせたけど、あたしの質問についてはすぐに答えてくれた。

『……術そのものは存在している。だが、そう簡単に成功するものではないぞ……一級の魔術士が入念に準備して、それでやると成功するかどうかの……』

「あたしが増幅器になるって言ったの、ルディンでしょ？」

ちよつとだけ口元に笑みを浮かべて、あたしはルディンに言い返す。

「それでも成功の確率は低いかな？ それともルディンには使えない術？ だったら、あきらめるしかないけど……」

『……これでも魔導書に載っている術は、全部諳んじている』

いささか慚然とした口調で返しながら、ルディンはあたしの顔を見上げる。

『だが……呪文と術の構成はわかっているけど、実際に使ったことは一度もない。その必要もなかったからな。成功するかどうかは——お前が魔力を増幅したところで五分五分といったところだ』

「五分五分だったら、十分確率は高いわよ——降水確率50パーセントなら、その日はほとんど間違いなく雨だもの」

笑ってルディンに言うのと、あたしは顔を上げる。

半分は強がりだ。うまく行かなかったら、命と命のやりとりになることは確実。それでも、なんとかできる可能性があるなら、試しもしないであきらめたくはなかった。

これは彼らに対する同情とか、人道的見地とかそういうものではなくて——あたしが気持ちよく眠れて、ご飯を食べることができかどうかという個人的な気持ちの問題。たと思ふような結果が出なくても、なにもしなかったって後悔するよりはずっとマシだから。

あたしは弓を構えようとしているジオに顔を向けて、低めた声をかける。

「ジオ、ちょっと待って——あたしがなんとかする」
彼の答えを聞くことなく、あたしは馬車の荷台から飛び降りると手に握ったままの杖を目の前に掲げる。

同時にあたしの腕を離れたルディンが、ぱたぱたと羽根を動かして肩に移動する。

ジオはあたしに向かってなにか言いかけたようだったが、あたしはそれも聞かずにルディンの声に耳を澄ませた。

『対人型の術は対象を視界に収める必要がある——場所を移動するぞ』

「移動って……？」

言いかけた瞬間、ルディンが声高に一言唱える。

『^{レグルム}空翔！』

その声が耳に入った瞬間、あたしの目の前に身体の半分くらいのパズルが浮かび上がり、ふわっと身体が軽く浮き上がった。

「と……うわっ！」

体重がなくなったような奇妙な感覚に思わず声を上げながら、あたしは空中高く舞い上がっていく。思わず足元に向けた目に、ぽかんと口を開けているジオの姿が映り、あたしははっとしてスカートの裾を片手で押さえた。

み……見られた、かな？　一瞬だったし、見られてないといいけど……

「飛ぶなら先に言って……！」

あたしはルディンに文句を言おうとしたけど、それより先にルデ

インがあたしに向かって厳しい声を投げる。

『そんなこと言ってる場合か！　すぐに次の術を使うぞ、心の準備をしておけ！』

見る見るうちに先頭のオージスさんの馬車が近づいてきて、あたしは反射的に膝をぐっと曲げて着地の姿勢を取る。

周囲の傭兵たちも、盗賊たちも啞然としてあたしを見上げている様子だ。

でも、我に返った盗賊たちが弓の狙いをあたしに変更するのを見て、あたしはルディンの声にのぞいた焦りの原因に気づく。

これって、まさに狙い撃ちの的状态なんじゃ……？

着地の衝撃は思ったより——というよりほとんどなく、ふわりと羽根のように馬車の屋根に降り立つのと同時に、ルディンが声高に呪文を唱えた。

『来たれ天の楼閣、絶対なる守護の砦——空嶺陣！』
ミッドラル

うつすらと輝く円陣があたしの足元に浮かび上がったかと思った瞬間、何本もの矢があたしたちに向かって放たれる。

「——っ！」

思わずあたしはその場にしゃがみ込みかけたけど、それよりも早くあたしの周囲を取り巻いた半透明の幕がそれらを全部弾き返した。

安堵の息を吐きそうになったあたしに、ルディンがさらに硬さを増した声で告げる。

『ぼうっとするな、エーリ！　連中の狙いがこちらに向いている今しか機会はない！　狙いを変えられたら厄介だぞ——！』

その声であたしは気を引き締めて、しゃがみ込みそうになった膝に力を入れて立ち、両手に杖を握りしめて盗賊たちを睨み据える。

前方に7人、離れて立つのが4人、後ろに回り込もうとしているのが3人……てことは、全部で14人か。

彼らすべての位置を確認したところで、ルディンがどこか歌のようにも聞こえる独特の抑揚をつけた声を発し始めた。

『エスト・ルーノル・ディノ・グラウム・ドルマ・レグ・ティグワ
ンズ——』

今まで聞いたことのない、不思議な音の連なりだ。

まったく耳に馴染みのない言葉なのに、聞いているとなぜか頭の芯が痺れたように引き込まれる感じがする。意味なんかさっぱりわからないのに——独特の節回しのせいなのか、意識がそこに吸い寄せられて離れない。

これまでルディンの唱える呪文を聞いていた時にも、同じような感覚はあったけど——その時よりもずっと強烈に感じる。

まるで意識がどんどん塗り潰されていくみたいに、それ以外感じられなくなっていく。

だけど、その一方であたしは術の対象になる相手の位置と、ルディンを中心に集まってく力の流れをもクリアに感じていた。

頭の中に、ゲーム画面の表示みたいに図式化されたそれがはつきりと浮かび上がる。

力の流れの滞っている部分や、力の強すぎる部分もそこだけ別の色で表示されているように一目でわかり、あたしはその歪みがなんとなく気持ち悪くて頭の中で修正する。

力の配分を整えて、不足している部分を補って、文字化けしているようにごちゃついた箇所をショートカットして繋ぎ——

ほとんど無意識にそれらの作業を行って、あたしがいつの間にか

閉じていた目を開けると、目の前には複雑に絡まり合った何重もの光の輪が浮かび上がっていた。

それが何層にも重なった円陣だと気づくのに、一瞬の間が空く。息づくように輝く円陣は見ている間にも自ら成長するように複雑さを増していき、やがて完成したのは精巧な機械の内部のように見える図形だった。

「……なに、これ……？」

愕然と呟いたあたしに、肩の腕で息を整えていたルディンが呆れたとも恐れるともつかない視線を向ける。

けれど彼はなにも言わず、目の前の図形に視線を戻して最後の一言を口にした。

『ティムニーオグ・レルマ——レスクリオフォーム生体変異！』

同時に図形が光を放ち、その光が導火線を伝わるように周囲に立つ盗賊たちのもとへそれぞれ伸びていく。

図形の光に気を取られたせいで、彼らはそれに気づくのが一瞬遅れた。

だけど、気づいたところで意味はなかっただろう。彼らの足元に到達したところで光は空中の図形に似た——ただしそれをはるかに簡略化したような図形に変わって、彼らの身体を呑み込んだのだ。

次々に光の中に呑み込まれていく盗賊たちを、傭兵たちは中途半端に身構えた格好でぎょっとしたように見つめやった。

光が薄れ、やがてそこに現れたのは——

チュウ、と鳴く手のひらくらいのネズミだった。

ネズミたちは困惑したように周囲を見回してから、自分たちの姿に気づいて飛び上がるほど驚いたようだった。

完全にパニックになった様子で、そこらを意味もなく走り回ってから周囲の傭兵たちの存在に気づき、慌てたように草むらの中に逃げていく。14匹のネズミが残らず——草に隠れて見えないのかもしれないけれど、多分——逃げ出していったあとで、あたしはどっと疲れを感じて馬車の上に座り込んだ。

『どうやら、上手くいったらしいな——まさか、成功するとは思わなかったが』

「……成功すると思ってなかったのに、手を貸したわけ？」

思わず脱力しながら言葉を返すあたしに、ルディンはややばつが悪そうに視線をそらす。

『まあ……上手いかなかったら、麻痺でもさせてそれからゆっくり処遇を考えようと思っていたからな』

「なんだ、ルディンもやっぱり殺すのは嫌だったんじゃない」

くすくすと笑って、あたしは馬車の下のように視線を戻す。

馬車の下では傭兵たちに混ざって、オージスさんも驚いたような目をあたしに向けていた。

ああ、屋根の上に勝手に登った——というか、降りたことを謝っておかないと。

ルディンにさっきの呪文をもう一度唱えてもらって、あたしはふわりと馬車の屋根の上から舞い降りる。

スカートの裾を押さえたまま着地し、あたしはオージスさんに向かって頭を下げた。

「ごめんなさい、屋根の上ではたばた騒いじやって……でも、あの、盗賊は一応……撃退しましたから」

オージスさんはそんなあたしを、呆然と目を丸くして見つめていたけど——やがてぴしゃりと両手で自分の頬を叩き、大きく息を吐き出す。

あたしに向けた目には、今までと同じ大らかな笑みがのぞいていた。

「いや、すまないね——まさか、お嬢さんがこれほどの大魔術士だとは思わなくて。私もまだまだ、人を見る目がなかったってことだな」

「だ……大魔術士って、あたしはそんな……！」

慌てて否定しようとして、あたしは周囲の傭兵たちのあたしを見る目にも気づく。

彼らは一様に、怯えとも不安ともつかない表情をのぞかせていた。あたしと目が合うと、さっと顔を背けてしまう者もいる。

リーダー格の男性だけは、かろうじて笑みとわかる表情を浮かべてあたしを見返してくれたけど、その笑みはややぎこちなかった。

「……しかしまさか、ネズミに変えちまうとはね」

思わず言葉をなくしたあたしに、背後から歩み寄ってきたジオが声をかけた。

その口調はこれまでと少しも変わりなく、振り返ったあたしに向けた笑顔も鋭さと呑気さが混然とした、彼のいつもの表情だった。

「魔術士ならではの解決手段だな……まあ、連中を殺さなくて済んで、こっちもほっとしたといやほっとしたが。けど、ある意味——殺すよりも厳しい罰かもしれないねえぞ？　ネズミの姿で連中がどれくらい生き延びられるか……」

「それでも、死ぬと決まったわけじゃないでしょう？」

遠慮のないジオの物言いに、むっとするのはとほっとするのが半

々の気分で、あたしは彼を見上げて言い返す。

「問答無用で殺してしまうなんて、嫌だったんだもの。だからって追い払うだけじゃ他の誰かが襲われることになるかもしれない——だったら、他の誰かを襲うことができないようにして追い払うしかないでしょ！」

口を尖らせて言い返すあたしを、ジオはちょっと目を丸くして言い返すとその目を和めて、ぽんぽんとあたしの頭を叩く。

子供をなだめるような仕草だったけど、あたしは気にはならなかった。

むしろ、その手のひらの感触になぐさめられるような気分で、あたしは深くうつむく。自分なりに考えて出した結論だったけど、それでも——本当にこれで良かったのか、他にやりようはなかったのかという思いが胸の中で渦巻いている。

それを読み取ったように、ジオはあたしの頭に手を置いたまま言った。深く響く、耳障りの良い声で、

「考えてみりゃネズミはネズミでも、あいつらは人間の知恵を持つネズミだものな——普通のネズミみたいに、簡単に他の獣に食われてしまうこともないか」

それは、ジオなりの慰めの言葉だったのかもしれない。

あたしは深くうつむいたままその言葉を聞き、ぎゅっと唇を噛みしめて顔を上げ——ようとして、そこでくらくら目眩のようなものを感じた。

「……え？」

身体のバランスを崩したあたしを、ジオが慌てて抱き止める気配がする。

けど、それをあたしははっきりと認識してはいなかった。まるでテレビの電源をオフにしたみたいに、急に意識が途切れ——

何人かの人間があたしの名前を呼ぶ声が聞こえた気もしたけど、それははっきりと意識には残らなかった。

1-10 大魔術士の實力（後書き）

定番の対盗賊戦です。瑛莉なりに考えた解決方法。王道でいくならかエルなんでしょうが、個人的にカエルよりはネズミのほうが……だったもので（笑）

1-11 大魔術士の意外な特技

「……あれ？」

あたしが目を開けると、あたりは真っ暗になっていた。

ぱちぱちと何度かまばたきして、あたしは自分が柔らかいものの上に横になっていることに気づく。手触りからして、毛布かなにかの上だろうか。

同時に、あたしは盗賊たちをネズミに変えて追いついたあと、意識を失ってしまったことを思い出す。

とすると……誰かがここに、あたしを運んで寝かせてくれたってこと？

まわりの様子からして、屋外にそのまま放置されてるようではないけど……ぼんやりと人の話し声なんかも聞こえるし、テントの中みたいな感じだ。

そう思いながら、あたしがゆっくりと身体を起こそうとした時、あたしの頭のすぐ上のほうで声がした。

『まだ横になっていたほうがいい。無理はするな』

「……ルディン？」

声の方向に目をやって問いかけると、うなずくような気配とともにあたしの額に小さな手がぺたりと載せられた。

ひんやりとした手のひらの感触が、ちょっとだけ気持ちいい。

「……ここは？」

あたしの問いかけに、暗闇の中ではっきり姿の见えないルディンが声だけで答える。

『あの商隊の主が所有する天幕の中だ。意識を失ったお前をそのま

まにしておくわけにはいかないと、あのジオという傭兵が主張してな。あの場所で野営することにして、最初に用意したこの天幕にお前を運び入れたんだ」

「……うわぁ、それって……」

あたしは闇に包まれた天井を見上げたまま、深くため息をつく。

「迷惑かけちゃったなあ。オージスさんにも、あとできちんとお礼言っとかないと……」

あたしの声に、ルディンはわずかに沈黙してから低い声で言った。
『迷惑をかけたのだとすれば、原因は私にある……お前が気にすることではない』

「……え？」

『あんな複雑な術を、それも14人に対象拡大してかけるなんて無茶な真似をすれば、倒れるのが当たり前だ。普通はまず成功しないものだが——お前の力を試そうなどと考えて、あえてそんな術を使わせた私にすべての責任がある』

「責任って……やるって言い出したのは私じゃない！」

あたしはごろりと転がって、うつ伏せの状態で顔を上げてルディンを睨み付ける。

だいぶん暗さに目が慣れてきていたけど、さすがにこの暗さの中で真っ黒なドラゴンの姿を判別することは難しい。

暗闇の中に、かろうじてそれらしい輪郭を見て取ることができるくらいだ。

「それに、あたしの力って……どういうこと？ あの手を使ったのはルディンでしょう？ あたしはただの増幅器で——それとも、増幅器としての力って意味？」

『違う』

ルディンはきっぱりと答えたけど、それはあたしの最後の質問に
対してではなかった。

『あの術を使ったのは——あの盗賊たちをネズミに変えたのは、エ
ーリ、お前だ』

「……は？」

思わず間の抜けた声を返してから、あたしはその言葉の意味に気
づく。

「え……ええええっ!？」

『おそらく、前回も——私の魔術をお前が増幅したのだと思ってい
たが、たぶん逆で——私の起動した呪文を、お前が認識することで
術が発動したんだ』

「は……発動って」

あたしはほとんどなにも考えず、呆然と言葉を返す。

「そんなこと、あるはずが……あたしは単なる巻き込まれた一般市
民だよ？ 魔術なんて存在するとさえ思ってたくなって、家事能力ゼ
ロの父親のかわりに家事に精を出すだけのごく普通の女子高生で——
—そりゃあ、メイド喫茶なんてちよつと特殊なところでバイトして
るけど……」

だんだん混乱してきて、自分でもなにを言っているのかわからな
くなってきたあたしに、ルディンは冷静そのものの声を投げ返す。

『だが、事実だ。さっきは私はほとんど自分の魔力は使わず、ただ
呪文を唱えたただけだった。なのに術は発動した——それも通常では
あり得ないくらいの威力と精度で』

「でも……!」

『お前が自分のことをどう思っているように、さっきの魔術をお前が
使ったという事実が変わりはない。もしお前が、これまで魔術士と

しての訓練をいっさい受けていないのだとしたら——お前は伝説級の魔術士の素質を持っているということになる。それくらいお前の魔力は強く、魔術に対しての感覚も優れているんだ』

「で……伝説級って……」

ルデインの言葉はあたしにとって、たちの悪い冗談としか思えなかった。

こんな異常事態に巻き込まれていたって、あたし自身はただの——ちよつとばかり家庭環境とバイト先が普通じゃないだけの女子高生だって信じていたのに、その信じていた「自分」の足場がガラガラと崩れていってしまうような気がして。

もちろん、魔術——というか魔法が使えたらなあ、なんて夢想したことはある。

食費のやりくりに失敗して明日から三日キャベツと大根だけで夕食のおかずを賄わなければならない時とか、父親がうっかりポケットにティッシュを入れたままのジーンズを他のものと一緒に洗濯しちゃった時とか。

——遺影の母親を、とても寂しそうな目で見てる父親の姿を見てしまった時とか。

だけど、その『使えたらいいなあ』は、使えないことが前提の届かない夢みたいなものだ。

現実にはならないとわかっているから、安心して夢想できる。ちよつと現実から離れて元氣を取り戻すための——ただの想像。

それが現実になり得るのだとしたら——想像によって現実が浸食されていってしまうのだとしたら、あたしにとってそれは悪夢ではない。

『……エーリ？』

黙り込んでしまったあたしに、ルディンは少し心配そうに声をかける。

「そんなの……信じられないわよ。あたしの世界には、魔術そのものが存在しないんだよ？ 魔術って概念はあるけど……現実には存在しない、おとぎ話みたいなもので……」

『だとしたら、お前の世界の住人は皆お前のような力を持っているのかもしれないな。ただ、あの世界ではその力を扱うことができないというだけで……このアールバイズは数ある世界の中でも、特に魔力にあふれた世界だ。ここへ来たことで、お前の中に眠っていた魔術の才能が目覚めた——のかもしれない』

「じゃあ……魔術が使えるって言っても、この世界限定の話なんだろう？」

ほっとした気分で言うあたしに、ルディンはわずかに視線をさまよわせてから『おそろく』と答えた。

その反応がちょっと気になったけど、あえてここは気にしないことにする。

「あ、じゃあさ……あたしが魔術を使えるんだったら、それでもこの世界に戻ることでできない？ ルディンに呪文を唱えてもらって……」

あたしがその可能性に気づいて思わず声を弾ませると、ルディンはしばらく考え込むような間をおいて複雑な声を返した。

『できない……ことはないだろう。ただ、その場合は私が向こうに同行しなければならん——転移の術は調整が難しいからな。お前一人では、まったく別の世界に飛ばされないとも限らんし……そうすると、今度は私がお前の世界から戻ってくることができなくなる』

向こうに戻ってお前が魔術を使えなくなったら、私一人ではこちらに戻ってくることはできないからな、とルディンは難しい口調で

付け加える。

「じゃあ……結局、ルディンを人間の姿に戻して、送り返してもらえないわけか」

がつくりと肩を落としてため息をつくあたしに、ルディンは『そうだな』と答えてから、ほとんど聞こえるか聞こえないかくらいの声で低く言った。

『それに、ここへ連れてきた責任上、お前のことは私が自分の手で送り返したい——お前には迷惑なことかもしれないが』

その声はむすりとした響きを帯びていたけど、どこか照れ隠しのようにも感じられてあたしは少しくすぐったい気持ちになる。

手を伸ばして、ルディンの頭を指先でぐりぐり撫でながら、

「ありがと——それに、仮に戻れるとしても今のルディンを放り出して、自分だけもとの世界に戻るのはちょっと寝覚めが悪いよね。どこでさらわれるかもわからないのに……〈塔〉に連れて行くって約束したのはあたしなんだし、約束した手前ちゃんと連れて行かないきゃ」

『それは……別に、かまわんのだが……頭を撫でるなっ!』

「あ、ごめん。つい……」

嫌そうに首を振って、あたしの指先を振り払うルディンにあたしは笑いながら謝る。

「なんか、意外と触り心地が良くて。竜って鱗でザラザラしてるんだけど、頭のこのへんだけ柔らかいんだね。なんか、ひやつとしてるし……」

ペットに爬虫類を飼う人の気持ち、ちょっとだけわかったかも。

『まあ、いい……少しは元気が出たようだし。だが言っておくが、私は一応成人男子で……』

ルディンが言いかけた時、あたしの足元のほうで布がこすれる音がして、同時に聞き慣れた声があたしの耳に入った。

「エーリ、気がついたのか？」

身体をねじって振り返るあたしの目に映ったのは、入口と思しき布の隙間から顔を出しているジオの姿だった。

慌てて口を閉じて、普通の（？）竜のふりをするルディンを目の端に眺めながら、

「あ、うん。ごめんね、急に倒れたりして……それに、テントも占領しちゃって……」

答えながら身体を起こすあたしに、ジオは「無理すんな」と苦笑混じりの声を投げる。

「平気よ。ちよっと、その……魔力を使いすぎたらしくて。もう十分休んだから、全然平気」

ルディンもジオも、人の顔を見るなり同じようなことを言うんだなあ———と思いつながらあたしはスカートの裾に気をつけて座り直す。制服に皺がつくのが気になったけど——もう、今更気にしても仕方ないか。

「それより、あれからどれくらい時間が経ったの？ すっかり暗くなってるみたいだけど……もしかしてあたし、何時間も寝ちゃった？」

「いや、まだあれから一時間くらいしか過ぎてねえよ。あの場所で野営することにして、まずその天幕を張ったから……ああ、それは予備の天幕だから気にしないで使っているぞ。盗賊を撃退してもらった礼ってことでな、オージスが貸してくれたんだ」

言いながらジオは身を屈めて、天幕の入口に膝をついてあたしの顔を眺める。

「見たところ、それほど疲れは残っちゃいないようだが……あれだけ無茶な術の使い方をしたら、一昼夜は起き上がれなくて普通なんだがな。さすがは竜を使い魔に従える魔術士ってだけのことはあるか——けど、本当にもっとゆっくり休んでいいんだぞ？」

「平気だってば……にしても、ずいぶん魔術士のことに詳しいのね？」

なにげなく返したあたしの言葉に、ジオはわずかに目を見張ってからぼりぼりと髭に覆われた頬のあたりを掻いて答えた。

「あゝ、まあな。こういう稼業をしてると、魔術士の護衛に雇われることもあるし……」

その言葉は妙にとってつけたように空々しく聞こえたけど、あたしは別のことに気を取られていてそれに気づかなかった。

天幕の外から、なにか煮ているようないい匂いが漂ってきていたのだ。

あたしのそんな様子に気づいたジオが、ほっとしたとも苦笑をこらえるともつかない笑みを口元にのぞかせて言った。

「ああ、今メシの仕度をしているところだからよ……できあがるまでは、もうしばらく待ってもらわなきゃならんが……」

その言葉を最後まで聞かず、あたしは立ち上がると近くに置かれていた靴を履いて、天幕の外へと飛び出す。

「あ……おい！ まだ仕度の最中だって……！」

天幕の外へ出ると、すっかり陽が落ちてあたりが暗くなっているのがわかった。

空にはほんのり青みが残っているけど、地上は闇に覆われてものの形はぼんやりとした影にしか見えない。

その一角がほんのり明るくなっているのは、火を焚いて食事の仕

度をしているからだ。

あちこちで思い思いに休んでいる傭兵たちの間を通り抜けて、あたしは焚き火のほうへ向かって足早に近づいていった。

途中であたしの姿に気づいて、傭兵たちがぎょつとしたように道を空ける。

その反応は昼間よりも過敏で、あたしは怪獣かと文句を言いたくなる。まあ、彼らにしてみれば似たようなものかもしれないけど……下手に怒らせたなら、自分もネズミに変えられちゃうかもしれないって思ってるのかも。

だけど中には、あたしが倒れたせいかな気遣うような目を向ける人もいる。

昼間会ったジオの知り合いらしき人もその一人で、「もう大丈夫なのか？」と声をかける彼に笑顔で「うん。もう平気」と返して、あたしは焚き火のほうへ歩み寄っていった。

そこでは下働きらしき数人の男女が、忙しく食事の仕度をしている。

彼らはあたしの姿に気づくと、ぎょつとしたように動きを止めた。その顔に浮かんでいるのは驚きと恐怖の入り混ざった表情で、あたしが口に出しかけた言葉を思わず呑み込むと、その中の一人が恐る恐るといった口調で言った。

「すみません、じきに用意ができますから……も、もう少しだけお待ちいただけませんか？」

「いや、あの……食事の催促に来たわけじゃなくて」

広い額に汗を浮かべて、やたらとぺこぺこ頭を下げる中年のおじさんに、あたしはどう切り出したものか考えながら言葉を口にする。「その……よかったら、あたしにも手伝わせてもらえませんか？」

野菜の皮むきでもなんでもしますから……ちよつと手を動かしたい気分なんで」

「……………は？」

頭を下げて頼み込むあたしを、男性は呆然と見つめ返す。

あたしが本気で言っているとわかったのか、慌てた表情で断ろうとする男性に背後から歩み寄ってきたジオが、頭をぼりぼりと掻きながら言った。

「いいんじゃないか、ライズ？ 本人がやりたいって言ってるんだし……」

「しかし、ジオ様……」

言いかける男性の言葉を、ジオは片手を上げて遮ってみせる。

「問題ねえよ。魔術士って一口に言っても、色んな人間がいるってことだろ……手が足りないのは事実なんだし、使える奴は使っちゃまえ、使っちゃまえ」

にやりと口元に笑みを浮かべるジオを見返し、ライズと呼ばれた男性はあきらめたように深いため息を吐く。

「では……お申し出に甘えてよろしいでしょうか？ エーリ様」

しきりに恐縮しながらライズさんはあたしを手招きし、あたしは嬉々として彼の差し出したナイフを受け取ると、山ほどある芋の皮むきを始めた。

うう、ほんの一昼夜ぶりくらいなのに、皮むきがこんなに懐かしいなんて……

嬉しさも手伝ってあつという間に芋の皮むきを終わると、ライズさんの指示に従ってあたしはその芋を茹でて潰し、穀物の粉と混ぜて手のひら大の大きさに丸める。これを焼いてパンの代わりにする

らしい。

もう一つの焚き火では、大きな鍋が火にかけられてコトコトと音を立てていた。

「これは……？」

「塩漬け肉と根菜のスープです。よろしければ、味見をお願いできませんか？」

差し出された大きな木の杓子（たぶん、おたま代わりに使うんだろう）から、直接スープを味見して、あたしはちよつと眉を寄せた。そんなに味は悪くないんだけど……なんだかちよつと物足りなく感じる。

「うーん……」

あたしの反応に、ライズさんはびくびくしながら声を返す。

「お気に……召しませんか？　いつもこのような味付けなのですが……」

あたしはちよつと考えてから、ライズさんにどんな食材や調味料があるのか聞いてみた。

示されたのは乾し肉や塩漬け肉、それに芋や根菜類といった長期保存の利くものばかりだ。旅の途中だし、こんなもんだろうな——と思いながらそれらを見回し、あたしは紙に包まれた葉っぱのようなものに気づく。

あたしの視線に気づいたライズさんが、「それは香草です」と説明してくれた。

「肉の臭みを消す時などに使うもので……普段はあまり使わないのですが」

あたしは葉っぱの端を少し千切って口に入れ、風味を確かめてふむ、とうなずく。

「ちよつと、使わせてもらっていいですか？」

ライズさんの了解を得てから、あたしは乾し肉をナイフで細かく

削って鍋に入れ、香草や岩塩で味を調える。

何度か味見をしながらそれをくり返し、やがてあたしは大きくうなずいて言った。

「……よし、これでOK」

同時にあたしの横から、ジオが興味津々の様子で顔を突き出す。

「本当に手慣れているな……どれ、俺もちょっと味見させてもらっていいか？」

言うが早い、彼はあたしの手から杓子を取って勝手にスープの味見をする。

ちよ、それってあたしが使った……いや、いいけどね。気にしないけど——家じゃしょっちゅう父親が同じようなことやってるし。そもそも、杓子で味見をしたあたしが悪いんだし。小皿なんかなかったから仕方ないんだけど……

そんなあたしの内心をよそに、ジオはかき回したスープを一口すするなり、髭に覆われた顔をぱっと輝かせた。

その満面の笑顔に、喉元まで出かかっていた文句は跡形もなく消える。

「……美味い！　いつものスープとは全然別物だ！」

彼の言葉にライズさんも興味を示したらしく、どれどれと彼の手から杓子を受け取って味見をする。

「本当です……！　ちよっと手を加えただけで、こんなに美味しくなるなんて……」

手放しの賞賛にあたしは気恥ずかしくなって目をそらし、ぽりぽりと指先で頬を搔いた。

「あゝ、喜んでもらえてなにより……デス」

「いったい、どのようにすればこの味に……？　配合を教えてはい

ただけないでしょうか？」

目をきらきらさせながら尋ねられ、あたしは内心ちょっと焦る。配合って言えるほど立派なもんじゃないし……適当に放り込んで味付けしたからなあ。

しどろもどろに説明するあたしを遠巻きにうかがっていた傭兵たちが、鍋から立ち上る匂いにつられたように少しずつ近づいてくる。ジオが彼らをしっしつと手を振って追い払うのを見て、あたしは初めてそれに気がついた。

「こら、メシまで待てねえのか！ あともう少しなんだから大人しく待ってろ！」

「けどなあ……すごく美味そうな匂いが……」

「てめえばかり味見してずるいじゃねえか！ ジオ！」

次第に背後がにぎやかになってくるのを、あたしは目を丸くして見やる。

だけど、いかつい顔の傭兵たちが中学生の男の子みたいに、ご飯を待ちきれないって表情で居並んでいる様子はなんだか微笑ましく、あたしは小さく笑って言った。

「パンを焼いたらすぐにご飯にしましょ！ 器の準備して待ってて！」

ばたばたと器を取りに走る姿は空きっ腹を抱えた子供そのもので、あたしの顔の笑みはさらに深くなったのだった。

1-11 大魔術士の意外な特技（後書き）

やっそこメイド（というか主婦？）技能が活躍しました。主婦の血が騒ぐのか、黙ってご飯ができあがるのを待ってられない瑛莉です。ちなみに作中の料理については適当。ありあわせのもの（お吸い物の素とかかっ〇えびせんとか）を調味料に料理を作るような感覚だと思ってください。

1-12 満天の星空の下で

スープは思った以上に大好評で、あっという間に大きな鍋は空になり、それでも物足りなさそうな人たちのために、あたしはオージスさんの許可をもらって予備の食材で簡単なすいとん汁のようなものを作った。

塩味のスープに水で練った穀物の粉の団子を落とし、魚を発酵させた調味料で味を調える。臭み消しに活躍したのは、先程とは違う種類の香草だ。

それも体育会系中学男子のような集団は瞬く間に平らげ、手のひらを返したように好意的な視線と賞賛の声が浴びせられる中、あたしはそそくさと後かたづけに向かったのだった。

避けられるよりはずっとマシだけど、ここまで手放しで絶賛されてしまうのも落ち着かない……なんて思いながらも、あたしは顔が緩んでしまうのを止められず、ライズさんにそれを指摘されて思わず真っ赤になってしまった。

夕食のあと、しばらく皆装備の手入れをしたり話をしたりしていたけど、やがて見張りを残して思い思いの場所で毛布にくるまって横になる。

あたしも見張りに加わると言っただけど丁重にお断りされ、仕方なく用意された天幕に入る。にしても、あたしが見張りに参加するのを断った理由が『明日の朝食をしっかりと作って欲しいから』というのは、冗談だろうか本気だろうか。

いや、ライズさんに断られなかったら、なにか作りたいとは思っていたけど……

そうやって天幕の中に横になり、しばらく目をつぶっていたんだけど、眠りはいつこうに訪れてくれそうになかった。

夕方寝ていた（わけじゃないんだけど）のが悪かったのか、眠らなきゃと思えば思うほど目が冴える一方で、全然眠くならない。何度も寝返りを打ちながら眠気が訪れるのを待っていたけど、やがてあきらめてあたしはむくりを身体を起こした。

『……眠らないと身体が保たんぞ、エーリ』

天幕の隅で丸くなっていたルディンが、こちらあまり眠そうでない声で言う。

「わかってるけど、眠れないの。少しそのへんを散歩してくる……」
真っ暗な中ごそごそと手探りで天幕を這い出し、あたしは外に顔を突き出した。同時にちよっと目を丸くしたのは、思ったよりもあたりが明るかったせいだった。

明かりといえるのは少し離れた場所にある焚き火の炎だけなのに、ぼんやりとあたりが見て取れるくらいの明るさがある。

その原因は、頭上に広がる満天の星空と、その端っこにかかる巨大な月だった。

あたしの世界で見る月の二倍くらいの大きさがあるだろうか——
普段から月を愛でるような風流な趣味はないけど、バイトの帰りに目にするところがあるのでなんとなく大きさはわかる。

四分の一くらいに欠けた細い月だったけど、あたしの世界の満月くらいの明るさがある。

今でこれなら、満月の時には昼間みたいに明るくなるんじゃないかな……同じように満ち欠けすると仮定しての話だけど。

あたしはしばらく言葉を失ってその月に見とれていたけど、やがて小さく頭を振って天幕の中からそっと抜け出した。

制服の襟や裾を簡単に手で直し、寝乱れた髪を手ぐしで整えながら焚き火とは反対の方向に歩いていく。制服についてはもう今更って感じ——でも着替えを入手したら絶対に洗濯とアイロン!——だけれど、せめてどこかで化粧だけでも落とせないかな。もう、いいだけ崩れちゃってるだろうし……

『……エーリ』

そんなことをぼんやり考えながら歩いていたら、頭のすぐ後ろから呼びかけられてあたしは思わず飛び上がった。

「驚かさないでよ、ルディン! ていうか、ついてきてたの……?」

『当たり前だ。夜中にふらふら一人で歩き回らせるような危険な真似、できるわけがないだろう! 焚き火の側ならともかく、人のいない方向に向かって歩いていくし……』

「……ちよっと一人で考えたかったの」

あたしの声に沈んだ響きがあるのに気づいて、ルディンは言葉を呑み込む。

その反応で、あたしは自分の声が思った以上に落ち込んで聞こえることに気づき、無理矢理作った笑みを口元に浮かべた。

「あ、大丈夫……そういうんじゃないかって、ただ……なんか色々あって、気持ち混乱してるみたいで……」

答える声は、あたしの意図とは裏腹に情けなくかすれる。

これ以上取り繕うのは無理だと悟って、あたしは近くの木に背中を預けるようにして座り込んだ。

まるで見知らぬ世界にいるという、この現実。

帰る保証がないわけじゃない。きちんと帰れると思っているけど

——それでも不安を拭い去ることはできない。

無事に生きて戻れるという保証があるわけじゃない。たくさんの幸運に支えられてここまで来たけど、運が悪ければどこかで命を落としていてもおかしくなかった。その幸運がこの先も続くとは限らない。

もしもあたしがこの世界で死んだとしても、それを向こうの世界の誰かに伝えることもできないのだ。

待っているのは「行方不明」という結論。生きているかも知れないという希望を持ちながら帰ってこないあたしを待つ父親の姿が脳裏に浮かびかけ、あたしは頭を強く振る。

（そんなの、絶対に嫌だ！ 絶対に生きて、無事に帰らないと——！）

強く両拳を握りしめるあたしに、ルディンが深くうつむいて消え入りそうな声を投げた。

『……すまない、エーリ』

あたしは黙ったまま、首を横に振る。

その沈黙をどう受け取ったのか、ルディンはわずかに黙ってから意を決したような声であたしに言った。

『お前の力でもこの世界に戻れるかどうか、試してみるか？』

「……え？」

思わず顔を上げるあたしに、ルディンは静かな口調で告げる。

『言っただろう、私が術を起動させればお前の世界に戻ることが可能かもしれない、と。もし今すぐ戻りたいというのなら、ここで術を試してみてもいい』

「でも、そうしたらルディンがこっちの世界に戻れないことに……」

『私はそれでもかまわない』

きっぱりとした口調で言い放つルディンに、あたしは返す言葉を失う。

『お前を巻き添えにしたのは私の失敗だ。自分の失敗のツケをお前に押しつけるような真似はできない。私が本来の姿なら、お前を危険な目に遭わせることなどしないと約束できるが……この姿では保証などできない』

事実、何度となく危険な目に遭わせてしまってるのだからな、とルディンは自嘲気味に付け加える。

『お前の身の安全を第一に考えるのならば、今すぐもとの世界に送り返すのが最善の方法だ。私のことは……気にしないでいい。不慮の事故で異世界から戻れなくなる事例は珍しくもないし、運が良ければ他の魔術士に見つけてもらえるかも……』

「それって、今のあたしと同じような状況にルディンを陥らせるってことじゃない」

止まっていた思考が徐々に動き出し、あたしは尖った声をルディンに投げ返す。

「ううん、あたしよりなお悪い……戻れる保証がほとんどないんだから。そんなこと、できるわけないでしょ！　それがどれだけ辛いことかわかってるのに、人を同じような目に遭わせるなんてこと――」

『辛いことであればなおさら、私にはお前をこのような目に遭わせた責任が……！』

お互いに声が高くなっているのにも気づかず、言い合いをさらに続けようとした時だった。

あたしたちの背後の暗がりの中から、苦笑すると呆れるともつかないものを含んだ声が投げられた。

「おいおい、そんな大声上げたらみんな目を覚ましちまうぜ」

あたしははっと息を吞んで振り返る。背後に立っていたのは半ば予想していた通りのジオの姿で、あたしは胃の腑がぎゅっと縮み上がったような気がした。

今の会話、もしかしてずっと聞いていた――？

「ジ……ジオ、今の……聞いてた？」

喉の奥がひりつくように乾き、かすれた声であたしは尋ねる。

ジオがうなずくのを見てさーっと全身の血が足下に下がったような気がしたけど、彼はあたしの顔を見たまま笑って肩をすくめた。

「けど、あんた……独り言はもうちょっと小さい声でやるもんだぜ？
それとも、本当にその竜と会話してたのか？」

「……え？」

ジオの言っていることがわからず、あたしは困惑気味に彼の顔を見つめ返す。

あたしの困惑が伝わったのか、ジオも首をかしげて言葉を付け足した。

「あんた一人で喋ってるように見えたぜ？ その竜も、なんか喋ってるみたいに口を動かしていたが――そいつの声は聞こえなかった。だからってつきり、あんたが独り言を言っているのだとばかり……」

「……聞こえない？ ルディンの声が？」

呆然と問い返すあたしに、ジオはうなずきを返す。

どうということ……？ 今の今まで、ルディンは普通に喋っている

ものだとばかり……

『……つまり、私の言葉はお前にしか聞こえないということか』
同じく衝撃を受けた様子のルディンがぼつりと声を発し、あたしはまばたきした。

とっさにジオに目をやったけど、彼の顔に竜が喋ったということに対する驚きの色はない。それでも念のため、あたしは彼に問いかけずにはいられなかった。

「今の……聞こえた？」

「あ？ なにがだ？」

ジオの返事にあたしは安心するどころか、ますます混乱してしまう。

どうしてルディンの声は他の人に聞こえないのか……どうして、あたしにだけ他の人には聞こえない彼の声が聞こえるのか。

「……なあ、ところで」

驚きと混乱のあまり、呆然と座り込んだままのあたしの前に、ジオが視線を合わせるようにどっかりと座り込んで声を発した。

「え……な、なに？」

半ば茫然自失の状態だったあたしは、彼の言葉が耳に入っておらず思わず尋ね返す。

彼はそんなあたしの様子に気づき、苦笑を浮かべると「まだなにも言っていないよ」と乱暴にあたしの頭をがしと撫でた。

なぜそこで頭を撫でるのか、という疑問がちらりと胸をよぎったけど、それより重要なのは彼がなにを言い出すかだ。ルディンやあたし自身のことについて深く問いつめられたら、正直ごまかし切る

自身はない。

息を詰めて次の言葉を待つあたしに、ジオはにこりと人懐こい笑みを浮かべて言った。

「ルジムから先、俺を護衛に雇う気はないか？」

「……はい？」

しばらくの沈黙のあと、あたしが返すことができたのはその一言だけだった。

ぽかんと彼の顔を見返したままのあたしをおかしそうに見やり、ジオはもう一度ゆっくりと同じ言葉をくり返す。

「俺を、雇わないかって聞いてるんだ。ルジムから先……商隊とは別の方向に行くつもりなんだろう？」

「そうだけど……」

オージスさんの商隊は〈塔〉のある王都エルバウムには行かないらしいので、次のルジムの街で彼らとは別れる予定だ。

そこから先は乗合馬車か、王都行きの隊商でも見つけて同行させてもらおうと思っていたんだけど……

「……でも、ジオはオージスさんとの契約があるんじゃない？」

思い出して尋ねてみると、ジオはふっと目元をゆるませて答えた。

「オージスとの契約はルジムの街までだ。そこでまた別の雇い主を見つけるつもりだったんだが、あんたが一人で——」

そこでちらっとルディンに目を向けて、彼は口元の笑みを深め、「じゃなかった、一人と一匹で王都に向かうっていうんなら、護衛が一人くらいいていったほうがいいんじゃないだろうかと思ってな。あんたは腕の立つ魔術士だし、そうそう危険な目に遭うことはないだろうが——あんまり荒事には慣れていないように見えたから

な」

器用にウイंकしてみせるジオに、あたしは内心冷や汗を浮かべながらも顔だけは笑って答える。

「……まあ、実のところはね」

「俺はこのあたりの地理には詳しいし、旅にも慣れている。雇っておいて損をするってことはないと思うぜ？ それに、まあ……あんたを一人で放り出すのも心配というか——」

一度言葉を切って、ジオはにやりと意味ありげな笑みを浮かべてみせる。

「あんたの行く先々でどんな大騒ぎが起こるかと思うと、ちょっと放っておく気になれないんでな。俺は初心者なんだ——起こるべき災害を未然に食い止める手があるのに、知らない顔をして通り過ぎるってことができないのさ」

「……災害って、人を台風や竜巻と同じレベルで扱わないで欲しいんだけど」

思わずじとつとした目つきで睨むあたしに、ジオは本人申告の「初心者」なんて言葉からは遠くかけ離れた、実にふてぶてしい笑顔で言った。

「ほとんど天災と変わらんだろ、あんたの力は。それだけの力を持つてるってのに、あんたは妙に無自覚だし……しかも連れてくるのが子供とはいえ竜と来た日には、明かりに引き寄せられる虫みたいに、妙な連中がぞろぞろ近づいてくるのが目に見えてるぜ」

あたしはジオの顔から視線を外して、少し考え込む。

ルディンがなにか言いたそうにしてたけど、なにが言いたいのかは想像がついたので無視することにした。いくらなんでも、彼がこの世界に戻れなくなる危険を冒してまで自分の世界に戻りたいとは

思わない。

となると、危険を避けるためにはジオの言う通り、護衛の一人も雇っておいたほうがいいのは確かで……

あたしはしばらく考え込んだのちに、顔を上げてジオに尋ねた。

「護衛を雇うのって、いくらぐらいかかるの？　まさか、タダでついてきてくれるっていうんじゃないでしょ？」

タダだったら、逆にお断りするつもりだけど。こんな右も左もわからない世界で、知り合って一日もたたない相手の無償の善意を当てるなんて恐いことができるはずない。

あたしのそんな気持ちを察したように、ジオはくすりと小さく笑って答えた。

「そうだな、日給で8デイズっていったところか。俺くらいの腕の傭兵になると、10デイズ以上でも雇う奴は雇うが……まあ、あんたの場合、自分でもある程度身を守るしな」

（えーと、平均的な宿の料金が2デイズって言ってたから……四倍として、ビジネスホテルの料金が8〜9千円くらいだから——3〜4万円くらい？）

あたしは頭の中でルディンの言っていたことを思いだして計算し、思わずジオに向き直って怒鳴った。

「——高いよ！」

ジオは面食らったように目をしばたかしてから、軽くおとがいのあたりを掻いて言う。

「これでも大幅にまけたつもりなんだが……」

「それにしたって高いって！　そりゃ、持ち合わせがないわけじゃないけど、王都まで十日もかかるのにそんな余計な出費……」

言い返そうとしたあたしの服の袖を、つんつんとルディンが横から引っ張る。

あたしが顔を向けると、彼はあたしの肩先まで舞い上がって、耳元に口を寄せるようにして言った。

『このまま王都を目指すのだったら、護衛は雇っておいたほうがいい。少しでも危険を避けるために……王都に向かえば人の往来も多くなる。お前が魔術を使えば、大騒ぎになる可能性も高いし余計な揉め事に巻き込まれることにもなりかねん』

「だけど……」

『どうせ使う目的もなく貯めてあった金だ。お前の身を守るために使うのだったら俺としてはなんの文句もない。本当はここで送り返すのが一番なのだろうが——お前はそれでは納得しないのだろうか？』

あたしはルディンとジオの顔を見比べて、軽く眉を寄せる。

使わないで済むのだったら、余計な出費はしないというのがあたしの主義だけど、必要なものに関してはお金を惜しむつもりはない（服とか靴とか、うっかり安いものに手を出して結局使いづらかったとか長持ちしなかったなんてのは、よくある話だ）。

頭の中で自問自答する——現在、護衛は本当に必要か？ 答えはイエス。無事もとの世界に帰りたいのなら、腕の立つ護衛は絶対にいたほうがいい。

じゃあ、料金は適正か？ ジオの腕を考えれば、一日3〜4万円の日給も高すぎるとは言えないかもしれないけど——それにしたって、なあ。他の傭兵が普通、どのくらいの額で雇われているか知らない以上、ふっかけられていたとしてもあたしにはわからない。

ジオがそういうことをする人間だとは、あんまり思えないけど……

『では、こう考えてくれ。私がお前の護衛としてこの男を雇う。お前はあくまでも私の代理人だ。それなら文句はないだろう？　もとはと言えば、私の金なのだし——』

「そ、それは……そうなんだけど」

たとえ他人の金だとわかっていても、つつい儉約したいと思ってしまうのが主婦の本能というか。

『今まで見てきたところ、彼は信用できる人間のようだ。もちろん、過信は禁物だが——彼の行動については私が常に目を光らせているし、お前の力があれば万が一のことがあっても撃退することは可能だろう。そんなことにならないのが一番だが……』

その意見には、心の底から同意するけど。あれだけの腕を見せつけられて、ジオと敵対する可能性なんてのははっきり言って考えたくない。

あたしはため息をつく顔を上げて、興味深そうにあたしとルデインを見ているジオに目をやった。

「……雇ってもいいけど、もうちょっとまけてもらえない？　できれば6デイズくらいで」

ジオはわざとらしく目を丸くしてから、やれやれと言いたげに首を横に振る。

「このあたりは不慣れだろう、あんた？　案内料も含まれているんだぜ？　こっちとしては9デイズくらい欲しいところなんだが、大まけにまけて8デイズにしてるんだ」

「地図があるから道案内は必要ないし。女の一人旅だと、よけいな目を引くかなーと思うから護衛が欲しいだけで、一人でもそれほど問題ないのよ？　まあ、なにかあったら、うっかり街一個氷漬けに

しちゃうかもしれないけど、それは不幸な事故ってやつで」

しれっとした顔で応じるあたしに、ジオは苦笑混じりの笑みを浮かべて「わかった」と両手を上げてみせた。

「6デイズでいい。そのかわり、宿代なんかの必要経費はあんたに出してもらうぜ？」

「……うん、まあ、それはいいわよ」

もともと出すつもりだったので、あたしは素直にうなづく。

必要経費込みで8デイズだったのだとしたら、結局同じこと——というか、場合によってはかえって高くつくかもしれないということに気づいたのは、その一瞬あとだった。

交渉のやり直しを求めるあたしをジオは笑っていないし、結局6デイズ（必要経費別）で彼を雇うことになった。

とりあえずルジムまではオージスさんとの契約があるので、正式な契約はそのあと。予約金として三日分の18デイズだけを前払いしておく。

……これを持ってジオがドロシしたら、あたしは（というカルデインは）18デイズ丸損ってことか。

そんなあたしの内心を読んだように、ジオは口の端をわずかに持ち上げて言った。

「持ち逃げしたりはしねえから、安心しな。傭兵ってのは信用が第一の商売なんだ——それにそんなことをしたら、地の果てまで追いかけてくるだろう、あんた？」

そんなことはない——と思うよ。あたしはもとの世界に戻りたいだけで、そんな余計なことしている余裕はないし、たぶん……きつと、おそらく。

あたしの交渉をどこか呆れたように見守っていたルデインの目に

は、ジオの意見に賛成するような光がのぞいていたけど、あたしはそれを見なかったことにした。

1-12 満天の星空の下で（後書き）

案の定同行者が増えました。そしてどんな時でも儉約を忘れない瑛莉。

1-13 ルジムの街

翌朝、あたしたちは野営の後片づけをしてから、ルジムの街に向かった。

朝食は昨日と同じ、潰した芋を混ぜて焼いたパン。いつもはそれと水だけらしいんだけど、期待に満ちた視線に耐えきれずあたしはリンゴ（らしき果物）をすり下ろして、塩漬け肉のみじん切りと一緒に香草で煮込んだソースをパンに載せて出した。

ポテトパンケーキにはリンゴのソースが付くものだし、たぶん相性はいいはずと思ったのだけど——これが予想以上の大好評。

あたしも食べてみて驚いたのだけど、この世界の硬くて酸味の強いリンゴと塩漬け肉の味がちょうど良く溶け合っている。それに焼きたての芋のパンの味が加わると、まさに絶品。

もとの世界に戻っても、似たような材料を調達して作れないかな、なんてことを考えながらあたしは朝食を済ませて、後片づけの手伝いに向かったのだった。

ルジムまでの旅は順調で、今度は獣にも盗賊にも襲われることなく、昼になる前に無事に街までたどり着いた。

その間、あたしは馬車の荷台に腰掛けてうつらうつらしていただけだ。

舗装なんてされているわけもない道のおかげで荷台はかなり激しく揺れたけど、例のポーチから出したルディンのマント（未使用品）

を三枚くらい、畳んでお尻の下に敷いていたのであたしにはほとんど影響はなし。

ガタゴト揺れる荷台の振動はかえって眠気を誘い、昨日遅かったこともあってあたしはルジムの街につくまで、うとうと眠ってはガタンと大きな振動で目を覚まし、といったことをくり返していた。

……ルディンによると、何度か本気で眠りかけて荷台から転げ落ちそうになったのを、彼とジオが慌てて押し戻したらしいけど。それはどうも……度々ご面倒おかけしました。

ルジムの街に着くと、あたしはオージスさんにお礼を言って彼の隊商と別れた。

ジオ以外の傭兵たちや、下働きの人たちは別れを惜しんでくれたけど……口をそろえて言ったのは「あんたの料理がもう食べられないなんて」という台詞だった。

そこまで劇的に美味しいものを作ったつもりはないけど……しょせん行き当たりばったりの即興レシピだし。

でも、とりあえずライズさんに（覚えている限りは）作り方を伝えてあるので、あとはライズさんが工夫して皆に食べさせてくれるだろう。

皆に手を振って別れ、あたしは乗合馬車を探して往来を歩き始めた。ジオは馬の手綱を引いて、あたしのすぐ後ろについてきている。

「……というか、王都までだったら俺の馬に二人乗りしていけばいいんじゃないのか？」

あたしが乗合馬車を探していると言うと、ジオは片眉を上げてそんな言葉を返した。

その申し出をあたしは頭の中でちらりと検討し、昨日のトンでも

ない揺れを思い出して即座に却下する。

「あたしは車輪のついている乗り物以外には、乗らないことに決めたの」

むっつりとした口調からあたしの内心を察したのか、ジオは苦笑して「あん時は急いでいたから」と弁解じみた言葉を口にする。

「普段からあんなに飛ばしたりはしねえよ。あんたも、あんまり馬には慣れてないみたいだし……貴族のお嬢様でも乗せるみたいのに、ゆっくり運んでやるぜ？」

「いや……遠慮しとくわ」

揺れを別にしても、二人乗りだとぴったりジオと身体が密着することになるし。

いや、別に気にはしないけど——どうしても必要って場合じゃないなら、わざわざ男の人と密着したいとは思わないっていうか……気にはしないけど、あんまり気は進まない。

「まあ、いいけどな……けど、乗合馬車に乗るんだったらなおのこと、そいつを入れておくものを用意したほうがいいぜ」

ジオが指さしたのは、馬の鞍に括り付けた荷物の隙間に隠れているルディンだった。

畳んだマントを上から被せて、周りからは見えないようにしているけど、狭い隙間で居心地悪そうにしている。

そういえば、あたしの着替えもどこかで買わないと……これ以上、制服を汚したり傷めたりしたくないしなあ。

あたしがそれをジオに伝えようと、ジオは任せろと笑ってうなずいてあたしの先に立って歩き始めた。

あたしは慌てて足取りを速め、その背中を追いかける。

ルジムは石造りの建物が並ぶそこそこ大きな街で、片側二車線く

らしい幅のある通りを人や馬車がひっきりなしに行き交っている。

通りを行く人の服装はまちまちで、シンプルな貫頭衣から、着物のようなものを何枚も重ね着している人、西洋風のドレスやコート（防寒着としてのコートではなく、裾の長いいわゆるフロックコート風のもの）を身につけている人もいる。

全体に共通して言えるのは、飾り気が少なく色合いも地味だということだろうか。

この世界に季節があるのかどうかかわらないけど、長袖のワンピースで特別暑くも寒くもないってことは春か秋くらいの気温だろう。行き交う人々の服装も長袖が多く、腕や足を出している人の姿はあまり見られない。

あたしはそんな人々の様子を横目に眺めながら、ジオの広い背中を追いかけていく。

道の両脇にはぼつぼつと、屋台のような店も建ち並んでいる。広げた布の上に、食器や壺を並べているだけのフリーマーケットのようなお店から、しっかりとした木の枠組みの上に布を被せて、壁や天井を作ったお店まで——そのお店も、並んでいる商品も物珍しくて、ついついあちこちに目が行ってしまう。

そんなあたしの様子を気づいたのか、ジオが肩越しに振り返って笑いながら声をかけた。

「あんまりきよろきよろすると、迷子になるぞ」

言いながら伸ばされた手を、あたしはちよつと複雑な顔で見下ろしてから握る。

子供扱いされるみたいで釈然としなかったけど、まわりの人間の数が増えてきていたため、油断するとはぐれてしまいそうな気がしたのだ。

……あたしが周囲に気を取られ過ぎて、ジオの姿を見失わない自信がなかったせいでは断じてない。

しばらく進むと、周囲を行き交う人の数はさらに増え、荷物を積んだ馬車の姿も目立つようになってきた。

荷台に積まれているのは青々とした葉物の野菜や、なにか入っているらしい大きな甕や壺。籠に入った果実や、中には生きたままの鳥や豚らしき（見た目は猪に近かったけど）家畜を運んでいるものもある。

にぎわいに満ちたその様子は、テレビで見た東南アジアの市場を思い起こさせた。違いといえば、車の姿がどこにも見当たらないことくらいだ。

ジオは馬とあたしの手を引いたまま、すすいと人混みを縫って進んでいく。

やがて大通りを離れて、小さな店が軒を並べている一角にたどり着いた。屋台よりも一回り大きいくらいの木造の建物が不規則に並び、その店先には積み重ねられた籠や大小さまざまな壺などが無造作に置かれている。

このあたりは食料品よりも、生活雑貨などが主に売られているみたいだ。

あたしは周囲を眺め回しながら、半ば無意識にジオの歩調に合わせて足を進める。手を繋いでいたから良かったようなものの、放しにいたら完全に迷子になっていたところだろう。

いや、もちろん迷子にならないとわかっていたから、安心してよそ見をしていたんだけど。

「とりあえず、ここだな」

ジオが言って足を止めたのは、色々な形の籠や箆などが山ほど積まれた店の前だった。

店先に置かれた商品の間から奥に向かって声をかけると、つるつるに禿げ上がった頭のとっぺんまで綺麗に日焼けしたお爺さんが、ひよっこりと顔をのぞかせる。

「おや、ジオの旦那じゃねえか！ 久しぶりだな！」

お爺さんとジオは顔なじみらしく、真っ白な髭に覆われた顔をくしゃっとほころばせてお爺さんが大きな声を上げる。はっきりした年齢はわからないけど、その髭の色と皺だらけの目元から見て70歳は越えていそうだ——もともとからその色でなければの話だけど。

「マナクも元気そうだなによりだ。ところで、蓋のついた籠はあるか？ 生き物を入れて運びたいんだが——」

ジオの言葉にお爺さん——マナクさんは首をかしげてどんな生き物だい、と問い返す。

馬の鞍にちらりと目をやってから、ジオはあたしに視線を移す。問いかけるようなその視線の意味を悟り、あたしは一步前に歩み出ると、両手を広げてほしいの大きさを示してみせながら言った。

「これくらいの大きさで……羽が生えているから、高さもちよつとあったほうがいいかも。持ち手があったほうが持ち歩きしやすくていいかな」

マナクさんは驚いたようにあたしを見てから、口元ににやりと笑みを浮かべてジオを見る。

「ずいぶん可愛いお嬢さんじゃねえか。どこで引っかけてきた？ え、この色男？」

「そんなんじゃないって、護衛を頼まれただけだ」

苦笑しながらジオは答え、マナクさんはそんなこったろうと思った、と肩をすくめる。

あたしは中途半端な笑みを浮かべて二人のやりとりを見やり、マナクさんはうって変わって愛想の良い表情になってあたしに向き直った。

「ああ、失礼。あんたみたいな綺麗なお嬢さんがこんな腕っ節ばかりの髭男、相手にするわけないもんな。いやぁ悪い、悪い」

「……自分だって立派な髭面じゃねえかよ」

ぼそっとジオが突っ込むのを無視して、マナクさんはあたしに笑いかける。

「籠が入り用なのはお嬢さんかい？ 羽があるってことは、鳥かなにかか——逃げ出さないように閉じこめておくんだったら、しつかりした専用の鳥籠を買ったほうがいいぜ？ うちじゃ鳥籠は扱っていないが、5軒向こうの店に——」

「鳥じゃないし、閉じこめておくためのものでもないの」

あたしは視線をさまよわせながら、慎重に言葉を探して答えた。

「綺麗なお嬢さん」ってのはこの際無視。なんかこの世界の人って、女の子を見ると誉め言葉を連発せずにはいられないみたいだし。

「その——ちょっと目立つ生き物だから、人目につかないように籠に入れておこうと思って。知能は高いから、勝手に逃げたり暴れたりすることもないわ。見た目はちょっと恐いかもしれないけど——」

「羽があって、目立つ生き物……知能は高く、見た目が怖い……？」

不審そうにマナクさんは呟き、あたしはちよっと喋りすぎてしまったかな、と内心で冷や汗を掻く。

ジオも困ったような顔でかりかりと髭に覆われた頬を掻いており、

あたしは助けを求めるように彼に目をやった——その時だった。

ジオが馬の手綱を引き寄せ、反対側から荷物を括り付けた紐を切ろうとしていた若い男——というより少年を素早く捕まえた。

「——この餓鬼っ！」

怒声を上げたのはマナクさんで、ジオは逃げようとした少年の手をぐいと捻り上げる。

少年が顔を歪ませてなにか言いかけ、それが言葉になるよりも早く切れ目の入った紐がぷつりと切れた。

「あ……！」

荷物と一緒に転がり落ちかけたルディンが、慌てて羽をはばたかせて宙に舞い上がる。

彼としては半ば反射的な行動だったのだろうけど、タイミングとしては最悪だった。

周囲の人々の視線がルディンに——小さいとはいえ立派な竜の姿をした彼に集まり、次の瞬間わっと悲鳴が上がる。

その寸前に叩き入れるように、あたしは思い切り声を張り上げていた。

「ルディン！」

同時に差し伸べた腕に、あたしの意図を察したルディンがふわりと舞い降りて留まる。

あたしは片腕にルディンを留まらせたまま、凍り付いたように動きを止めている人々のほうに目をやって言い放った。

「騒がなくてもいいわよ。これは、あたしの使い魔だから」

自信たっぷり聞こえるように、あえて居丈高な口調と表情を作って、

「それともなにか——あたしの使い魔に文句でもある？」

水を打ったように静まりかえった人々に背を向けて、あたしはマナクさんに向き直る。

彼は相当肝が据わっているらしく、あたしの腕に留まっている竜を見てもわずかに顔をこわばらせただけだった。

そのことに内心感謝しながら、あたしは彼に向かって言葉を投げる。

「……こういう生き物なんだけど、ちょうど良さそうな籠って置いてる？」

マナクさんはこわばった顔のまま、一度奥に入って蓋のついた大きな手提げ籠を持ち出してくる。ちょうど小型犬を入れるキャリーケースくらいの大きさだ。

「こ……こんなもんでどうかね？」

あたしはルディンとその籠を見比べて、中に敷物を入れても余裕で入る大きさであることを確認すると、マナクさんに向かってにこりと笑った。

「うん、十分！ これにするわ！」

これ以上注目を集めるのも嫌だったので——マナクさんを驚かせてしまったことへの詫びも含めて——籠の代金を言い値で払い、あたしたちは逃げるようにその場をあとにした。

「今更遅いって気もするけどな」

もはや笑うしかないという表情で言うジオを、あたしは顔を上げて睨み付ける。

「だってまさか、あんなところでルディンが転がり落ちてくるなんて考えてなかったんだから……それより、その子どうするの!？」

片手で荷物と馬の手綱を持ったジオの反対の手には、ことの元凶と言わべき少年の腕が掴まれている。

「さて……どうしようか？」

口元に笑みを残したまま、鋭い目を向けるジオに少年はびくりと身をすくませた。

あたしと同じか、一つ二つ年下といったくらいだ。ぼさぼさに伸びた栗茶色の髪に日焼けしたような褐色の肌——もしかしたら、それが地の色なのかもしれない。半袖の上着とあちこちすり切れたズボンに包んだ身体付きは細く、身長もあたしとほとんど変わらない。

「ど、どうせ衛兵に突き出すんだろう! だったら好きにしろよ!

怯えを隠すように、少年は口を尖らせて言い放つ。伸び放題の髪の下からのぞく、ややつり気味の目だけは真夏の海のような綺麗なターコイズブルーだ。

毛を逆立てた野良猫みたいな少年を見やって、あたしはうーんと軽く首をひねった。

確かに大いに迷惑をかけられたわけではあるんだけど、未遂で捕まえたから実質被害が出ていないんだよね……ただ、このまま無罪放免で放り出したら、またどこかで同じようなことをくり返さないとも限らないわけで。

「どうする？」

ジオがあたしに、試すような視線と言葉を投げかける。

笑いを含んだ目つきにちよつとむっとするものを感じながら、あたしは少年に視線を戻して言った。

「ここでは目立たないようにしようと思っていたのに、あんたのせいで台無しになったのよ？　衛兵に突き出す程度じゃ気が収まらないわ」

「え……」

さっき的一幕を思い出したのか、少年の顔がさーっと青くなる。

「迷惑をかけた詫びに、この近くにある安くて良心的な服屋に案内しなさい！　そうしたら、さっきのことは忘れてあげるから」

「……え？」

横でジオが軽く吹き出すのを無視して、あたしは目を丸くする少年に指を突きつける。

「でもあたしたちを置いていこうとしたり、変なところに連れて行ったりしたら、あんたのことカエルに変えちゃうからね。本当なら、今すぐそうしてやってもいいくらいなんだから！」

「なんだ、今度はネズミじゃないのか？」

笑いを収めてジオが言い、そのいかにも当然といった口調に少年が顔を引きつらせる。

うるさいなあ、魔法で変えるんだったらカエルのほうが定番なんだってば。

どうする、と重ねて問うと少年は慌てたように、先に立って歩き始めた。そのあとに切れた紐を結んで荷物を馬に括り付け直したジオと、杖とルディンの入った籠を両手に持ったあたしが続く。

あたしの脅しが効いたのか、少年はあたしたちを置いて逃げようとはせず、人通りの多い表通りを避けて裏道伝いに進んでいった。馬がぎりぎり通れるくらいの道幅のところも多かったが、表通りを行くよりは大分楽だ。

少年の足取りは速く、追いかけるのが精一杯で話しかけるような余裕はなかった。本気で逃げられていたら、カエルに変える余裕なんてなかっただろうな——そんなことをするつもりは最初からなかったけど。

やがてお店が建ち並んでいる一角が見え、その中に古着らしい衣服を洗濯物のように店先に吊している一店にあたしたちが気づいたところで、少年は足を止めた。

「あそこだ。扱ってるのは古着だけど、品物はいい——これでいいだろ？」

今にも逃げたそうな様子で店を指さす少年に、あたしはにこりと笑ってうなずいてみせる。

「うん、案内ありがとう——あ、ちょっと待って」

そそくさと立ち去ろうとした少年の腕を捕まえ、あたしはポーチの中から取りだした銀貨を一枚渡した。

びくりと身をすくませた少年の目が、それを見て大きく見開かれる。

「な……!？」

「案内してもらったお礼。逃げようと思ったらいくらでも逃げる機会があったのに、ちゃんと案内してくれたでしょ？」

「逃げたらカエルに変えるって言ったのはお前だろ！」

「でも、一か八かで逃げる気になれば、逃げられないことはなかった——ま、受け取っておきなさい。きちんとした仕事にはきちんとした報酬を払うのがあたしの主義なの」

少年が銀貨を握った瞬間を見計らって、あたしは笑顔で付け加える。

「それに、この銀貨には受け取った人間が悪いことをしたら、爆発する呪いがかかってるから——少なくとも、これ持っている間は他人の荷物やお金には手を出さないのが身のためよ？」

「……………っ！」

思わず取り落としそうになってから、少年は嫌そうに銀貨をあたしに返そうとする。

「お礼とか言って、そんなもんよこすなよ！」

「悪いことしなければ問題ないでしょ？ 頭だつて悪くないみたいだし、まともに働くことを考えたほうがいいんじゃない？」

あたしはそう言つて少年に銀貨を押しつけ、くるりと背を向けて歩き始めた。

肩越しにちらりと目をやると、少年はふて腐れたとも困惑するともつかない顔つきでたたずんでいたが、あたしと目が合うと慌ててそっぽを向いた。

その手がしっかりと銀貨を握りしめているのを見て、あたしは口元に笑みを浮かべた。

「…………爆発する呪いつて、いつの間にそんな術をかけたんだ？」

後ろについてきたジオに真面目な顔でそう尋ねかけられ、あたしはちよつと力が抜けそうになりながら言い返した。

「そんなもん、本当にかけているわけないでしょ。適当に言つてみただけよ！」

言ってから籠の中のルディンに、声を低くして「ごめん、勝手にお金使つて」と謝る。

『いや、それはかまわんが……よくまあ、あんな出まかせがすらすら出るものだな』

「……せめて、アドリブと言って」

バイトの性質上、臨機応変な対応は必要不可欠なのだ。同僚の皆さんに比べたら、あたしの対応なんてまだまだ素人レベル。

「……まあ、あれでちゃんと働く気になってももらえたら、御の字つてところじゃない？」

あたしはジオに視線を戻すと、肩をちょっとだけすくめてみせる。過剰な期待はしないけど、わずかなきっかけにでもなれば——あれくらいのことで悪いことから完全に足を洗えるとも思えないけど、そう思っただけでもないよりはマシなはず。

それでも声の奥底にじんだ後ろめたさを感じたように、ジオは片眉を上げるようにして笑うとあたしの頭を軽くぼんぼんと叩いた。

「あんたがいいと思ってやったことなら、いいんじゃないか？ どっちみち俺たちはただの通りすがりなんだし——結果なんて、実際出てみない限りわからんものだし」

「……うん」

あたしは少しだけ肩の力を抜くと、衣服で埋もれているように見える店の入り口に向かって足を速めていった。

「そうだね……とりあえず、買い物済ませちゃいますか！」

ジオが馬を引いてついてくるのを感じて、もう一度視線を後ろに戻した時には、少年の姿はすでにそこにはなかった。

1-13 ルジムの街（後書き）

少し展開のスピードアップを目指してみましたが、あれもこれもと書いてしまうせいで結局断念……テンポ良く話を書ける人がうらやましい（泣）

というわけで、相変わらずのたのたペースで話が進みます。

1-14 あるはずのない再会

服屋に入ると、あたしは動きやすそうな男物の上下と下着を何替わりか購入した。

ちなみにこの世界の下着はブルマーのようなショートパンツ型。上に着るのは長めのタンクトップのような中着で、上流階級の女性はその上にコルセットを付けたりするらしい。見るからに息苦しそうだったので、勧められてもあたしは断ったけど。

幸いちよつと厚手の生地の手フットップのようなものがあつたので、それも購入する。いや一応、つけてないと落ち着かないし……サイズのにはあってもなくても変わらないかもしれないけど。まだまだ成長途中です、はい。

買い物の間、ジオは店の外で待っていてくれた。馬の番をしなければならぬこともあつたし、あたしが下着の買い物なんか始めたから遠慮してくれたんだろう。品物の価格や買い物のしかたについて聞きたかったので、ルディンは強引に同行させたけど。

かなり居心地が悪かつたらしく、籐の籠の中でルディンはどんどん口数が少なくなっていく……ご愁傷様。でも色々教えてもらえて助かったよ。

買い物済ませて店を出ると、ジオはあたしを連れて大通りのほうへ向かっていった。

購入した衣服は例のポーチの中に入れてあるので、あたしはルデ

インの入った籠と杖だけを持って彼のあとに続く。

「とりあえず、今日はこの街に泊まって明日出発したほうがいいだろう。この先に俺の馴染みの宿屋があるから……」

そんなことを言いながら先を進むジオに、あたしがなにか言い返そうとした時、お腹がぐくくと盛大に鳴った。

そういえば、お昼がまだだったんだっけ。にしても、こんなタイミングで鳴らなくても……

思わず赤面するあたしを、ジオははははと声を上げて笑いながら見やる。

「その前に、どこか寄ってメシ食っていくか。その様子だと、宿に着くまで我慢できなさそうだしな」

言い返そうとしたらまたお腹が鳴ったので、あたしは顔を赤くしたままうつむく。

ずっと馬車の荷台に座っていただけで、そんなに動いていないのにどうしてこんなにお腹が空くんだろう？ 街なかを歩き回ったせないかな？

あたしに向かってジオはこっちだ、というように身振りで示し、あたしは置いていかれないように慌てて歩き出す。

その時、人混みの向こうにちらりと見覚えのある後ろ姿が見えた気がして、あたしは踏み出した足を止めた。一瞬でその姿は見えなくなり、誰に似ていたのかもはっきり思い出せなくなってしまったけど――

(……誰?)

この世界に来てからの知り合いと言ったら、オージスさんと彼の商隊の人々、あとは護衛の傭兵たちくらいしか思い当たらない。

でも一瞬見かけた後ろ姿は、その誰のものでもないと確信できた。

なぜそう思ったのかは自分でもわからないけど、違うということだけははっきりわかったのだ。

（誰……だったんだろう？）

首をかしげるあたしに、ジオが振り返って声をかける。

「どうした、エーリ？」

「あ、ううん！ なんでもない！」

あたしは慌てて答えると、彼に向かって小走りに近寄っていった。まあ……大事なことならそのうち思い出すだろう。そうでないなら、たいして重要なことではなかったってことだろうし。

ジオがあたしを連れて行ったのは、ちょっとした広場のような場所だった。

あちこちに骨組みと屋根だけの簡単な屋台が並び、あたりには美味しそうな匂いが漂っている。屋台の間には背もたれのない木製のベンチとテーブルが置かれていて、屋台で買ったものをそこで食べられるようになっていた。

ジオは屋台で焼いた肉をはさんだパンと素焼きのカップに入ったお茶を買ってくると、あたしにほいと手渡す。

「ほら、落とすなよ」

あたしは籠を肘に掛け、杖を小脇にはさんで両手でパンとカップを受け取った。

パンは子供の頭くらいで、そこにレタスのような野菜と香ばしい匂いを漂わせる肉がはさまれている。カップも映画館なんかで見るＬサイズドリンク並みの大きさだ。

「あ、ありがと……」

札を言ってから、あたしはジオとの契約を思い出して慌てて言った。

「お金！ ご飯とかはあたし持ちでしょ？ 今、払うから……」

「いいさ、これくらいは」

ジオは笑って、カップの置き場所を探すあたしに言い返す。

「でも……！」

「ここのは安いんだ。かわりにたっぷり晩飯を食わせてくれれば文句ねえよ」

その言葉と笑顔になだめられる形で、あたしはお金を出すことを断念する。まあ、彼がそう言うのならいいんだけど。

ジオは自分のぶんのパンと飲み物も買うと、馬を引いて近くのベンチに向かう。手綱と飲み物のカップで両手がふさがっているので、パンを口にくわえているあたりがご愛敬だ。

広場はそこそこの人出でベンチの大半が埋まっていたけど、ちょうど食べ終わった人がいたため、あたしたちは入れ替わるようにそこに座った。

荷物を身体から離さないようにして、周囲に注意しながらあたしはパンにかぶりつく。

表面のぱりっとしたパンは少しぼそした食感だったけど、中の野菜の水気と肉から出る汁気染みて十分すぎるくらい美味しかった。肉にはなにかの果物を使ったような甘みのあるタレが絡めてあって、それが肉の臭みをうまく抑えている。

肉もパンもけっこう固かったが、逆に噛めば噛むほど味が出てくる感じで、あたしは夢中になってもぐもぐと口を動かす。食べ終わる頃にはちよっと顎が疲れていそうだけど……お腹が空いていたこともあって、あたしはそんなこと気にも留めなかった。

「はー、美味しかった！　ごちそうさま！」

最後には予想通りちよっと顎が疲れて、飲み込みづらくなっていた肉とパンをカップのお茶で喉の奥に流し込んでから、あたしは大きく息を吐いて言った。

横ではあたしよりも早く食べ終わったジオが、面白そうな顔であたしを見やって口を開く。

「口に合ったようだなにより……ところで、そいつに分けてやらなくてよかったのか？」

膝の上に置いた籠を目で示して告げるジオの言葉で、あたしはルデインのご飯のことをすっかり失念していたことに気がついた。

「……あっ！　忘れてた……！」

ジオが自分用に買ってきたのと同じ、特大サイズのパンをあたしによこしたのはルデインの食べる分も計算に入れていたからなのだろう。

確かに、女の子が一人で食べきれる量じゃないよね……それをペろりと一人で平らげてしまったあたり、年頃の女子としていかなもんだろうという気がしなくもないけど。いやでも、普段はこんなに食べないし！

「ごめん、ルデイン！　今なにか買って……！」

籠の蓋を少しだけ開けて、抑えた声でそう言いかけてからあたしはルデインの様子に気がついた。

籠の底で丸っこくなって、すびすびと寝息を立てていたのだ。

あたしの声にもなんの反応もなかったあたり、ぐっすり寝入っているみたい。

ひよいとあたしの横から籠をのぞき込み、ジオが苦笑混じりに「

おやまあ」と呟くように言った。

「すっかり寝ちまつてるな……そーい、こいつあんたが馬車の上で船漕いでる間も、ずっと起きていたんだっけ」

あたしが馬車から転がり落ちるのを防いだ功労者の片割れが口にする言葉に、あたしは若干顔を赤らめる。

昨日もあんまり寝ていなかったみたいだし……ここは寝かせておいたほうが良さそうだ。

「じゃ、どこかでルディンにも食べられそうなものを買って……」

言いながらあたしが立ち上がった時、少し離れた屋台のほうでなにかものが壊れるような大きな物音がした。

見てみると、屋台の主人と思われる男の人が大柄な男の人に掴みかかられている。

断片的に聞こえる言葉の内容から察するに、お釣りを誤魔化したとか誤魔化してないとか、要は客とお店の間のトラブルといったところか。

よくあることらしく、周囲の人々は止めようともせずに見ていたが、大柄な男が店の主人を引きずり出して路上に殴り倒したところで非難めいた声があがる。

そうなる前に止めればいいだろうに……って、傍観している点ではあたしも一緒か。

「待って」

杖を握りしめてあたしが足を踏み出そうとしたところで、ジオがあたしの肩に手を掛けて言った。

反射的に言い返そうとしたあたしの言葉を、彼は苦笑じみた笑顔で遮る。

「あんたが手出ししたら、とんでもない騒ぎになるだろう——俺が

行くから、あんたはここで待っていてくれ」

失礼な。ここで魔術ぶっ放そうなんてこと考えてませんよ——そもそもあたし自身には魔術なんて使えないんだから。

文句を言いそうなルディンも寝てるし、ちょこつと杖でぶん殴ってやろうと思ったただけだ。

そんなあたしの内心には気づかず、ジオは馬の手綱をあたしによこすと人混みを縫うようにして、倒れた店主を蹴りつけようとしている男に近づいていく。

まあ、ジオの実力なら十分止められるだろうし、あたしが行かなくても大丈夫か……

そう思ってたあたしは再びベンチに腰を下ろし、ジオの背中を見るときもなく見送る。

——その直後、あたしは弾かれるように再びベンチから立ち上がった。

「……っ!？」

思わず息を呑んだのは、人混みの中に見知った顔が——今度こそ間違えようもないくらいにはつきりと見て取れたためだ。

同時にさっき見た後ろ姿が、誰のものに似ていたのかようやく理解する。

「——お父、さん!？」

そんなはずがないという思いが瞬時に脳裏をよぎる。

ここはあたしが住んでいる街ではなく、それどころか同じ世界ですらない。転移の魔術によって連れてこられた、まったくの異世界だ。

そんなところに父親がいるなんてことは——常識的に考えてあり

得るはずがない。

だけど、そんな冷静な判断が吹き飛んでしまうくらい、その人物はうちの父親にそっくりだった。

やや癖のある薄い色の髪に、黙っていれば酷薄にも見える端正な顔つき。

彫りの深い顔立ちは、この世界の人々がよく着ているような丈の長い上着を身につけているためもあって、周囲の風景に違和感なく溶け込んでいる。けれど収まりの悪い髪を長く伸ばして、首の後ろで一つに束ねているところまで瓜二つ。

それだけなら、ものすごい偶然による他人の空似と考えられなくもなかったんだけど。

でもその人物の顔に浮かんでいるのんびりとした表情——いかにも人の好きそうな、お気楽そのものといった表情は赤の他人のものとはとても思えなかった。

「……嘘」

そんなことあるはずがない、という内心の声を無視して足が勝手に動き出す。

ジオから預かった手綱を無意識に手放し、杖とルディンの入った籠だけを両手に持ってあたしは人混みの間に見え隠れする、その人物へと近づいていく。

「エーリ!?」

かすかにジオの慌てた声が聞こえたような気もしたけど、それがあたしの足を止めることはなかった。

（絶対、気のせい……別人に決まってる!）

頭の片隅でそうささやく声も聞こえたけれど、歩調がどんどん早くなっていくのを止められない。やがて人混みをかき分けるようにして進みながら、あたしは頭の中で自分自身に言い訳するように呟く。

（確認するだけ。別人だっということがわかれば、それで納得できるから……）

別人だって確信しているなら、確認する必要だってないはずだけど、そこまで冷静に判断する余裕はあたしにはなかった。

ただ、胸の内の衝動に急き立てられるように、ひたすら足を進める。

父親がこんな場所にいるはずもない——どんなによく似ていようとも別人でしかあり得ない以上、落胆することになるのは目に見えているのに。

勝手にジオの側を離れれば、心配も迷惑もかけるとわかっていたのに。

それでも近くで確認してみたいという衝動を、どうしても抑えることができなかったのだ。

「……あれ？」

間もなくその人物が立っていたあたりにとどり着いて、あたしは彼の姿がどこにも見えないことに気がついた。

「おかしいな、さっきまでここに……」

周囲を軽く見回して、あたしはそれらしき人影を人混みの向こうに発見する。

後ろ姿だったけど、今度は見過ごしたりはしない。毎朝毎晩、嫌というくらい見慣れている姿なのだ。

通りを横切って、細い脇道に入っていく影をあたしは慌てて追かけた。

『……エーリ?』

ようやく目が覚めたのか、そこで籠の中のルディンが訝しむような声を発する。

『どうした、いったい……なにかあったのか?』

あたしは答えようとしたけれど、今の自分の行動をどう説明していいのかわからず、一瞬口ごもる。

「えっと、その……うちの父親そっくりの人が……」

説明しようとしている間に人影を見失いそうになり、あたしは前方へ目をやったまま「ごめん、ルディン! 話はあとで!」とだけ返して足取りを速めた。

ルディンはなにか言いかけたけど、あたしの声に切羽詰まったものを感じたのか黙り込む。

あたしはそれを幸い、黙ったまま脇道の奥へと走りこんでいく。自分でも不合理なことをしているという自覚はあったけれど、理屈ではなく感情の部分であたしはその人物を追うことを止められなかった。

そう、父親そっくりのその姿を見た時に、あたしの胸の奥にわき上がったのは抑えきれないくらいの強い感情——帰りたいという願いだった。

同時に、胸の奥に封じ込めておいたはずの不安や恐怖——このまま帰れないのではないかという——が堰を切ったようにあふれ出して、あたしはそんな思いから逃れるように無我夢中でその人物を追

いかけていたのだ。

まるで迷子になった子供が、親を見つけて脇目もふらずに駆け出していくように――

脇道に入ってしまったらしくしてから、あたしは再び目的の人物の姿を見失ってしまったことに気づいた。

「……あ、あれ……？」

ずっと目で追いながら走っていたはずなのに、どこにもその姿は見当たらない。

どこかの角を曲がってしまったんだろうか――とあたりを見回しながら、さらに奥に向かって進もうとした時。

「――っ！」

すぐ後ろに人の気配を感じて、あたしは反射的に振り返った。

けれど同時に、あたしの顔のあたりに細かな粉が舞った。あたしは粉をまともに吸い込んでむせそうになるが、それよりも早くがくりと全身の力が抜ける。

(な……に、これ……っ!?)

膝を思い切り地面にぶつけたけれど、痛いと思うことすらなかった。

とっさに手を出すこともできず、うつぶせにどさりと倒れ込む。杖と籠があたしの手から投げ出されたのがわかったけど、その行方を見届けることもできなかった。

闇に食い潰されるように、意識が急速に薄れていく。

近づいてくる靴音が聞こえた――そう思ったのを最後に、あたしは完全に意識を手放したのだった。

1-14 あるはずのない再会（後書き）

ちよこつと急展開。

1-15 とらわれの身の上

「む……」

肩と頬のあたりに鈍い痛みを感じて、あたしは呻きながら目を開けた。

同時に石造りの床が目に入り、横向きに倒れているのだということとを理解する。両腕は後ろで縛られて、口には猿ぐつわというおもかけつき。これはなにをどう鼻肩目に見ても、捕まったという以外に考えられない状況だった。

それにしても、フローリングにごろ寝でも十分きついのに、石の床に直接転がされるのってかなり身体が痛い。

（どう……なったんだろう？　ここは一体……？）

現実逃避気味にどうでもいいことを考え始める頭を叱咤激励し、あたしは懸命に状況を把握しようとする。

といっても判断材料は少なく、わかるのは両手を縛られ猿ぐつわを噛まされて石の床に転がされているという状況からして、あまり好意的ではない相手に捕まったということのみ。

たぶんあの脇道で被った粉が、眠り薬かなにかだったんだろうけど……

（床に当たっている部分がちょっと痛いけど、それ以外はなんともない……）

あたしは少しずつ身体を動かして、どこにも（縛られている以外の）異常がないことを確認する。幸い暴力をふるわれたような様子も、あんまり考えたくはないけど衣服が必要以上に乱れている様子もない。

とはいっても、こんなところで横になっているせいで埃や皺まみれだったけど。

（あゝ、また制服が汚れて……うう、やっぱり寄り道しないで、まっすぐ宿に向かったほうがよかったかも）

同じさらわれるにしても、せめて買った衣服に着替えてからにして欲しかった。そりゃ今更気にしてもしょうがないってことくらい、わかってるけどさ……

そこまで考えて、あたしは手にしていた杖とルディンの入った籠が、どこにも見当たらないことに気がついた。腰に付けていたポーチもない。

同時に、あたしは自分がこんな状況に陥っている理由に思い当たった。

たぶん狙われたのはあたしじゃなくて——ルディンだ。あたし自身が狙われる理由になんてまるつきり心当たりはないけど、竜の姿をしたルディンが狙われる可能性があることは彼から聞いて知っている。

（目を付けられたとしたら、やっぱりあの時かな……籠を買ったお店の前で、ルディンが荷物から転がり落ちた時……）

あの泥棒少年、道案内だけで無罪放免にしてやらないきゃよかったかも。

まあ、開き直ってタンカ切ってしまったあたしにも責任はあるか——まさかこんなに早く、ルディンに手出ししてくる人間がいるな

んて考えもしなかったからなあ。

それにしても、なんとかしてルディン——それに杖とポーチも取り戻さないと。

道案内はルディンにお任せ状態だったので、あたし一人では〈塔〉までたどり着けるかどうか知らない。たどり着けたとしても、あたしのことを信用してもらえるかどうか知らないし……第一ポーチがなければ〈塔〉までの路銀もない。

それに——そんな実利面でのあれこれをさしおいても、ルディンを見捨ててあたし一人だけ〈塔〉に向かうなんてこと、できるはずがない。

けど問題は、どうやってこの状況を打破するかだよな。

ルディンがいないんじゃないし、魔術も使えないし、縄を切るような道具も——ポケットの中にあるのは携帯電話とハンドミラーくらいで……

（あ、ハンドミラーを割れば……！）

あたしはそう思っでごろりと仰向けになったけれど、縛られたままの状態ではスカートのポケットに手を入れることはできなかった。それに、転がった時の感触からすると、ポケットの中のものも全部奪われてしまったみたいだ。

（ああもう……どこまで念を入れれば気が済むんだか！　っていうか、ポケットの中ものを盗ったってことは……意識のない間に身体に触られた？　許すまじ！！）

内心憤りながら、あたしはもぞもぞと動いて縄を緩ませようとする。くそ、結び目がきつい上に緩みにくい結び方をしているみたいで、全然ほどけそうにない……

あたしはしばらく縄と格闘したあと、あきらめて身体力を抜いた。そりゃまあ、素人が簡単にほどけるような結び方をしてるはずかないよね——とため息混じりに胸の中で呟く。

だけどこのまま脱出をあきらめてしまおうわけにはいかず、あたしはごろりと体勢を変えて部屋の中を観察する。今すぐ縄をほどいて脱出するのは無理だとしても、できる範囲内で情報を集めておかないと。

あたりはほとんど真っ暗だったけど、だいぶん目が慣れてきたおかげであたしは自分が物置のような、狭い部屋に転がされているとわかった。

壁際には木箱や袋に入った荷物が積み上げられていて、その上のほうに空気穴のような小さな窓が一つだけある。荷物の隙間に見える壁は石造りで、窓とは反対の方向に鉄枠で補強された頑丈そうな木の扉が一つ。

部屋の中に縄を切るのに役立ちそうなものは見当たらず、あたしは内心でちよっとだけため息をつく。

ポケットの中のものまで取り上げるあたり、かなり用心深い犯人らしいからそれほど期待はしてなかったけど……どれだけ念を入れれば気が済むんだか。

もっとも、扉についている鍵穴から見ても、仮に縄をほどくことができたとしてもこの部屋を出るのは至難の業に違いない。この念の入りようからして扉は間違いない施錠されているだろうし、窓はとも人が出入りできるような大きさではない。

(……って、そんなことがわかってても、ちっとも嬉しくないんだけど)

暗澹たる気分であたしが心の中で呟いた時、扉の外からこちらに近づいてくるかすかな足音が聞こえた。

足音はまもなく扉の前で止まり、がちやりと鍵を開ける音がいやに大きく響く。

あたしは反射的に扉を見やり、直後慌てて意識を失っているふりをしようとした。扉の外にいるのが何者かわからないが、意識のないふりをすれば少しは油断するだろう。

けれどあたしが目をつぶるよりも早く扉が開き、入ってきた大柄な男性と思しき相手とばっちり目が合ってしまう。

し、しまった……もっと早くに寝たふりしてれば良かった……

「お目覚めかい、魔術士の嬢ちゃんよ」

男はあたしが意識を取り戻しているのを見て、ちょっと驚いたように目を見張ったけれど、あたしが両腕の自由を奪われて言葉も自由に発せないことを思いだしたのか、にやりと片頬に笑みを浮かべて言った。

扉の向こうも薄暗いため、男の顔をはっきりと見て取ることはできない。

だけど男の顔に浮かんでいるのが、自分の絶対的優位を確信した卑しい笑みであることが、その声を聞いたただけであたしにははっきりとわかった。

ついでに、絶対にお友達にはなりたくないタイプであることも、だ。

「たいした大魔術士みたいだが、その格好じゃなにもできないだろう？ 頼みの杖も使い魔もいないんじゃないかな——」

男はにやにやと笑いながら、あたしの側へと歩み寄ってくる。

蹴りの届く場所に來たら急所を蹴り上げてやる——そう思ってたしは男の姿を睨み付けたが、そんな内心の声が聞こえたように、男はあたしから少し離れた位置で足を止めた。

「隠し持っていた妙な道具も、こっちで預からせてもらったしな。

しかし鏡はともかく、あのピカピカ光る板はなんなんだ？ 中には妙な絵が描いてあるし——ぶら下がってるのも見たことのない生き物の人形だし。呪いの道具かなにかか？」

（今となっては絶対入手不可能な、カーバン〇ルの限定ストラップに対して失礼な！ というか、変に携帯いじって壊したりしたら承知しないからね！！）

待ち受けの画像だって、一応父親の代表作（売れ行きはそれほどぱっとしないが）の表紙イラストなんだから。変と言われる覚えは——いや、猫耳っ娘が巫女服着てカメと手を繋いでいるのは、あたしの世界の基準に照らしても十分変か。

「ま、大人しくしてるんだな。お前もお前の使い魔も、高く買い取ってもらえそうだからよ。下手に暴れて余計な傷をつけたりしちゃ、商品価値が下がっちゃう——お前だって痛い思いをしたかねえだろ？」

得々として好き勝手なことを言った挙げ句、男は下品な笑い声をあげて部屋から出て行ってしまう。扉の外から再びがちゃりと鍵をかける音が聞こえたけど、あたしはその音をほとんど聞いていなかった。

あたしは頭の中で、男の口にした言葉をくり返し反芻する。

（『お前もお前の使い魔も』……ってことはつまり、あたしも売っ

ばらうつもりでいるってこと？ 冗談じゃない！ そんな目に遭わされるとわかってて、誰が大人しくなんてしてるもんですか！」

あたしは扉の向こうに人の気配がないことを確かめてから、壁際まで転がって行って背中を壁に付けるように身を起こす。スカートがまくれ上がってしまったけど、ここにはあたし以外誰もいないから気にしない！

壁に背中を付けながらずりずりと移動し、あたしは壁の石材に尖った場所がないか目をこらして探す。なければ積み上げられた箱の角でも——何度もこすりつけていけば、切れるまではいかなくても少しくらいは弱くなるかもしれない。

そう思ってたあたしは石材の尖った場所や、箱の角にぎりぐりと縄をこすりつけてみたけど、よほど丈夫な縄らしく全然身体に伝わる感触に変化がない。しまいには額に汗を浮かべて、あたしは木箱のすぐ側にぺたりと座り込んだ。

猿ぐつわのせいで息が苦しく、あたしは肩で息をしながらうつむく。

（うー、やっぱり全然上手くないかない。そう都合良くいくわけがないってわかってるけど……でも、このままじゃ……）

じわりと目に涙が浮かびそうになるのを、あたしは懸命に頭を振って押し止める。

泣いていたって事態は好転しない。こんなことになったのも、もとはといえばあたしのせいなんだから——いくら父親そっくりだったからって、なにも考えずにあの人影を追いかけていなければ。

こんな異世界に父親がいるわけないんだから、追いかけたってなんの意味もなかったのに。

考えれば考えるほど思考がネガティブな方向に転がり、もはや止めることもできずに涙がぼろりとこぼれ落ちる。

(助けて、誰か——ジオ……ルディン！)

我慢しきれずに胸の中でそう思った時、あたしの頭の中で聞き覚えのある声が響いた。

『——エーリ！？ 無事なのか！？』

「……………っ！」

あたしは思わず声をあげたけど、それは猿ぐつわのせいでくぐもった音にしかならなかった。

だけど心の中であげた声は、その声の主——ルディンのもとに届いたようだった。

『ルディン！？』

『無事か、エーリ？ どこにいる！？』

ルディンの声には自分よりもあたしのことを案じる響きが満ちていて、あたしは思わず涙をもう一滴こぼしそうになる。

『どうした、エーリ？ まさか、どこか怪我でも——』

『違う、違うの——大丈夫、怪我はしてない。ちょっと安心して力が抜けただけ……ルディンこそ大丈夫？ ひどい目に遭わされてない？』

頭の中でルディンと会話できることを不思議に思うよりも、今のあたしにとっては彼の無事を確かめるほうが先だった。

『大丈夫だ。檻のようなものに閉じこめられてはいるが、危害などは加えられていない』

ルディンの返事に、あたしは安堵のあまり力が抜けそうになる。売り物にするつもりである以上、それほど手荒な扱いは受けないだろうとは思っていたが、万が一ということもあるので心配していたのだ。

『よ、良かった……ルディンになにかあったら、どうしようかと思っただ……』

あたしの心からの言葉に、ルディンは妙にそわそわした——姿は見えないんだけど、雰囲気的に——様子で声を返す。

『わ、私のことより自分のことを心配しろ。お前もあの男たちに捕まっているんだろうが——いったいどこにいる？ 逃げられそうな状況か？』

『ううん、無理そう。縄で縛られてて身動きが取れないし、猿ぐつわも……なんとかして縄を切ろうとしてるんだけど、全然切れそうになくて。物置みたいな部屋に閉じこめられるんだけど、部屋にも鍵がかけてあって——』

ルディンの言葉を聞いているうちに、あたしは少し冷静になって自分の置かれている状況をそう説明する。

ルディンはその言葉に衝撃を受けたらしく、次の言葉が返ってくるまでにしばらくの沈黙があった。

『……ルディン？』

『いや……なんでもない。それより、近くに杖は見当たらないか？ 声の奥底に押し殺したような怒りが感じられるのは、はたして気のせいだろうか。』

『杖？ 見当たらないよ。腰に付けていたポーチも——ポケットに入っていた手鏡や携帯まで、気がついた時には全部取り上げられち

やってたんだから!』

『そうか……』

半分予測していたのだろう、ルディンの声にさほど落胆の響きはなかった。

そのあとしばらく言葉が途切れ、あたしは沈黙の重さに耐えかねて、この場ではあまり重要ではなさそうなことを尋ねる。

『ところで——どうしてルディンと頭の中で喋れるわけ? なにか魔術でも使った?』

考えにふけっていたらしいルディンの声が返ってくるまでに、一瞬以上の間があった。

『あ、ああ……嘘から出た真まことというべきか、私は本当にお前の使い魔となっているみたいだ。使い魔と主人との間では、どれだけ離れていようと——たとえ壁に隔てられていようと、共有している魔力を介して精神での会話が可能となる』

『使い魔……って、いつの間にそんなことに!?』

『私にもわからん。いったい、いつ契約が成立したのか……可能性があるとすれば、私を使い魔だと説明するようお前に言って、お前が同意した時か。呪文も触媒も使わず、たったあれだけの言葉で契約が成立するなど、普通は考えられないが……』

ぶつぶつと呟くようなルディンの声はなおも続いていたが、あたしには完全に理解不能の内容だったため、あたしは彼の注意を引くように強い意志を込めて呼びかける。

『ルディン! 考え込むのはあとにして、今は逃げることを考えないで! このままじゃあたしもルディンも売っぱらわれちゃうよ!』
はっとしたような間のあと、少し赤面したようなルディンの声が

あたしの頭の中に届いた。

『……そうだな。理由がどうあれ、こうして意思の疎通ができるだけでもこの場はありがたく思うべきだろうし……』

『なにかいい考えある、ルディン？ 魔術で檻をぶっ壊しちゃうとか』

それは考えという以前の力業だ、と呆れたように言い返してから、ルディンはあらたまった口調であたしに尋ねた。

『縄はともかく……猿ぐつわだけでも外せそうにないか？ エーリ』

『両手縛られてて、いったいどうやって外せと……？ あたしだって外せるもんなら外したいんだけど、縄以上にきつく縛ってあるのよ？』

おかげで息苦しくて仕方ないし、唾でべとべとになって気持ち悪いことこの上ない。

『……声さえ出せれば、駄目元で魔術を使ってみるという手もあったんだがな。杖がなければ魔力の収束は難しいが、お前ぐらいの魔力があれば、杖なしでも簡単な魔術くらいは——』

『今までみたいに、ルディンが呪文を唱えるのじゃ駄目なの？』

あたしの問いかけに、ルディンが首を横に傾げるような気配が返ってくる。

『たぶん無理だろうが——試しに使ってみるぞ。発火！』

フォルカ

ルディンの声は虚しく響いただけで、あたしの頭の中に不思議なイメージがわき上がることも、空中に光の図形が浮かび上がることもなかった。

『……なにもないけど、そっちでなにか起きた？』

『いや。やはり杖がなければ、私の唱えた呪文でお前が術を起動す

るのは無理なようだ。おそらく杖を介して術の構造を感知しているのだろうが――』

『じゃ、声が出せたって同じじゃ!？ あたしには魔術なんて使えないんだし……!』

思わずそう声を返すあたしに、ルディンは少しの迷いも感じさせない確信に満ちた声で言い放った。

『いや、使える――使えないはずがない』

いささかの揺るぎもないその声が、あたしから反論の言葉を奪う。

『いくら杖の補助があつたにせよ、何の素養もない人間に術の構造が感知できるはずがないんだ。お前はもう術の構造は理解している。呪文はそれを喚起させるための道具に過ぎない――お前はもう何度も自分自身の力で魔術を使っている。その事実を信じろ』

『……わかった』

それ以外の言葉は受け入れない、と言いたげな断固とした意志の籠もる声に、あたしは不承不承うなずいて顔を上げる。

『だけど、どっちみち猿ぐつわを外せないことにはどうしようもないんだよね……』

そのことを思いだしたようにルディンは一瞬言葉に詰まり、『本当に、なんとかなりそうにないか?』と聞いてくる。

気持ちわかるけど――というか、なんとかしたいのはあたしも山々なんだけど、がちり頬に食い込んで、舌で押しやろうとしても歯で噛み千切ろうとしても、全然びくともしないんだってば。

『だが……もう時間がない。ここの連中が話しているのを聞いたが、

魔力封じの首輪を今用意しているとこららしい。それを付けられたら最後だ——私にもお前にも、いっさいの魔術が使えなくなってしまう』

『そんなこと言われたって……簡単にほどけたら苦労しないわよ！』
言い返しながらも、あたしが再度縄を木の箱の角にごりごりこすりつけ始めた時。

『——おい』

頭の中に、ルディンとは異なる低い男の声が響き、あたしは思わず箱の角で手首を引っ掻いてくぐもった悲鳴をあげたのだった。

1-15 とらわれの身の上（後書き）

高レベルの魔術士とされているため、警戒が厳重です。瑛莉は今後、見つかりにくいところに刃物を隠し持つようになる……かも（笑）

1-16 意外な味方

『だ、だ、誰……っ!? つかなんで声が!?!』

ルディンの使い魔発言だって寝耳に水なのに、それ以外の使い魔なんて持った覚えはないぞあたしはっ!?!

手首がじんじん痛むのも忘れて、あたしは目だけで忙しく周囲を見回す。

もちろん部屋の中には、あたし以外の人間もしくは生き物の姿なんて見当たらない。

(も、もしかして幽霊……とか?)

あんまり嬉しくない想像が頭をよぎり、あたしはぞっと背筋を震わせる。幽霊の声を聞ける特技なんてもちろんないけど、この世界ではなにが起こったって不思議はない。

この部屋なんて、いかにもなにか出そうな雰囲気だしなあ……
あたしをさらった連中なら人の一人や二人殺していてもおかしくなさそうだし、案外ここで殺された誰かの霊があたしに呼びかけていたり……

『エーリ!? どうかしたのか!?!』

その時頭の中で響いたルディンの声に、あたしは思わず飛び上がりそうになりながら必死に訴えかけた。

『い、今……頭の中で、誰か別の人の声が……!』

『おい、姉ちゃん!』

再びあたしの頭の中でさっきと同じ声が聞こえ、あたしはぎくりとしながら半分やけっぱちで言葉を返す。

『誰よ!？ 幽霊だったらあたしに祟るのは筋違い……』
『縄をほどいて欲しくねえか?』

間髪入れずに届いたのは思いがけない台詞で、あたしは内心で唱えかけていた念仏（この世界の死者に通じないことは確かだったけど、つい……）を中断する。

『な、縄……?』

恐る恐る問い返すと、頭の中にうなずくようなイメージが伝わる。
『困っているんだろ? その縄をほどいてやるって言ってるんだよ——それさえほどけりゃ、ここから逃げられるんじゃないのか?』
『……そ、それはそうだけど』

この状況でお手伝いを申し出てくる幽霊っていうのは想像つかないし、ということは幽霊じゃなくて人間なんだろうか? でも、だったらどうして頭の中で声が……?

あたしが首をひねっていると、頭の中の声が催促するように呼びかけてくる。

『ほどくのかほどかないのか、どっちなんだ? そのまま売っぱらわれちまってるのか?』

ルディンよりもかなり年上の男の人の声のようだ。たぶん、ジオよりも年上——どんなに若く見積もっても30以下ってことはないだろう。

ぐるぐる混乱しながらも、あたしは頭の中で響く声に対して答える。

『ほどけるものなら、ほどいてほしいわよ……でも、いったいどうやって? っていうかあんた何者? どうしてあんたの声が頭の中に……』

『それはこっちが聞きたいぜ。あんたの様子を見てたら、急に声が

頭の中に聞こえてきて……まあいい、そんなことは後回しだ』

その声と同時に、あたしの後ろでなにかごそごそ——というか、かさかさとした小さなものが動くような気配がする。

あたしは思い切り首をねじって後ろを見たけど、積み上げられた箱以外にも見えない。

いや——視界の隅を、なにか小さなものがかすめたような気がした。暗くて良く見えないんだけど、手のひらサイズの黒っぽいものが動いている。

これって、まさか……！？

『おい嬢ちゃん。この縄をほどいてやるかわりに、俺たちにかけて呪いを解くって約束しろ。売っぱらわれるところを助けてやるんだ、そのくらいしてもいいだろう？』

縛られた手首のすぐ側で、あたしの顔を見上げているのは黒っぽい灰色の毛皮を持つネズミだった。

その後ろには荷物の陰に隠れるように、何匹ものネズミが待機している。

『ま、まさか……あんたたちって……』

『そうだ、あんたに呪いをかけられた盗賊団ご一行だ！ 本当にあの時はどうなるかと思ったんだからな！ とっさに機転きかせて馬車に忍び込んだからよかったようなものの、あそこで放り出されたら獣の餌だぞ、獣の餌！』

あたしのすぐ側にいるネズミが、大きく広げた腕をぶんぶん振り回しながら言う。

そのポーズはこの状況でも妙にユーモラスで、あたしは納得と脱力とが半々に混ざり合った気分でその姿を見下ろす。

まあ、あたしが言うことじゃないだろうけど……無事で良かった、のかな？

『で、どうするんだ？ 約束するのか、しないのか？ 俺たちは別にいいんだぜ、あんたが売っぱらわれようがどうしようが……』

『でも、あたしが売っぱらわれちゃったら、あんたたち人間に戻れないんじゃない？』

あたしが思わず問い返すと、偉そうにふんぞり返っていたネズミが目に見えてわたわたした様子を見せる。

『そ、そりゃ困る！ けどあんただって困るだろ！？ 売っぱらわれてどっかの金持ちのなぐさみ物になりたいか！？』

『なりたくないわけないでしょっ！』

頭の中でネズミに答えながら、あたしは一方で頭を忙しく回転させる。

とにかく今は縄をほどかないことにはどうしようもない。ネズミ（中は盗賊らしいけど）の申し出は願ったりかなかったりで、問題はあたしが彼らにかけた術をとくことができるかどうかで、人間に戻った彼らがまた盗賊稼業を始めないかってこと。

縄だけほどかせておいて、あとで約束を反故にするってこともできると……

『ルディン、今の聞こえた？』

あたしは沈黙しているルディンに向かって、頭の中で呼びかける。

『ああ』

『……あの術、あたしに解除することはできる？ 甲狼の時みたいに、まるごと分解しちゃったり……しないかな？』

『おそらく大丈夫だとは思いますが……』

ルディンの答えは歯切れが悪い。なにか言いたげな様子なのは、ここは約束すると言っただけ言って、さっさと縄をほどかせるべきだっと思ってるからだろうな。

『……だが、もしお前に術が解除できないなら、〈塔〉の魔術士の手を借りるという方法もある。そいつに縄がほけるなら、どんな条件でも呑んでかまわない。魔力封じの首輪はただ魔術が使えなくなるというものではない——少しでも魔術を使ったら最後、首を落とされてしまう仕掛けになっているんだ』

うわ、それは本気で勘弁してもらいたいんですけど！

あたしは意を決して、ネズミに顔を向けて心の中で告げる。

『お願い、縄をほどいて。あたしは半人前だから、絶対にあなたたちをもとに戻してあげるって約束はできないけど、あたしにできない時は〈塔〉の魔術士の力を借りてでもあなたたちを必ず人間に戻す。それだけは約束する』

ネズミは値踏みするようにあたしを見返したのち、後ろのネズミたちに向かって来いと言うように手を振ってみせた。

『よし、やるぞ野郎ども！』

物陰から現れた十匹以上のネズミは、あたしの手首を縛っている縄に群がると、いっせいに鋭い歯で縄をかじり始める。

……正直、あんまり気分の良くない光景だなぁ。助けてもらってるってわかってても。

親分らしきネズミはあたしの肩口まで登ってくると、つぶらな瞳をわずかに細めて言った。

『約束は忘れるなよ、嬢ちゃん。反故になんてしようもんなら、あんたが寝てる間に服をぼろぼろにしてやるからな』

『しないわよ！ ただ……』

『自分で戻せるとは限らない、か？ あんたみたいな魔術士が半人前だなんて、どう聞いても冗談としか思えねえけどな』

やけに人間くさい仕草で首を振りながら、親分ネズミはあたしに

向かって言う。

『だけど、あんたは簡単にできると言って約束しなかった。最初から反故にするつもりなら、いくらでも約束できただろうに——だから、とりあえずあんたの言葉を信用してやる』

『そっか……ありがと』

あたしが心の中で浮かべた言葉に、親分ネズミは慌てたように手を振ってみせた。

『な、なにを言ってるんだ！？ 勘違いすんじゃない、俺たちはただ人間に戻りたくて……！』

『でも、信用してくれてありがとう。……できれば、人間に戻っても盗賊稼業には戻ってほしくないな』

あたしが付け加えた言葉は心からのもので、その思いが伝わったのか親分ネズミは押し黙ってうつむいた。

『……エーリ』

余計なことは言うな、と言いたげなルディンの言葉が頭の片隅に届いたけど、あたしは言葉を止めずに続ける。

『もしもこれから、盗賊を続けるというんだったら……約束だから人間には戻すけど、すぐに捕まえてしかるべきところに引き渡すわ。あたしがあなたたちを自由にしたせいで、誰かが襲われて怪我をしたり——死んだりするのは嫌だから』

これは縄をほどいてもらってから言うべきことなのかもしれない。これで彼らがあたしを助ける気をなくしたら、大変だったのはわかっている。

けれど、それはまぎれもない本気で——それを隠したまま助けられるのは嫌だった。

あたしも信じたかったのかもしれない。あたしを彼らが信じてくれたみたい、彼らがどうしようもない悪人じゃないってことを。

『……そう、言われてもな』

やがて、あたしの頭の中に親分ネズミのため息混じりの声が響く。その言葉に怒りはなく、縄をかじる仲間たちを止めようとする気配もなかった。あたしは無意識に止めていた息を吐き出し、親分ネズミはさらに言葉が続ける。

『しなくてすむんだったら、俺たちだって盗賊なんてしたかねえさ。だけど他にどうしようもねえんだよ……住んでた村が魔獣の群れに襲われちゃって、家も家族もなくしちゃった。生きていくためには、もう盗賊にでもなるしかねえんだ』

『で、でも……他の仕事を見つけることはできないの？ 盗賊以外の……』

『今はどこの街も、俺たちみたいな行き場をなくした人間であふれかえってるからな。うまく仕事にありつける奴は一握り……それも幹旋所の顔役に付け届けをできるような奴だけだ。あとはせいぜい日雇いの力仕事くらいだが、それにしだって雇われるのは地元に縁のある奴ばかりだからな。流れてきた俺たちにまで仕事は回ってこねえ』

うなだれるあたしの肩を、親分ネズミは力づけるように小さな手で叩く。

『まあ、出くわしたのがあんたでまだ良かったさ。切り捨てられても文句は言えねえところだったからな……まさか、ネズミに変えられちゃうなんて思いもしなかったが』

苦笑ってから、親分ネズミはあたしに切れたぞ、と伝える。

そこであたしは両腕が自由になっているのに気づき、長い間同じ格好をしていたせいで肩がぎしぎし痛むのをこらえながら、両腕を軽く前後に振って動かした。

『おい、約束を忘れるなよ！ 縄をほどいてやったんだからな、俺たちを……！』

肩の上で親分ネズミが喚くのを聞きながら、あたしは嚙まされた猿ぐつわをほどうとする。くそ、結び目が固くてなかなかほどけない……！

『エーリ！ 連中がそっちに行くぞ！』

頭の中にルディンの緊張した声が響き、あたしは必死に結び目と格闘する。

ようやく少し結び目が緩んできたところで、扉の向こうから近づいてくる複数の人の足音が聞こえ、あたしは強引に猿ぐつわを引っ張って顎の下まで引きずり下ろした。

『猿ぐつわが取れたわよ、ルディン！』

あたしの呼びかける声に、ルディンの声が一瞬だけほっとしたような色をのぞかせる。

『そうか——呪文を教えるぞ。しっかり聞けよ！』

って、本気で事前練習なしのぶっつけ本番！？ 心の準備もまだできてないんですけど……！

内心あたふたするあたしをよそに、ルディンはごく短い呪文を一言だけ唱える。

ルーリス

『光明——これだけでいい。連中が入ってきたら、集中して唱えろ。あと唱える前に目を閉じておくのを忘れるな！』

呪文らしき言葉が届いた瞬間、あたしの頭の中に一つの図形が浮かび上がる。

あたしはちよっと戸惑ったけど、矢継ぎ早の指示に気を取られているうちにそのイメージは消え、あたしは呪文を頭の中で何度も復唱する。

視界の端に団子のように固まったネズミたちの姿が入り、あたしは口元に笑みを浮かべて後ろに下がっているよう身振りで示した。

(……落ち着け)

ドアの外で足音が止まるのを聞きながら、あたしは自分に言い聞かせる。

(チャンスは入ってきた瞬間。魔術が使えなかった時は、一気に間合い詰めて誰か一人人質にとるか盾にする！)

向こうは武器を持っている可能性が高いし、荒事に慣れた複数の人間を一瞬で気絶させられるほどの腕はあたしにはない。

うちの父親だったら、にこにこ笑いながらあっさりやってのけそうだけどさあ……

そんなことを考えている間に、がちやりと音を立てて鍵が開けられる。扉が開いた———そう思った瞬間、あたしはぎゅっと目を閉じて声高に呪文を唱えた。

「——^{ルイリス}光明！」

瞬間、あたしの脳裏にさっき浮かんだのと同じ図形が浮かび上がる。

真円といくつかの曲線を組み合わせたその図形に意識が引き寄せられた次の瞬間、あたしの真正面に巨大な光の塊が生まれたのがわかった。

「——っ!!」

かたく目をつぶっていてもなお、瞼の裏までその光が白く染め上げる。

(ルディン、こういう呪文ならそうと先に言っておいてよ——!!)

だけど文句を言ってる余裕はなく、あたしはちかちかする目を開

けると、扉の前で目を押さえてうずくまっている男たちに走り寄っていった。

一人の延髄に踵を落として気絶させ、もう一人の顔面に膝蹴りを叩き込んで怯んだところで足下を刈る。

「こ……このアマっ!!」

倒れた男の鳩尾に全体重を乗せた蹴りを入れようとした時、少し後ろに立っていた男が剣を抜いて襲いかかってくるのが見えた。

「……っ!」

あたしはとっさに飛び退いて振り下ろされた剣をかわし、武器になりそうな物を目で探す。

とはいえ、そんなものが都合良く転がっているはずもなく……あ、あった!

あたしは床に落ちていた縄の残骸——さっきまであたしの手首を縛っていたもの——を素早く拾い上げると、男の顔面向かってそれを投げつける。

光の影響がまだ残っているのか、男は反射的に剣で払いのけようとしたけどもろに顔面に命中する。とはいえ所詮縄は縄、さほどのダメージを与えることなく男はさらなる怒りの咆吼をあげただけだった。

「てめえ! よくも——!!」

部屋中に響き渡る怒声を無視して、あたしは身を低くして男の脇を走り抜ける。

目的は最初から、ダメージを与えることじゃなくて男の注意をそらすことだ。まんまと目的を果たして廊下に走り出——そこであたしの足は止まった。

廊下の奥の方から近づいてくる人影——その顔を見たためだった。

「お父……さん？」

その顔は間違いなく、街で見かけた男性——うちの父親と瓜二つの顔だった。

思わず足を止めたあたしに、男性は悠然と歩み寄ってくる。面と向き合うのはこれが初めてだったけれど、その顔も表情も別人とは思えないくらいによく似ている。

「……誰、なの？」

呆然とあたしが呟いた時、後ろから伸びた手があたしの首筋をがっつちりと押さえ込んだ。

「——っ！」

片腕で抱え込まれるような形で、あたしは首を締め付けられる。踵が浮くほどの力にあたしは思わず悲鳴をあげかけ、だけど呼吸さえ難しい状況でそれは声にはならなかった。

腕をふりほどこうとじたばたともがくあたしの頭の中に、ルディンのやや慌てたような声が響く。

『エーリ！？ どうした——逃げられたのか！？』

あたしは必死に答えようとしたけど、混乱と苦しさで言葉を思い浮かべることもできない。

『ルディ——捕まっ……父親、が——』

「どうやって縄をほどきやがったんだ？ それにあの術——杖さえ取り上げときゃ、安心じゃなかったのか？」

息苦しさのあまり視界の狭まる中、男の声だけがあたしの耳に届く。

「竜を使い魔に持つほどの魔術士だ。杖はあくまでも補助——だから猿ぐつわを噛ませておくように指示しただろうが。縄をちゃんと結んでおかなかったんだろう」

答えているのは父親にそっくりな顔をした男だろうか。顔ほど声は似てないな——あたしは薄れかかる意識の中でぼんやりと思う。

『エーリ——おい、しっかりしろ!!』

頭の中ではルディンの必死な声が聞こえていたけど、あたしにはもう答えるだけの力も残されてはいない。

「そんなことは——いい、それより首輪を早く……!」

かろうじて聞こえた声に心の奥底で焦りがわくが、すでに意識を保っているだけで精一杯のあたしには抵抗することはできなかった。

『エーリ、呪文を唱えろ!』

(無理……言わないで……)

あたしが残った意識の片隅で、そう思った時——

「——っ!!」

かすかな悲鳴とともに、あたしの首を締め付けていた男の腕が離れた。

身体が自由になったと感じるのと同時に、床に投げ出されてあたしは両膝をつく。鈍い痛みを感じたが、それに気を取られている暇はなかった。

「ルーリス光明!」

あたしは顔を上げると同時に、残った気力を振り絞って呪文を唱える。

その瞬間、あたしの目の前に浮かんだのは先程のものよりも大きく複雑な図形だった。そこから放たれた光が、ネズミに噛まれた指を振り回している男と手にした杖を掲げようとした父親そっくりの男の顔を白く照らし出す。

二人の顔に浮かんでいるのは、信じられぬものをみたような驚き

の表情だった。

しかし一瞬のあと、その表情は視界全体を染め上げる膨大な量の光に塗りつぶされる。あたしも瞬間的に両腕で顔を庇い、かたく目をつぶったものの効果はなく、痛みさえ感じるほどの光があたしの視界を真っ白に焼き尽くした。

1-16 意外な味方（後書き）

瑛莉は幽霊は特別苦手じゃないですが、人並みに怖がるほう。

1-17 規格外れは留まるところを知らず

「く……うっ！」

強制的に意識を刈り取ってしまいそうな強烈な光に、あたしは喉の奥でくぐもった呻き声をあげる。

ちよ、ちよっといくらなんでも強力すぎない、これ？

ただ眩しいだけで、身体に害はないみたいだけ——いや、ここまで強烈な光を直視したら失明する危険があるかも。

あの二人に同情する気はさらさらないけど、ネズミたちは大丈夫かなあ……

かたく両目を閉じて、上げた腕で顔を庇いながらあたしはそんなことを考える。

光はいっこうに弱まる気配を見せず、あたしは上も下もわからない世界に立っているような気分になる。

その思いに影響されたのか、足の裏に伝わる床の感触も遠ざかっていく。

……って、まさかこれって脳貧血の症状だったりしないよね？
いくらなんでもこんなところでひっくり返るのは遠慮したいんだけど。

幸いなことに、ほどなくあたしの全身を包み込む光が弱まってくるのがわかった。

視界を真っ白に染める光が薄れるのを待って、あたしはゆっくり

と目を開ける。まだ完全に消えてはいないので、顔を庇う両手は上げたままだ。

「……え？」

そのあたしの目に映ったのは、周囲をきらきらと漂う細かな光の粒だった。

以前テレビで見たダイヤモンドダストのような、ごく小さな光のかげらがあたしの周囲を取り巻いている。

その美しさに思わず見とれながら、あたしは上げていた両手をゆつくりと下ろす。

光の粒が放つ光で周囲はまだ十分以上に明るかったけど、目を開けているのが辛いというほどではない。

「なんだろう、これ……？」

眩くのと同時に、光は渦を巻くようにしてあたしの目の前に集まってくる。

輝きを強める光の中心に浮かび上がるのは、握り拳大の光の塊。

まるで息づくようにほのかな明滅をくり返す真ん中に、うつすらと人影のようなシルエットが浮かんでいる。

親指くらいしかない人の姿は、顔はもちろん手足などの細部を見て取ることもかなわない。光の中でぼんやりとかすんでいるせいもあって、その姿は一筆書きで書いたラクガキのようにも見えた。

あたしがぼかんと見つめている前で、その人影は楽しそうにくると飛び回る。

頭でっかちの輪郭は子供みたいで、背中にはうつすら透き通る一對の羽があるようにも見える。光をまき散らしながら飛び回るその姿を見つめるあたしの頭の中に浮かんだのは「妖精」という言葉だ

った。

魔法も竜もありのこの世界だし、それくらいいても不思議はないのかも……でも、それがなんで急にここに？

『エーリ！』

ぼんやりとそんなことを考えていると、頭の中にルディンの焦ったような声が響く。

『無事か！？ 今の光は――』

その声であたしははっと我に返り、目をしばたたかせながらあたりを見回す。

薄く紗のかかったような視界の中、目を押さえて倒れている二人の男と床でのびているネズミの姿が目に入った。

慌ててネズミを拾い上げ、呼吸があるのを確かめてあたしはほっと息をつく。

『とりあえず、大丈夫……かな？』

頭の中でルディンに答えてから、あたしは微妙な視線を目の前に浮かんでいる光に向ける。

『ただ……なんか、変なの出てきちゃったんだけど』

『変なの？』

『光の塊。中で羽生えた人影みたいなのが踊ってるんだけど……これなに？ さっきの呪文って、これ呼び出すものなの？』

ルディンが絶句したような気配が伝わり、あたしは内心で言わなきゃ良かったかなと冷や汗を流す。

『……それは、光の純精霊だ』

しばらくの間のあと、ルディンが返したのは想像と微妙に異なる

答えだった。

『純精霊？』

『精霊の素というか、赤ん坊というか……どうして光を出すだけの初歩の呪文でそんなものが召還されるのかわからんが……桁外れにもほどがあるぞ、お前の魔力は』

『つて、あたしのせいなの！？』

『他に理由が考えられるか！ 間違いなく私が教えた呪文を使ったんだろう？』

『当たり前でしょ、他の呪文なんて知らないし……っていうか、あの状況でただの目くらましの呪文教える？ 親分ネズミが助けてくれたからいいけど、危なかったんだから……もっとう、即効で気絶させるみたいな呪文教えてくれたって……！』

思わず抗議の口調になったあたしに、ルデインはややたじろいだようだったがすぐに断固とした口調で答えた。

『杖がなかったからな。あまり複雑な術では、確実に発動させられるかわからなかったし……どうも、その様子だと全然心配はいらなかったみたいだが』

後半の言葉はため息混じりで、あたしはぽりぽりとこめかみのあたりを搔く。

『……それに、対人型の術では威力が增強された場合、相手を必要以上に傷つけてしまう恐れもある。極端な話、麻痺させるだけのつもりで心臓の動きまで止めてしまいかねない。そんなことになるのは……お前としても避けたいだろう？』

「あ……」

ルディンの言葉に、あたしは思わず声を出してしまう。

確かに、あんな切迫した状況で人間に影響のある魔術を使ったら、どんな結果になっていたことか……ただ光を出すだけの呪文で、あんなのが出てきてしまったくらいだし。

そしてその時、あたしがどんな気持ちになるか——ルディンは考えてくれていたんだ。

『ごめん……ありがとう』

心の中で言葉を返すと、ルディンは妙に落ち着きのない様子で気にするな、と返した。

『それより、早く私を助け出してもらえないか？ 檻が頑丈で、自力では出られそうにない』

『あ、うん。すぐ行く——どこの部屋？』

あたしは部屋の間所をルディンから聞き出すと、倒れている男の一人——ルディンの言葉によると、この大柄な男が首領らしい——を蹴り飛ばして間違いなく気絶してるのを確かめてから、懐を探って鍵を奪う。

そしてちらりと、その横に倒れている男に目をやろうとした時——

「このアマア！ なにしやがった！！」

響き渡った声にはっと目を上げると、部屋のほうから一人の男が走ってくる場所だった。

しまった、一人気絶させ忘れていたんだった！ あたしは飛び退いて体勢を整え、もう一度さっきの呪文を唱えようとしたのだけど、

「がっ！」

それよりも早く、男が悲鳴をあげてのけぞりながら倒れる。

あたしは目を丸くして倒れる男を見つめ、その額で大きくバウンドした丸い物体が足下まで転がってくるのに気づいた。

いかにも硬そうな皮に包まれた――果物かなにかだろうか？ 握り拳よりもひとまわり大きなそれが当たった衝撃は相当のものらしく、男はひっくり返ったままぴくりとも動かない。

「エーリ！」

その時後ろから聞こえた声に、あたしは驚きと安堵が半々の気持ちで振り返った。

聞き覚えのあるその声の主は、髭もじゃの精悍な男性――ジオだ。それほど長く離れていなかったはずなのに、その顔が妙に懐かしく感じられてあたしは顔をほころばせる。

「ジオ、来てくれたんだ！　　というか、よくここがわかって……」

ジオはあたしが無傷なのを確かめるとほっとしたように表情をゆるめ、あたしの側で足を止める。

「あんたの姿が見えなくなったあと、ツテを使って街の警備隊から話を聞いたんだ。あんたがあそこで勝手にうろつき回って迷子になるとは考えられなかったし、だとしたら姿を消したのにはなにか理由があるはずだと思ってな」

笑みを浮かべて答えたあと、ジオはあたしの足下で倒れている二人に鋭い目を向ける。

「そうしたらここ最近、旅行者を狙うたちの悪い人さらいが出没しているという話を聞いた。最近は何騒だから、旅人も用心して歩いているんだが……どうやら親しい人間になりすまして人気のない小

路なんか誘い込んでさらっていくつてのが、こいつらのやり口らしい」

言いながらジオが首領の横に倒れている男の身体を蹴り転がすと、さっきまで父親そっくりに見えていた男の顔が変わっているのがわかった。

父親よりも（見た目は）かなり年上の、顔色の悪い痩せた男性だ。顔つきも体格も、父親と似ているところはなに一つない。

「え……さっきまで……？」

思わず呟いたあたしに、ジオは男の側に落ちている杖を指し示して言う。

「魔術士の幻術だ。たぶん、相手が無意識に心で強く思っている相手の姿を写し取るかどうかしているんだろう。こんなところで、人さらに協力している魔術士にしちゃずいぶんな腕前だが――」

ジオはあたしにそう説明しながら、魔術士の着ているローブをはぎとって引き裂き、手足を縛り上げていく。

隣に転がっている首領も、同じように縛りあげながら、

「警備隊の連中もこいつらの隠れ家を探しているところだったんで、捜査に同行させてもらったんだ。怪しい地域を見て回っている時に、建物の一つから光が漏れるのを見てな。もしかしてと思って踏み込んでみたら、大当たりだったというわけだ」

それは……また、お世話おかけして申し訳ないというか。

「……でも、本当に助かったよ。ジオが来てくれなかったら、どうなってたか……」

「あの様子だと、自分でなんとかできたような気もするけどな」

悪戯っぽく笑って言い返すジオを、あたしはちょっと複雑な気分で見返す。

そりゃ呪文が間に合ってたなら、男を怯ませる程度のことはできた——隙さえあれば、あたしにも男を昏倒させられただろうし——けど、間に合ったかどうかは正直微妙だし、第一助けに来てくれたことに対して素直に感謝してるんだから、お礼くらい言わせてくれたって……

内心でぶちぶち言っていると、ジオはあたしの頭を大きな手でしがしと乱暴に撫でる。

「ま、それなりに役に立てたようで良かったぜ。仮にも護衛を名乗って、雇い主をさらわれた挙げ句に全部自力で解決された日にゃ面目丸潰れだからな」

「って、痛いって！」

あたしの抗議にジオは笑って手を離し、ところで、と視線をあたしの肩のあたりに向けた。

「そいつはなんなんだ？ それに、あんたの持ってるそのネズミ……」

「……なんか夢中で呪文唱えたら出てきたのよ。光の純精霊とか言っ……らしいんだけど、あたしにも正直なにがなんだかで——このネズミは……えーと」

手の中でぐったりしてるネズミをどう紹介したものか、あたしはちょっとだけ悩む。

けれど、ジオの目になにか思い当たったような光が見え隠れしているのに気づき、隠しても意味がないと結論づけてあたしは口を開

いた。

「オージスさんの馬車を襲ったあの盗賊たちの頭、みたい。馬車に隠れてあたしを追いかけてきたって……人間に戻すのと引き替えに、あたしを助けてくれたの」

あたしが閉じこめられていた部屋のほうに視線を戻すと、そこから十数匹のネズミがぴよぴよ顔を出すのが見える。

ジオは呆れたようにあたしの手の中のネズミと、部屋から顔を出しているネズミを見比べたけど口に出してはなにも言わなかった。かわりに空中に浮かんでいる光の塊に視線を戻して、がりがりと頭を掻きながら呟く。

「光の純精霊ねえ……どこまで規格外なんだか」
しみじみと言われたその言葉に、あたしは反感めいたものを覚えただけれど口には出せなかった。

ルディンにも散々似たようなことを言われたし、なんかもう今更っていうか……

正直、自分でもどれだけの力があるのかわからなくて怖いよ。

思わずうつむきかけたあたしの目に、目の前をふわふわ漂っている光の塊が入る。

目と鼻の先まで近づいたそれは、いくぶん光を弱めてあたしのことを心配しているようにも見えた。

そうだ……そんなことで暗くなっている場合じゃないし。

あたしはルディンが閉じこめられているという部屋のほうに向かって歩き出しながら、心の中で彼に呼びかける。

『ルディン、光の純精霊とかって放っておいたら消える?』

ちらりと肩越しに目をやると、頭の後ろのあたりにくつついて追いかけてくる光が見える。

勝手に消えてくれるなら放っておくけど、そうでないなら対処法を聞かないと。こんなものをくつつけて歩き回っていたんじゃ、竜を連れている以上に目立つに違いない。

『き……』

なぜか一瞬絶句してから、ルディンは気を取り直したように言葉を返した。

妙に言葉が固いような気もしたけど、なにか変なこと言ったかな？

『一度発生した純精霊はそのまま放っておいても消滅することはない……はずだ。普通は呼び出してすぐに契約を結ぶものだから、俺にもはつきりしたことは言えないが』

『契約？』

『純精霊はこの世界の現象の持つ力を、魔術によって具現化させたもの。成り立ちは異なるが存在そのものは自然に生まれた精霊と変わらない。放っておいても大丈夫——だろうが、呼び出した純精霊を契約せずに放置したなどという前例はないからな。そのまま普通の精霊として存在することになるのか、消え去るのか……はたまた暴走してとんでもない被害を生み出すことになるのか……』

……最後の一言がものすごく気になったんですが。

まあ、とにかくルディンと合流しないことには、対処のしようもないか。

あたしは間もなく一つの部屋の前に到着し、奪った鍵を鍵穴に差し込んで回す。扉を開けて部屋の中に踏み込むと、奥のほうに小型

犬のケージくらいの大きさの檻が見えた。

「ルディン！」

走り寄ろうとして、あたしは部屋の中に他に人影があることに気づく。

一瞬男たちの仲間かと思って身構えかけたけど、あたしの後ろにくっついて部屋の中に入ってきた光に照らされたのは後ろ手に縛り上げられた数人の女の子だった。

皆ぐったりした様子で床に座り込み、中には泣き腫らした顔の子もいる。

「……あいつらっ！」

思わず頭に血が上がりかけたあたしを、ルディンが慌てて止める。

『落착け、エーリ！ 純精霊が引きずられている！』

はっとして後ろに目をやると、さっきまでよりも光が強くなっているのがわかった。

あたしの感情に影響されているってこと？ 慌てて大きく息を吸って吐き、少し気持ちを落착かせてあたしはルディンの入っている檻に歩み寄る。

そのあとから入ってきたジオが、わずかに表情を険しくして引き抜いた短剣で女の子たちの縄を切っていく。

それを横目に見て、あたしは少しだけほっとした気持ちでルディンに向き直った。

「ごめん……迎えに来るのが遅くなっちゃったね。っていうか、あたしのせいでルディンまでこんな目に遭わせて……本当に、ごめんなさい」

檻を開けようとするけど、これにも鍵がかかっていて開けられない。

あたりを見回してみたけど近くには見当たらず……あの男たちが持つてゐることかな？　だったら身ぐるみ引っぺがして探してこなきゃ。

『まあ、仕方ない。私にも油断があったことだしな……できれば、今度からはこのようなことがないようにしてもらいたい』

「……うん、気をつける」

『そうしてくれ。それより、そこに杖があるから——鍵を探す必要はないぞ。それでこの檻を壊してくれ』

「殴ったくらいで壊れるの、この檻？」

『待て！　誰が殴れと言った——魔術で壊してくれという意味だ！　杖を振り上げるな、頼むからっ!!』　……あ、ごめん。つい素で実行するところだったよ。

あたしは振り上げかけていた杖を下ろし、檻に向かって意識を集中する。両手に伝わる杖の感触が、頭を冴え渡らせてくれるような気がした。

肩のあたりに浮かんでいる光の塊も、今はもう気にならない。

『呪文を教えるぞ——ジェフェイス破断』

金属の接合部だけを狙ってくれ、とルディンは淡々と告げる。

あたしは大きく息を吸って——呪文を唱える前に、脳裏を不吉な考えがちらりとよぎった。

「……あのく、もしかして、失敗したら檻と一緒にルディンまでバラバラになっちゃったりするんじゃないか……？」

尻尾と翼がびくりと跳ねた後、ルディンはあたしの顔をじっと穴が空くほど見つめる。

意を決したような声が、あたしの頭の中に響いた。

『……お前を信用する』

なんとも複雑な響きの声だったけど、奥底にあるのはまぎれもない信頼だった。

あたしを信じて、命を預けるという言葉。それは重くもあつたけど、あたしの胸にじわりと暖かくしみ通る。

そこまで言われたら、応えないわけにはいかないよね。

あたしは杖を両手で構えて、心の中に浮かぶ紋様に意識を重ねる。必要なのは最小限の力——あの檻を壊すに足るだけの。そこからはいっさいはみ出してはならない。細く細く、意識を一点に集中させて。

ジェフェイス
「破断」

そっと唱えた言葉に被さるように、檻を形作る鉄棒がばらばらに外れて互いにぶつかり合う澄んだ音色が室内に響いた。

1-17 規格外れは留まるところを知らず（後書き）

たいへん長らくお待たせいたしました（汗） まだなかなか時間が作りにくいのですが、ゆっくりペースで更新したいと思います。にしても、どんどん瑛莉の規格外っぷりが進行していく……そろそろタグに「主人公最強」を入れるべきでしょうか。

1-18 ちょっと商標権的にまずそうなので

ばらばらになった檻の残骸の中から、ルディンは窮屈そうに畳んでいた羽を広げて飛び上がった。

あたしの肩に降りたって、ほっとしたように息をつく。

肩に伝わる重みがなんだか懐かしくて、あたしも思わず顔をゆるめた。

「よかった……本当に。一時はどうなるかと思った」

『それはこちらの台詞だ。まったく、あれだけの魔力を持ちながらどうしてお前はあかも危なっかしい……』

お説教タイムに突入しそうな気配を感じて、あたしは慌てて頭の上あたりを漂っている光の塊を指さす。

「それより、これどうするの？ まさかずっと、このまま連れて歩くことになるわけじゃないわよね……？」

ルディンはあたしが話を逸らそうとしているのを察したらしく、深い紫色の瞳を半分閉じてあたしを睨んだけど、一つため息をつくと話題の転換に応じてくれた。

『まあ……確かに、そのままにしておくわけにもいかな』

彼がちらりと目を向けたのはジョに縄を切ってもらった女の子たちで、彼女たちは怯えた目つきであたしの上の光と、肩に留まったルディンを見つめている。

あゝ、そういえばこの世界では竜って危険なモンスターなんだっけ……

「大丈夫よ。これ、一応あたしの使い魔だから。暴れたりしないわ」

あたしは彼女たちを怖がらせないよう、できるだけソフトな口調でにつこり笑って言った。

「これも、すぐになんとかするから。ちょっと手違いがあってね。大丈夫、恐いものじゃないから」

というか、純精霊なるものがどういうものか、あたしにも正直まだよくわかっていないんだけど。まあ怖がらせることもないよね。

彼女たちの目に浮かぶ光が怯えから驚きに変わったところで、背後でばたばたと人の気配がわき上がる。

振り返ってみると、ジオと同じような格好をした数人の男の人が部屋に入ってくるところだった。人さらいの仲間かと思って一瞬身構えるけど、ジオが笑顔で声をかけたので味方だとわかる。

「おう、遅かったじゃねえか！ とつくに救出しちまったぜ！」

男の人たちはジオに向かってなにか言い返しかけてから、あたしの頭の上に浮かんでいる光に気づいてぎょっとした顔つきになった。露骨に警戒の色を浮かべる彼らに、ジオは「こいつが探していた魔術士だ」とあたしを指さして言う。

「それより、こっちの娘たちを頼む。怪我はないみたいだが……」

その言葉で、男の人たちは我に返ったように床に座り込んだままの女の子たちに駆け寄っていく。あたしは相変わらぬの危険人物扱いに正直複雑な気分だったけど、女の子たちが無事に保護されたのを見てほっと肩の力が抜けた。

うん、さんざんな目に遭ったけど、それでこの子たちがどこかに売り飛ばされずに済んだのなら結果的には良かったのかな。

そんなあたしの気持ち伝わったのか（はっきり言葉にして考えたわけじゃないんだけど）、ルディンはあたしの顔をちらっと見上

げると、むず痒いような妙な口調で『エーリ』とあたしに呼びかけた。

『まずは純精霊との契約を済ませてしまおう。召喚した当人なら、ほとんど時間はかからん。契約を済ませれば姿を見えなくすることもできるしな』

「あ、そうなんだ……？」

あたしは肩に留まったルディンに目を向ける。

『そうだ。というか、そもそも呼び出した純精霊を契約もしないで放置した前例というものがないから、なんとも言いようがないが……普通は何人も術者が念入りに準備を重ねて呼び出すものなんだ。うっかり間違っって呼び出すようなものじゃ……！』

ルディンの声が次第に興奮した様子を帯びてきたので、あたしは慌てて先を促す。

「で、契約って？ どうすればいいの？」

『……精霊の宿る器を用意して、精霊に名を与える。召喚した時点で純精霊とは仮の契約のようなものが結ばれているから、それで契約は完了する……はずだ』

「はず……って、なんか不安なんだけど」

『こんな形で純精霊が呼び出されたなんて話は聞いたことがないんだ！ 少なくともこうしてお前について回っている以上、なんらかの繋がりが生じている可能性は高い。それに賭けてみるしかないだろう！』

駄目だったらその時はその時だ、と告げるルディンの声はちよつとヤケになっているようだった。

うーん……まあ、やってみるしかないか。

「それはともかく……精霊の宿る器って？　ここで用意できるようなものならいいけど……」

『器は持ち運びのできるものならなんでもかまわない。たいていの場合宝石などに封じるものだが――魔力が蓄積しやすいからな。あとは武器とか防具とか……』

「この杖なんかでもいいわけ？」

あたしが手にした杖を軽く持ち上げてみせると、ルディンはまたも絶句したあとで低く唸るように言った。

『頼むからやめてくれ。精霊の器となったものは契約者本人にしか扱えない……これは俺が自分に合わせて使いやすいように調整した大事な杖なんだぞ。しかも、よりにもよって光の精霊など宿された日には……』

頭を抱えたルディンの説明によると、精霊っていうのは契約した本人にしか力を貸してくれないものらしい。しかも精霊の器となることでその道具自体が力を持つようになるため、せっかく調整した魔力のバランスが崩れることになるそうだ。

って、ちょっと聞いてみただけなんだけど……一応、人から借りているものだって自覚もあるんだし。

「でも、だったらなにを器にしたら……あたし今なにも持っていないんだけど……」

『自分の身体に宿するという手もあるな。お前くらいの魔力を持っていれば、まったく支障はないはずだが』

「か、身体!？」

それはちよつと……いや、かなり遠慮したい。

精霊がどんなものか知らないけど、そんなものをくっつけたまま向こうの世界に戻るのは嫌だ。第一、精霊って向こうの世界に連れて行っても平気なわけ？

ぐるぐる考え込んでいるあたしの顔色を愉快そうに見つめ、ルデインは小さく笑って言葉を発した。

『冗談だ——いや、身体に封じるといふのは実際にある方法だが、心配しなくてもお前の持ち物だったらあそこにある』

「……え？」

ルデインが向けた視線の先には、檻の残骸が散らばった机がある。机の上には、半分無意識で置いた気絶中の親分ネズミ。その横——杖が立てかけてあった場所の床に粗末な布の袋が置いてあった。

あたしは布の袋を拾い上げると、袋の口を大きく開けて中をのぞき込む。

他の女の子たちの持ち物らしき飾り物とかお金なんか混ざって、見覚えのある手鏡と携帯電話を見つけ出してあたしは思わず弾んだ声をあげた。

「——あたしの携帯！」

よかった、ここにあったんだ！

あたしの大声に部屋中の視線が集まるけど、あたしは気にせず携帯電話と手鏡だけ回収して袋を後ろに立っていたジオに押しつける。

「はいこれ！ あの人たちに渡してあげて！」

「おい……！？」

目を白黒させるジオにかまわず、あたしは携帯の画面を開いて無事に起動するかどうか確かめた。幸いどこも壊れておらず、待ち受けには見慣れたイラストが表示される。

（良かった……！）

ここじゃ使えないような代物だけど、あたしにとっては自分と向こうの世界をつなぐ大事なものだ。ぶらさがってるカー○ンクルのストラップも無事。

『……それを器にするのか？』

しみじみ感じ入っているところでルディンに声をかけられ、あたしは慌てて首を横に振った。「ううん！　ただちゃんと動くかどうか確かめたかっただけ……！」

そもそも、電子機器と精霊って相性悪そうだし。それで携帯電話が壊れたりしたら、悔やんでも悔やみきれない。

『いや……その人形……？　妙な生き物の形をしているが、魔力的には安定している。器には向いているぞ』

瞬間、あたしの頭をよぎったのはちまちま動くカー○ンクル。

背中に羽なんか生えたりして。あたしのまわりを飛び回って時には『ファイ○ー！』なんて言ったりして――

（か、可愛いかも……！！）

ものすごい誘惑を感じたんだけど、どこからか『それは色々マジイ！』という声が聞こえた気がして、あたしはぐっと欲求を抑え込んだ。

だ、だ、大事な父親からのプレゼントだし……限定生産のレア品だし！

決して天の声に屈したわけじゃないんだからね！！

「こ、こっちにしとく……」

あたしはそろそろと、もう一つ手の中に握りこんでいた手鏡（百均商品）を持ち上げる。

ルディンは妙に消耗したあたしを不思議そうに見上げたあと、納得したようにうなずいて言った。

『鏡か。光の精霊の器にするならちようどいいかもしれんな』

うん、そういうことにしておいて……

あたしが持ち上げた丸い手鏡に興味を持ったように、光の塊がふわりと近づいていく。

それを見ながら、あたしは純精霊に付ける名前を考えた。あんまり変な名前を付けるのも問題だし……なにがいいかな？

『難しく考える必要はないぞ。付ける名前によって精霊の力が決定するというわけでもない。ただ、お前がその純精霊を個体として認識する必要があるというだけで』

「そんなこと言ったって……まさかタマなんて付けるわけにもいかないでしょ……？」

あたしが何の気なしにそう言った瞬間。

手のひらに載せた鏡の上で、純精霊がパアッと強い光を放つ。

いや、ちょっと待って。まさか——！？

内心たらりと冷や汗を流したあたしの前で、光は発生した時と同じように急速に弱まっていく。

完全に光が消えたあと、残されていたのはほんのり淡い光をまとった手鏡だけだった。

シンプルな丸い鏡の表面には、鳥の羽のような優美な紋様が描かれている。見る角度によって微妙に色合いの変わる真珠色の紋様は、もちろん最初からそこにあったものではなかった。

「あ……」

『どうやら、気に入ったらしいな』

鏡を見下ろして、ルディンが淡々とした口調で言う。

……タマで決定みたいです。ていうか、そんな名前でもいいのか精霊。

がつくり肩を落としたあたしをよそに、ジオや他の男の人たちは保護した女の子たちを部屋の外へと連れて行き、建物のあちこちで気絶している男たちも嚴重に縄をかけられた上で運び出された。

あたしはルディンを肩に乗せ、いまだ気絶中の親分ネズミと杖を両手に持って建物の外へと出て行く。後ろには13匹の子分ネズミ。外はすでに日が暮れかけていて、建物に出入りする人たちの中にはカンテラを持っている人もいる。ちらちら忙しく動き回る明かりを横目に、あたしは入口から少し離れた場所で壁に寄りかかって息をついた。

「……なんか、ものすごい一日だった気がする」

きつと、これから事情聴取なんかにも付き合わされるんだろうな。そう考えるとさらに疲労感が募ってきて、あたしはスカートを汚さないよう気をつけながらその場にしゃがみ込んだ。

『お前があんな魔術士の術に惑わされたりするからだろう。今回は運良く助かったが、下手をしたら魔力封じの首輪を付けられてどこかに売り飛ばされていたんだぞ。これからはもっと慎重に行動を……』

「うんうん、わかってるから……」

お説教モードが復活してしまったルディンに、あたしは藪蛇だったかと内心後悔しながら脱力した声を返す。

自分でも軽率だったとは思うけど、お説教に付き合う体力なんて残ってないし。

ぐったり顔を伏せたあたしを見て、ルディンは少し心配そうな声になって問いかけた。

『……エーリ、具合が悪いのか？』

「具合が悪いっていうより……疲れた。人生始まって以来のピンチの連続だもん。魔術なんて慣れないもん使ったせいもあるだろうけど……」

ルディンは微妙な間のあと、間違いなくそれが原因だと思うぞ、と低く唸るように言った。

『杖なしで魔術を使っただけでも相当な負担だろうに……純精霊など召喚したのでは、倒れていないのが不思議なくらいだ。というか、どうして平気なんだ？ そいつらをネズミに変えた時よりも今回のほうが魔力の消費は大きいはずだぞ？』

「そんなこと言われたって……あたしにわかるはずないでしょ」

あたしは肩の上のルディンを横目に睨んで言い返す。

「あたしは素人なんだから。専門家のルディンにもわからないようなことが、あたしにわかるわけがないって……」

『……それもそうだな』

ルディンの声にはなにか考え込んでいるような響きがあったけど、あたしはそれには気づかなかった。

とにかく疲れたし、お腹も空いたし——昼からなにも食べてないんだもんなあ。

小さくため息をついた時、頭の中でルディンの声がさっきとは少し別の調子をのぞかせて響いた。

『だが——なんにせよ、お前のおかげで助かった人間がいることも事実だ。そのことだけは誇ってもいいと思うぞ』

あたしはちよつと驚いて、ルディンに目をやる。

鱗だらけの竜の顔は相変わらず表情の読めないものだったけど、あたしを見つめる目には暖かい感情がのぞいているように感じられた。

『あくまでも結果的には、だがな。これからも同じような幸運が続くとは限らんし、できれば同じようなことはくり返さないで欲しいが……まあ、よくやった。エーリ』

慌てたように付け加えたあとで投げられた一言に、あたしは思わず口元が緩む。

「ありがとう、ルディン」

『う……うむ』

唸るように言って視線を逸らすルディンに、あたしはくすりと笑った。

1-18 ちょっとと商標権的にまずそうなので（後書き）

ちょっと短めです。

1-19 魔法の便利な使い方（前書き）

たいへん間が空いて申し訳ありません。しかも全然話が進んでおりません（汗） もし話の続きを楽しみにしていたという奇特な方がおられましたら、前もってお詫び申し上げます。

1-19 魔法の便利な使い方

そのあと、あたしはジオと一緒に警備隊の詰め所まで移動して、あれこれと事情を聞かれたのち、夜遅くになってようやく解放された。

あたしに対して『どこから来たのか』なんて答えに詰まる質問もあったけど、そのあたりはルデインの入れ知恵で適当にごまかしておいた。

さいわいなことにあまり深く突っ込まれることもなく（竜を使い魔に従える魔術士相手に、皆ちよつと腰が引けていたこともあったようだ）、女の子たちが捕まっていたのとは別の部屋で見つかったルデインのポーチも返してもらって、あたしは半分うとうとしながら詰め所をあとにしたのだった。

「う~~~~」

まぶたの裏に光を感じて、あたしはくるまった毛布の中でもぞりと身動きした。

ごわごわした布の感触を頬に感じる。洗濯したてのシーツみたいな——いや、それにしても感触が硬すぎるか。いくらうちではシーツはパリッと糊をきかせるのが鉄則とはいえ、ここまで硬くしちゃうたら完全に失敗——

「……う？」

そこまで考えて、あたしは薄く目を開ける。

目に映ったのは目の粗い生成り色のシーツをかけられたベッドと、うっすら煤けたような色合いの木の壁だった。

ぼんやりしたまま視線を巡らせると、開け放たれた窓が視界に入る。

カーテンなんか窓からは燦々と光が差し込み、あたしの横になっっているベッドの枕元まで白く照らしている。

あたしは何度かまばたきし、ようやくここが昨日ジオに連れられて泊まった宿だということを思いだした。

すっかり時間が遅くなったせいで泊まれる宿がなく、ジオの知人が経営しているというこの宿にお世話になったのだ。真夜中過ぎにやってきたあたしたちを、宿の女主（40過ぎの貫禄たっぷりのおばちゃん……だったと思う）は嫌がる様子もなく迎え入れ、あたしとジオにそれぞれ一室を用意してくれた。

宿に着いた時にはすでに夢の国に旅立ちかかっていたあたしは、お札を言う余裕もなくふらふら部屋に入ってベッドに倒れ込んだ――断片的な記憶はそこで完全に途切れている。

「あゝ、そうだった……宿に泊まったんだっけ。記憶ほとんどないけど……あんまり失礼な行動とってないといいけどなあ……」

シーツに半分頬を埋めたまま、あたしはぶつぶつと口の中で呟く。目が覚めた瞬間、もとの世界に戻っているような錯覚に陥ったせいか、まだ起きあがって動く気にはなれない。

未練がましいとは自分でも思うものの、目を閉じればもうしばらく錯覚に浸っていられるような気がして――

わかってる。錯覚はあくまで錯覚。

どんなに否定しても、あたしがこの世界にいるという現実を変えることはできない。

未練がましい真似をしてないで、さっさと起きあがって〈塔〉に向かうほうがよほど建設的——そんなことは重々承知しているんだけど。

……せめて、あと5分。いや1分でもいいから。

まるでもとの世界で二度寝をする時みたいだと思って、あたしはほんのちょっとだけ口元をほころばせる。

そのまま薄い毛布にくるまって、目をつぶろうとした時——

「あ……あああああっ！ 忘れてた……っ！」

思わず大声を上げて跳ね起きたのは、あたしがすっかりがっちりメイド服を着たままだったことを思い出したためだ。

二度寝なんかしてる場合じゃないよ！ せっかく着替えも手に入れたのに、このままじゃさらに皺が！ せめて寝直すなら着替えてからに！

あたしはベッドを飛び降りると、部屋を見回してベッドの横に杖と一緒に置いてあったポーチを見つけ、中から昨日買った衣服を取り出す。

フリルたっぷりのエプロンを外して、ワンピースの胸元のタイをほどこきボタンに手をかけたところで、

「どうした、エーリ！ 今の声は——」
音を立てて部屋の扉が開き、隙間からジオが顔をのぞかせた。

あたしはほとんど無意識下の動作で、胸元のボタンを全部外し終わったところだった。

バイトのあと少しでも早く家に帰るために、着替えは手早く済ませるのが当たり前になっていたのが——この場合は災いした。

頭では扉が開いたこともジオが顔をのぞかせたことも理解していたんだけど、あたしの手は馴染んだ動作を勝手に続行していたのだ。

「馬鹿——っ！！ ドア閉めて——っ！！」

反射的に投げつけたのが、手近にあった着替えだけだったのはむしろ幸いだったといえるのかもしれない。

「……悪い、まさか着替えてるところだとは思わなかったもんでな」

数分後、今度はノックをしてから恐る恐る扉を開けたジオは、顔を赤くしたまま部屋の中央に立っているあたしに向かって、苦笑をかみ殺しているような真面目な顔を取り繕おうとしているような複雑な表情で言った。

口では謝っているけど、その顔を見れば『見られて騒ぐほどのものじゃないし、見たところで別になんとも思わない』という内心が丸わかりだ。

そりゃあ、平均サイズあるかないかってところですけど。

ボタン外してただけで、別に下着姿だったわけでも……いや、ちょこっとは見えたかもしれないけど。目くじら立てて騒ぐようなもんじゃないってのは重々承知しているんだけど、そこまで平然と

流されるのも年頃の少女としては複雑というか……

「べ、別にいいわよう。大声出したのはこっちが悪かったんだし……」

あたしは襟元までボタンを留め直したワンピース姿で、ジオを部屋に迎え入れる。エプロンとタイは外したままだったけど、面倒臭いのでそのままだ。

ジオの足元をすり抜けるようにして、ルディンが部屋に入ってくる。

『あんな大声を出すから、何事かと思ったぞ……いったいどうしたんだ？』

あたしの肩口に乗っちゃって、心配するともたしなめるともつかない声音で問いかけるルディン。あたしはちょっとばつの悪い思いで目をそらしながら、口には出さずに言葉を返した。

（……なんでもないわよ。その……ちょっと夢見が悪くて。目が覚めたら誰もいないし……ルディンこそ、あたしを置いてどこ行ってたわけ？）

半分八つ当たりのようなあたしの言葉に、ルディンはなんとも微妙な沈黙を返してからやや言いくそうに言った。

『……仮にも若い女性と、同じ部屋で寝泊まりするわけにはいかんだろうが。あのネズミ連中と一緒に、ジオの部屋に泊めてもらったんだ』

……これぞ紳士の対応だよ！ ジオも少しは見習って欲しい。

けど、野宿の時なんかは天幕で一緒に寝てただけど……その辺はいいんだろうか。

『野宿の場合は別だ！　いつなにが起きるかもわからんのに、側を離れるような真似ができるか！　……まあ、お前の場合は街の中だからって安心できるわけではないが。ほんの少し前に身をもって証明してくれたくらいだしな』

ちよっとした好奇心で尋ねてみたら、妙に慌てた口調で言い返された上に皮肉のオマケまで付いてきました。

そう言われると一言も返せないけど……いつまでもネチネチ蒸し返さないで欲しい。

「まあ、何事もなかったんなら良かったけどよ。で、これからどうするんだ？　乗合馬車を探しに行くか？　ちようど王都方面に向かう便がありゃいいんだが……最近では街道周辺に魔獣が出没してるせいで、めっきり便数が減ってるからな」

あたしがルディンと声を出さずに会話している間に、すっかりいつも通りの態度に戻ったジオが軽い口調で尋ねかける。

ルディンとの会話に気を取られてその声を聞き流しそうになり、あたしは慌ててジオに目をやった。

「え……っと、これから——そうね、まず乗合馬車の時間を確認して。ああそれと料金も——便数が減ってるってことは、もしかして予約もいるのかな？」

「そうだな。しておいたほうが確実だろう……定員に満たない限り、運行そのものが取りやめになってる可能性もあるしな」

ジオの心配はあたしの心配（定員がいっぱいで乗れないってことは正反対だったけど、どっちにしても予約はしておいたほうが無難みたいだ。

「わかった……じゃ、とりあえず着替えるから、部屋から出てって

くれない？ あと、その服返して——ぶつけたのは謝るから」

投げつけられた着替えを手に掴んだまま、ジオは手を差し出すあたしを困惑したような顔で見返した。

「着替えるって——これに？　なんでまた……あんた魔術士なんだろう？」

ジオの声はいたって真面目で、あたしは瞬間的にむっとして開きかけた口を閉じる。

魔術士って、服が汚れても着替えをしない人種なんだろうか？
というか、そもそもこの世界の人たちって衛生状態をあんまり気にしない？　日本人のきれい好きは、向こうの世界でも異常なレベルだっというからなあ……

「……魔術士だろうが、汚れた服を着続けるのは嫌なもんなの！
それに理由があって、この服はあんまり汚したくないのよ！」

でもここは、あえて日本人的な潔癖さにこだわることにする。

だって、丸二日着替えるどころか——お風呂にも入ってないんだから！　せめて下着だけでも替えたいと思うのは、女の子として当然のことだと思う！

できることなら、お風呂にだって入りたいよ……この際贅沢は言わないから、せめて身体と髪を洗うだけでもしたい。

宿の人に頼んだら、なんとかならないかなあ……？

そんなことを考えているあたしの肩で、ルディンがなぜか遠慮したように言った。

『あのな……エーリ』

妙に歯切れの悪い口調に、あたしは首を傾げてルディンを見やる。

『言うのを忘れていたんだが……汚れたったら、魔術でいくらでも落とすことができるぞ』

「……え？」

思わず声に出してしまったあたしに、ルディンは申し訳なさそうな目を向ける。

『衣服や身体の汚れを落とす術ならあるんだ。簡単な防護魔術をかけておけば、衣服の強度を上げて汚れ自体付きづらくすることもできるし……魔術士の衣服は、それ自体が魔術に必要な装備であることも多いから』

「……まじですか？」

ぽろりとこぼれ落ちてしまったあたしの言葉に、ルディンは『まじ？』と不思議そうに声を返す。

あたしはその様子にも気づかず、がっくりうなだれて深い深いため息をついた。

そんな便利な魔術があるなんて、考えもしなかった……というか、魔術なんて馴染みのないものに頼る発想が、科学文明の中で生きる現代日本人に生まれるわけないじゃん！

でも、よく考えてみればそれくらいあっても当然だよね。ルディンみたいにあっちこっちの世界に出かけてる魔術士がいるんだもん。よその世界でお風呂になんてそうそう入れるわけがないんだし、まして洗濯なんて……まあ、この世界の人たちが、あんまり衛生に気を遣う性格じゃない（もしくは習慣がない）って可能性もあったけど。

『すまん、お前が着替えを欲しがっているのはてつきり……動きにくいせいだとばかり思っていて。そういえば借り物だと言っていたな……あの時は魔術が使えないと思いこんでいたし、すっかり伝えるのを忘れていた』

本当に、そんな便利な魔術があるなら最初に教えておいて欲しかったよ……

そしたら余計な買い物しなくても済んだだろうし、街の中を歩き回って変な連中にさらわれることだってなかった——かもしれないんだから。

結果的に人助けに繋がったこともあるし、決して後悔はしてないんだけど。一応女の子の端くれとして、ちょっとは怖い思いしたんだぞ。

ため息をついたあたしの顔をルディンは不安そうにのぞきこみ、あたしはその視線に気づくと、気持ちを切り替えるように強く首を振って顔を上げた。

同時にあたしたちをじっと見ているジオの瞳が目に入り、あたしは声に出さずにルディンに話しかけた。

（ルディン、その術教えて。あと——それって服を着たままでも大丈夫なの？ 全身ずぶ濡れになっちゃったりしない？）

『……それじゃ出先では使えないだろう』

呆れたように言ったあとで、ルディンは不思議な響きを持ついくつかの単語をあたしの頭の中に伝えてくれる。

単語と一緒に、花のように広がる図形のイメージが頭に浮かび、あたしはそれが汚れの成分を選んで消去する術だってことを理解した。

そこまでわかるのは奇妙な感じだったけど、呪文ってそういうものなのかな？

ちらりと頭に浮かんだその考えを、あえて意識の片隅に押しやっ

てあたしはベッドに歩み寄ると、その足元のあたりに立てかけられた杖を手取る。

ルディンがなにか話していたけど、あたしの意識には届いていなかった。

細かいことを気にかけていてもしょうがない。今はまず、一番気になっていた衣服と身体の汚れを落とすことを考えよう！

「エクトラ・アムス・ウィ・ディルーネ」

意識を集中してルディンに教えてもらった言葉を唱えると、ふわりと自分のまわりの空気が暖くなるのが感じられた。

同時にぴりっと静電気にも似た痺れが指先に走り、背筋がひやりとする。

よく考えてみれば、あたしの場合普通に術を使っても、とんでもない威力になるんじゃないかなったつけ？

この場合、失敗したら汚れどころか——服まで分解しちゃったりしない？

あたしは慌てて集中を解き、術を中断させようとする。

けど、汚れのことは気になるし——服は着替えればいいけど、王都に行くまでの間定期的にお風呂に入れるかどうかはかなり怪しい。この際だから我慢すればとは思うけど、手軽な解決手段があるんだったら頼りたいというのが正直な気持ちで。

そんな思いが脳裏をよぎり、あたしはぎりぎり術を維持できるかどうかというところまで、意識的に集中をゆるめた。

呪文を唱えるのと同時に、脳裏に浮かんだ図形にいくつも余計な線を足していく。

術が発動するかしないかのきわどいところまで——効率を上げる

ためではなく落とすために手を加え、あたしはゆっくりと最後の言葉
を口にする。

「シャグスリム限定洗浄！」

言葉と同時に足元に光で描かれた輪が現れ、あたしの身体を囲んだ
だまますうつと垂直に浮き上がっていく。

輪の内側は目をこらさなければ見えないような薄い光に満たされ、
光に触れている部分が目に見えて綺麗になっていくのがわかった。
衣服の外側だけでなく、身体の表面に感じていたべたついたような
不快感も消えていく。

頭のとっぺんまで通過した輪が、ぎゅつと凝縮して小さな光の塊
となって消えた時には、あたしはお風呂に入って髪を乾かしたあと
のように全身さっぱりとしていた。

おお、これは便利だ！ 向こうの世界でも使いたいと思える術
に出会ったのは、これが初めてかも。

「……よし、すっきりした！」

満足そうにうなずくあたしを、ジオは面白そうな顔つきでしげし
げと眺めて言った。

「変わった魔術士だな、あんた。そんな便利な術を知ってるなら、
最初から着替えるだのなんだの騒ぐ必要はないだろうに……」

「わ……忘れてたの！ 寝起きでちよっとぼんやりしてたのよ！」

慌てて言い返しながら、あたしは内心でルディンに向かって問い
かける。

（今ので成功？ だったら、やっとまともな威力で術を使えたかも

……！)

『……ああ』

やや呆氣にとられたような口調で、それでも律儀にルディンは応える。

『今回は完全に魔力が制御できてた。驚いたな、きちんとした訓練も受けていないのに、こんな短時間で制御の方法を身につけるとは……』

おし、ルディンのお墨付きも出たぞ！

あたしは内心でガツポーズを握ってから、ほんの少しだけ意地悪な気分になってちらっと横目にルディンを見て言った。

(にしても、自分で威力を調節できたから良かったけど、失敗してたらどうなってたわけ？ まさか服まで分解するのを期待してたわけじゃないよね？)

『な……っ！！』

殴られたような勢いでルディンが飛び上がり、あたふた言葉を探す様子をちよつとばかり痛快な気持ちで眺めやる。

黒い鱗のせいでわからないけど、顔が真っ赤になってるんじゃないだろうか。

『お……お、お前なあっ！ 人の話の続きも聞かず、さっさと勝手に呪文を唱え始めた人間がなにを言う！！』

(え？ なにか言ってた？)

そういえば、呪文を覚えてくれたあとでなにか話してたような気もするけど……呪文に気を取られて忘れてた。

『お前は……まあ、いい。お前の場合、普通の魔術士向けのアドバイスが役に立ったかどうかとも怪しいしな。これまでに何度か使った

術の手応えで、勝手に魔力の調節の仕方を覚えたのだとしても不思議はない——そういうことにしておこう。主に私の精神衛生のために』

言って、ぷいっと顔を背けるルディンをあたしは苦笑混じりに見つめる。

あちゃあ、ちょっとからかい過ぎちゃったか。

（ごめんごめん、冗談だつてば！ それより、さっき言つてた防護魔術っていうの教えてくれない？ これ以上この服破いたり汚したりしたくないし——まあ、ダメなら他の服に着替えるつもりだけど）

せつかく買い込んだのに、無駄にするのももったいない。

着心地はあんまり良くなさそうだけど（特に下着類）、ズボンだったら今よりずっと動きやすくなるだろうし。

さすがに魔獣だの盗賊だの人さらいだのと格闘する機会がさらにあるとは思えなかったが、なにが起きるかわからない以上、動きやすい格好をしていたほうがいいのは確かだ。

（ううん……やっぱり着替えることにする。ちよつとジオに待つてもらって……）

『レクディサ・ルイエ・ダム・ヲールエイ——ウイクラスル繊維強化』

早口にルディンが呪文らしきものを口にし、あたしはジオに向き直りかけた体勢のまま動きを止める。

えーと……今のつて、もしかして？

微妙な視線を向けるあたしに、ルディンはふて腐れたようにそっぽを向いたまま、ぶっきらぼうな口調で言った。

『汚す心配がないのだったら、着替える必要はないのだろうか？』

（まあ……そうだけど。でもズボンのほうが、いざって時に動きやすいかなあって……）

『いざというのはどんな時だ？ この上さらに、まだ危険なことに巻き込まれるつもりか？ 私を心労で早死にさせたいのか？』

（そんなつもりは毛頭ないけど……これまでだって、別に好きで巻き込まれていたわけじゃないんだし。この先だってなにが起るかわからないでしょ？）

巻き込まれないで済むのなら、あたしだって危険なことや厄介なことになんて巻き込まれたくはない。

だけど、そうそう望み通りにいかないのが人生って奴なのだ。

『それはわかっている……が、下手に動きやすい格好などしたら、お前のことだからますます厄介事や面倒なことに自分から首を突っ込んでいく気がするぞ』

う……それは、あんまり否定できないかもしれない。

頭では関わらないほうがいいとわかっていても、理不尽な場面なんかを目にしたら身体が勝手に動いてしまう性分だからなあ。

『……それに、その服はお前に似合っていると思うし』

ぼそりとルディンが付け加えた声はごく小さく、直接意識に伝わってくるものでなかったらほとんど聞き取れなかったかもしれない。

……もしかして褒めてもらったのだろうか、これは？

あたしはなんとなく気恥ずかしい気分で、ルディンの顔を見ないようにしながらさっき聞き取った呪文を、声に出して唱え始めたのだった。

1-19 魔法の便利な使い方（後書き）

どうでもいい話で一話使ってしまった。しかもこれまでで一番長い・・・でもこういうどうでもいい部分にこだわって書きたかったのです！ 倒れて悔いなし。でも真面目に話の続きを楽しみにしている方がいたら、本当にごめんなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0098s/>

女子高生メイドの異世界旅行記

2011年11月29日23時28分発行